

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(26)

市内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

奥ノ仁田遺跡
長迫遺跡
二石遺跡
小浜貝塚
種子島家屋敷内

2014年3月

鹿児島県西之表市教育委員会

序 文

種子島は、古くから自然の恵みを受け豊かな環境のもとにあることから、旧石器時代から歴史時代までの遺跡が多数所在し、貴重な資料が数多く出土しています。

この市内遺跡等発掘調査は国と県の補助を受け、平成23年度に西之表市東南部の立山奥ノ仁田遺跡、安城長迫・二石遺跡、平成24年度に国上小浜貝塚、麓集落のひとつである種子島家屋敷内の調査実施し、平成25年度にその成果としてまとめたものであります。

調査期間が短く、それぞれの遺跡の広がりや遺構などを確認するための発掘調査であったため、十分な成果を得ることができなかつた面もありますが、ある程度の遺跡の位置付けをすることができました。

本書が、学術研究や市民の文化財保護意識高揚の一助となり、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、調査の実施にあたって終始、ご協力をいただきました鹿児島県教育庁文化財課及び同県立埋蔵文化財センターをはじめ、立山地区、安城地区、国上地区及び種子島家屋敷を管理・運営していただいている月窓亭ひとつ葉の会の関係者、さらに貴重な助言をいただいた諸先生方に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

西之表市教育委員会教育長 立 石 望

報 告 書 抄 録

ふりがな	おくのにたいせき、ながさこいせき、ふたつしいせき、おぼまかいづか、たねがしまけやしきない							
書名	奥ノ仁田遺跡、長迫遺跡、二石遺跡、小浜貝塚、種子島家屋敷内							
副書名	市内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	26							
編集者名	和田正樹							
編集機関	西之表市教育委員会							
所在地	〒891-3193 鹿児島県西之表市西之表7612番地							
発行年月日	2014年3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おくのにたいせき 奥ノ仁田遺跡	西之表市 立山	462136	66	30度36分55秒	131度02分30秒	20120124～ 20120206	18.5 m ²	詳細分布
ながさこいせき 長迫遺跡	西之表市 安城	462136	106	30度38分30秒	131度03分12秒	20120217～ 20120229	36.5 m ²	詳細分布
ふたつしいせき 二石遺跡	西之表市 安城	462136	124	30度38分15秒	131度03分12秒	20120209～ 20120217	28.5 m ²	詳細分布
おぼまかいづか 小浜貝塚	西之表市 国上	462136	3	30度49分10秒	131度02分16秒	20121022～ 20121116	19.0 m ²	詳細分布
たねがしまけやしきない 種子島家屋敷内	西之表市 西之表	462136		30度44分06秒	131度00分01秒	20130128～ 20130204	57.0 m ²	詳細分布
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
奥ノ仁田遺跡	散布地	縄文時代草創期・早期				出土遺物なし		平成5年発掘調査 (出土品は県文化財に指定)
長迫遺跡	散布地	縄文時代早期				土器片・石器類		
二石遺跡	散布地	縄文時代早期				土器片・石器類		
小浜貝塚	散布地	縄文時代前期 弥生・古墳時代				土器片・石器類・貝製腕輪・貝類・獣骨類ほか		
種子島家屋敷内	集落跡	近世・近代		柱穴12基・溝状遺構2基		陶磁器類ほか		屋敷(建造物)は市文化財に指定

例 言

1. 本書は国・県の補助を受け実施した市内遺跡発掘調査等事業に伴う、奥ノ仁田遺跡，長迫・二石遺跡，小浜貝塚，種子島家屋敷内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は，西之表市教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 本書の遺物番号は遺跡ごとに通し番号を付け，各遺跡の本文及び挿図・図版番号と一致する。
4. 発掘調査における測量・実測及び写真撮影は和田が行った。
5. 本書の執筆と編集は和田が行い，実測及び浄書は和田・荒木眞紀子・宇都美保子が行った。
6. 写真図版の遺物撮影は，和田が行った。
7. 発掘調査及び整理作業に関して，鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得た。
8. 出土遺物は西之表市教育委員会で保管し，展示・活用する。

目次

序文

報告書抄録

例言

奥ノ仁田遺跡

第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯……………2

第2節 調査の組織……………2

第3節 調査の経過……………2

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置……………4

第2節 遺跡の環境……………4

長迫遺跡

第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯……………15

第2節 調査の組織……………15

第3節 調査の経過……………15

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置……………17

第2節 遺跡の環境……………17

第III章 発掘調査の概要

二石遺跡

第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯……………40

第2節 調査の組織……………40

第3節 調査の経過……………40

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置……………42

第2節 遺跡の環境……………42

第III章 発掘調査の概要

小浜貝塚

第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯……………68

第2節 調査の組織……………68

第3節 調査の経過……………68

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と環境……………70

第III章 発掘調査の概要

第1節 調査方法……………72

第III章 発掘調査の概要

第1節 調査の方法……………7

第2節 層位……………7

第3節 トレンチ調査状況……………7

第4節 遺構・遺物……………7

第IV章 調査のまとめ

第1節 遺跡の範囲等……………10

第2節 調査のまとめ……………10

第1節 調査方法……………20

第2節 層位……………20

第3節 各トレンチの調査……………20

第4節 遺構……………23

第5節 遺物……………23

第IV章 調査のまとめ

第1節 遺跡の範囲等……………31

第2節 調査のまとめ……………31

第1節 調査方法……………45

第2節 層位……………45

第3節 各トレンチの調査……………45

第4節 遺構……………48

第5節 遺物……………48

第IV章 調査のまとめ

第1節 遺跡の範囲等……………58

第2節 調査のまとめ……………58

第2節 層位……………72

第3節 トレンチ調査状況……………72

第4節 遺構……………74

第5節 遺物……………74

第IV章 調査のまとめ

第1節 遺跡の範囲等……………86

第2節 調査のまとめ……………86

種子島家屋敷内

第I章 調査の経過

- 第1節 調査に至る経緯……………99
- 第2節 調査の組織……………99
- 第3節 調査の経過……………99

第II章 遺跡の位置と環境

- 第1節 遺跡の位置と環境……………101

第III章 発掘調査の概要

- 第1節 調査方法……………104

- 第2節 層位……………104

- 第3節 トレンチ調査状況……………104

- 第4節 遺構……………104

- 第5節 遺物……………108

第IV章 調査のまとめ

- 第1節 遺跡の範囲等……………113

- 第2節 調査のまとめ……………113

挿図目次

奥ノ仁田遺跡

- 第1図 奥ノ仁田遺跡位置図……………1
- 第2図 奥ノ仁田遺跡と周辺遺跡図……………5
- 第3図 トレンチ配置図……………8

長迫遺跡

- 第1図 長迫遺跡位置図……………14
- 第2図 長迫遺跡と周辺遺跡図……………18
- 第3図 トレンチ配置図……………21
- 第4図 土層断面図……………22
- 第5図 遺物出土状況(1)……………24
- 第6図 遺物出土状況(2)……………25

二石遺跡

- 第1図 二石遺跡位置図……………39
- 第2図 二石遺跡と周辺遺跡図……………43
- 第3図 トレンチ配置図……………46
- 第4図 土層断面図……………47
- 第5図 遺物出土状況(1)……………49
- 第6図 遺物出土状況(2)……………50

小浜貝塚

- 第1図 小浜貝塚位置図……………67
- 第2図 小浜貝塚と周辺遺跡図……………71
- 第3図 トレンチ配置図……………73
- 第4図 出土遺物(1)……………78
- 第5図 出土遺物(2)……………79

種子島家屋敷内

- 第1図 種子島家屋敷位置図……………98
- 第2図 種子島家屋敷と周辺遺跡図……………102
- 第3図 トレンチ配置図……………105
- 第4図 遺構検出状況……………106

- 第4図 土層断面図……………9
- 第5図 遺物・遺構残存予測地……………11

- 第7図 出土遺物(1)……………26
- 第8図 出土遺物(2)……………27
- 第9図 出土遺物(3)……………28
- 第10図 出土遺物(4)……………29
- 第11図 遺跡の分布範囲……………32

- 第7図 出土遺物(1)……………51
- 第8図 出土遺物(2)……………52
- 第9図 出土遺物(3)……………53
- 第10図 出土遺物(4)……………54
- 第11図 出土遺物(5)……………55
- 第12図 遺跡の分布範囲……………59

- 第6図 出土遺物(3)……………80
- 第7図 出土遺物(4)……………83
- 第8図 出土遺物(5)……………84
- 第9図 小浜貝塚の分布範囲……………87

- 第5図 出土遺物(1)……………110
- 第6図 出土遺物(2)……………111
- 第7図 出土遺物(3)……………112
- 第8図 遺構等残存範囲……………114

表目次

奥ノ仁田遺跡

第1表 周辺遺跡地名表……………6

第2表 トレンチ調査状況……………7

長迫遺跡

第1表 周辺遺跡地名表……………19

第3表 土器観察表……………30

第2表 トレンチ調査状況……………20

第4表 石器観察表……………30

二石遺跡

第1表 周辺遺跡地名表……………44

第4表 土器観察表(2)……………57

第2表 トレンチ調査状況……………45

第5表 石器観察表……………57

第3表 土器観察表(1)……………56

小浜貝塚

第1表 周辺遺跡地名表……………70

第5表 土器観察表(1)……………81

第2表 トレンチ調査状況……………72

第6表 土器観察表(2)……………82

第3表 貝類集計表(1)……………74

第7表 石器・軽石製品・貝製品観察表……………85

第4表 貝類集計表(2)……………75

種子島家屋敷内

第1表 周辺遺跡地名表……………103

第4表 遺物観察表(1)……………108

第2表 トレンチ調査状況……………104

第5表 遺物観察表(2)……………109

第3表 遺構一覧表……………107

写真図版

奥ノ仁田遺跡

図版1 調査状況(1)……………12

図版2 調査状況(2)……………13

長迫遺跡

図版1 調査状況(1)……………33

図版3 調査状況(3)……………35

図版5 出土遺物(2)……………37

図版2 調査状況(2)……………34

図版4 出土遺物(1)……………36

図版6 出土遺物(3)……………38

二石遺跡

図版1 調査状況(1)……………60

図版4 出土遺物(1)……………63

図版7 出土遺物(4)……………66

図版2 調査状況(2)……………61

図版5 出土遺物(2)……………64

図版3 調査状況(3)……………62

図版6 出土遺物(3)……………65

小浜貝塚

図版1 調査状況(1)……………88

図版5 出土遺物(2)……………92

図版9 出土遺物(6)……………96

図版2 調査状況(2)……………89

図版6 出土遺物(3)……………93

図版10 出土遺物(7)……………97

図版3 調査状況(3)……………90

図版7 出土遺物(4)……………94

図版4 出土遺物(1)……………91

図版8 出土遺物(5)……………95

種子島家屋敷内

図版1 調査状況(1)……………115

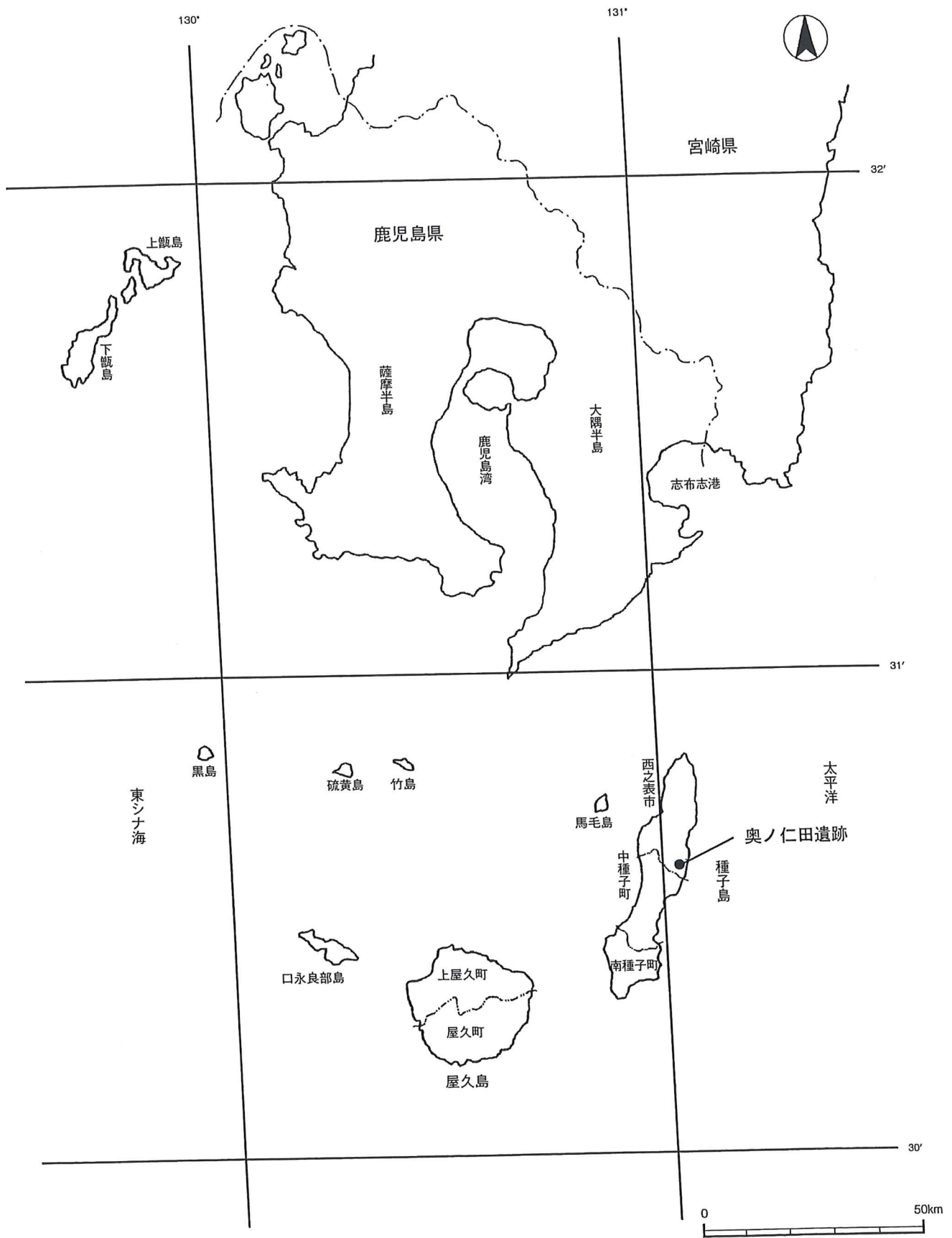
図版3 調査状況(3)……………117

図版5 出土遺物(2)……………119

図版2 調査状況(2)……………116

図版4 出土遺物(1)……………118

奥ノ仁田遺跡



第1図 奥ノ仁田遺跡位置図

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

平成 5 年、西之表市教育委員会過疎基幹農道整備事業（立山地区）に伴う奥ノ仁田遺跡の発掘調査を鹿児島県立埋蔵文化財センターの調査支援を受け実施した。調査の結果、縄文時代草創期の多量の遺物・遺構が発見され、南九州の縄文時代草創期を代表する遺跡の一つとなり、出土品の一部は平成 11 年 3 月鹿児島県の文化財に指定された。その後、遺跡の詳細な範囲を探るため、平成 12 年度から 13 年度にかけて詳細分布調査を行い、縄文時代草創期の遺跡に隣接する南側台地を中心に縄文時代早期の遺跡が形成されていたことが確認された。

今回の調査は、中山間地域総合整備事業（西之表地区）に伴うもので、工事対象地の一部が奥ノ仁田遺跡の東端に該当し、また隣接地にも及ぶため、十分遺跡が残存している可能性が高いことから、西之表市教育委員会は平成 23 年度国・県の補助を受け詳細分布調査を行った。報告書作成に伴う整理作業は平成 25 年度に行った。

第 2 節 調査の組織

（発掘調査）

発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教 育 長 立 石 望
発掘調査企画	西之表市教育委員会 社会教育課 課 長 奥村 学 西之表市教育委員会 社会教育課 係 長 沖田純一郎
発掘調査担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主 査 和田 正樹
発掘調査指導	鹿児島県教育庁文化財課
発掘調査作業員	竹之内正春・牧瀬雄二・鮫嶋敏子・松下幸弘・松下和弘

（整理作業）

発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教 育 長 立 石 望
発掘調査企画	西之表市教育委員会 社会教育課 課 長 中村 章二 西之表市教育委員会 社会教育課 課長補佐 沖田純一郎
整理作業員担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主 査 和田 正樹
整理作業員	荒木眞紀子・宇都美保子

第 3 節 調査の経過

調査は平成 24 年 1 月 24 日から 2 月 6 日まで工事対象地を中心に行った。現況から山林地帯と一部コンクリート舗装を施した 3m 未満の幅員狭小な農道であるため、隣接する畑地内や雑木伐採後に整地を行うなど作業環境に配慮したトレンチを設定し、調査を行った。なお、西側畑地は同意が得られず今回の調査を断念した。以下調査の経過については日誌抄をもってかえる。

1月24日	火	トレンチ周辺の雑木等の伐採及び整備。
25日	水	1・2・3 トレンチ設置後、重機による表土剥ぎ。
26日	木	1 トレンチ掘下げ。トレンチ内清掃、写真撮影。トレンチ配置図作成。
27日	金	1 トレンチ土層断面図作成。2・3 トレンチ掘下げ。2 トレンチ清掃、写真撮影、配置図作成。
1月31日	火	2 トレンチ土層断面図作成。3・4 トレンチ掘り下げ、トレンチ配置図作成。
2月3日	木	1・2 トレンチ重機にて埋戻し。3 トレンチ掘り下げ。4 トレンチ清掃、写真撮影、土層断面図作成。
6日	月	3 トレンチ清掃、写真撮影、土層断面図作成。3～4 トレンチ重機にて埋戻し。調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

奥ノ仁田遺跡は大隅半島の最南端にある佐多岬の東南海上約 54 km に位置する種子島西之表市に所在する。種子島から薩南諸島、さらに奄美・沖縄諸島と蜿蜒 1,200 km の海の飛び石が続き、これらの島々には南から北へと黒潮が走っている。

種子島は南北約 52 km、東西 12 km の北北東から南南西に細長く伸びた、最高標高でも 282.3 m しかない低平な細長い島で、地形は丘陵地の山地、海岸段丘、河川周辺の沖積低地からなり、西方に約 20 km 離れた九州最高峰の標高 1935.5 m もある宮之浦岳を有する屋久島とは対照的である。また、西海岸には比較的砂丘が発達しているが、東海岸は段丘に富んでいる。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町の 1 市 2 町からなる。奥ノ仁田遺跡は西之表市の東南部にあり、太平洋に臨む標高 133 m の台地上に立地する。平成 5 年農道整備に伴う発掘調査で出土した出土品の一部は、平成 11 年鹿児島県文化財（有形文化財：考古資料）に指定されている。

種子島は旧石器時代から歴史時代まで数多くの遺跡があり、最近の調査では、旧石器時代・縄文時代草創期の調査で全国的に注目を浴びるようになった。旧石器時代の遺跡では種子島で初めて約 3 万年前の礫群が検出された横峯遺跡（南種子町）や礫群・石器類・土坑が検出された立切遺跡（中種子町）などがあり、また平成 18 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査を行った大津保遺跡（中種子町）では約 3 万年前の落とし穴が 12 基検出され、現時点では日本最古となる可能性が高いものである。

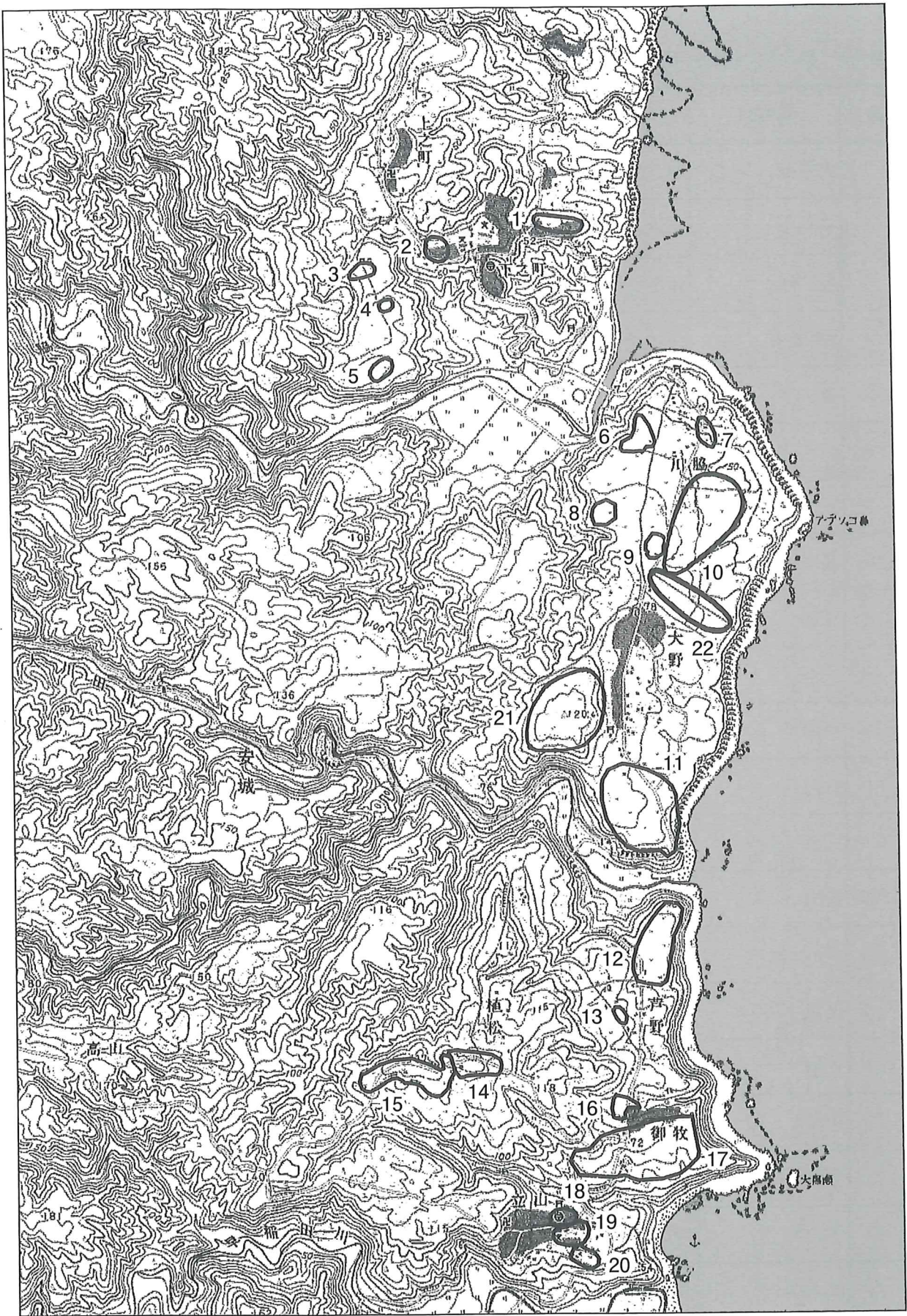
縄文時代では、近年の調査で縄文時代草創期の良好な資料・遺構が相次いで発見されている。奥ノ仁田遺跡の調査をきっかけに、三角山遺跡（中種子町）・鬼ヶ野遺跡（西之表市）・横峯 C・D 遺跡（南種子町）での調査で隆帯体文土器片や石器類、多数の遺構が発見され注目を集めた。また磨製の石槍が数十本出土し東日本との文化の交流を窺わせる園田遺跡（中種子町）などがある。その後の縄文時代早期では前平式・吉田式・下剥峯式・塞ノ神式・平楯式などが出土した遺跡の報告例が多数あり、また最近の調査で報告例が少なかった押型文土器や手向山式土器の出土報告例も多数増えてきている。

前期の遺跡では轟式・曾畑式土器が出土する遺跡が多く、主な遺跡名を挙げると種子島で初めて発掘調査が行われた本城遺跡（西之表市）をはじめ、島内各地で確認されているが、中期の遺跡の様相は不明な点が多く、遺跡の数も現時点では皆無に等しい。後期では指宿式・一湊式・納曾式・磨消縄文・綾式などの報告例がある。晩期の遺跡では黒川式の報告例がある。

その後の弥生時代・古墳時代の遺跡として、出土品の一部が国の重要文化財に指定された広田遺跡（南種子町）に代表される埋葬址などを含め島内各地で確認されているが、弥生・古墳時代の遺跡は縄文時代の遺跡数に比べると、発掘調査例や表面採集資料も少ないため、未解明な点が多いのが現状である。

第2節 遺跡の環境

奥ノ仁田遺跡が所在する西之表市の東南海岸部、立山・安城地区は近年開発事業のため発掘調査が毎年実施され、良好な資料が出土している。特に奥ノ仁田遺跡と同じ縄文時代草創期（約 12,000 年前）の遺跡である、平成 13 年に調査が行われた鬼ヶ野遺跡からは多量の遺物及び遺構が検出され、出土品は県の文化財に指定された。また、周辺では縄文時代早期前葉から終末期までの遺跡が相次いで発見され、今後も増加していくものと思われる。種子島の縄文時代草創期・早期文化を考察するうえで、重要な場所である。



第2図 奥ノ仁田遺跡と周辺遺跡図

第1表 奥ノ仁田遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	仮屋園	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成10年農政分布調査
2	通利山	西之表市安城上之町	縄文時代	平成13年県道分布調査 平成15年試掘調査
3	鬼ヶ野A	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
4	鬼ヶ野B	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
5	鬼ヶ野	西之表市安城上之町	縄文時代草創期	平成13年発掘調査 出土品は県文化財に指定
6	日守C	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
7	三本松	西之表市安城川脇	縄文時代早期	平成17・18年発掘調査
8	日守B	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
9	日守	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成7・8年確認調査
10	長迫	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成25年発掘調査
11	東前平	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成14・15年発掘調査
12	芦野	西之表市立山芦野	縄文時代早期	平成16年発掘調査
13	九郎三ツ門	西之表市立山芦野	縄文時代	平成3年農政分布調査
14	奥嵐	西之表市立山植松	縄文時代早期	平成5年発掘調査
15	奥ノ仁田	西之表市立山植松	縄文時代草創期・ 早期	平成5年発掘調査 出土品は県文化財に指定
16	尾呂ノ平	西之表市立山御牧	縄文時代	平成13年県道分布調査
17	長崎	西之表市立山御牧	縄文時代	平成13年県道分布調査
18	中園A	西之表市立山立山	縄文時代早期	平成25年発掘調査
19	中園B	西之表市立山立山	縄文時代早期	平成25年発掘調査
20	下ノ平	西之表市立山立山	縄文時代	平成13年県道分布調査
21	鍬ノ刃	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成17・18年発掘調査
22	二石	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成23年詳細分布調査

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 調査方法

調査は平成24年1月24日から2月6日まで実施した。トレンチは工事対象地となっている山林地帯と農道に隣接する畑地内に4カ所設置し表土を重機で除去した後、人力で掘り下げながら、慎重に調査を行った。調査面積は約18.5㎡になった。

第2節 層位

土層は場所によって、一部の層が欠落している部分も確認されたが、基本的には下記のとおりである。

I層	表土	
II層	黒色土	
III層	黄橙色火山灰層	アカホヤ火山灰層（約6,400年前の鬼界カルデラ噴出物）
IV層	ベージュ色ローム土	遺物包含層
V層	暗褐色土	
VI層	黄褐色ローム層	
VII層	明黄色火山灰土	AT火山灰層（始良カルデラの噴出物細粒）
VIII層	暗黄色ローム層	粘質が強く、場所によって赤みが増す（下位には小片の砂岩礫が散在する）

第3節 トレンチ調査状況

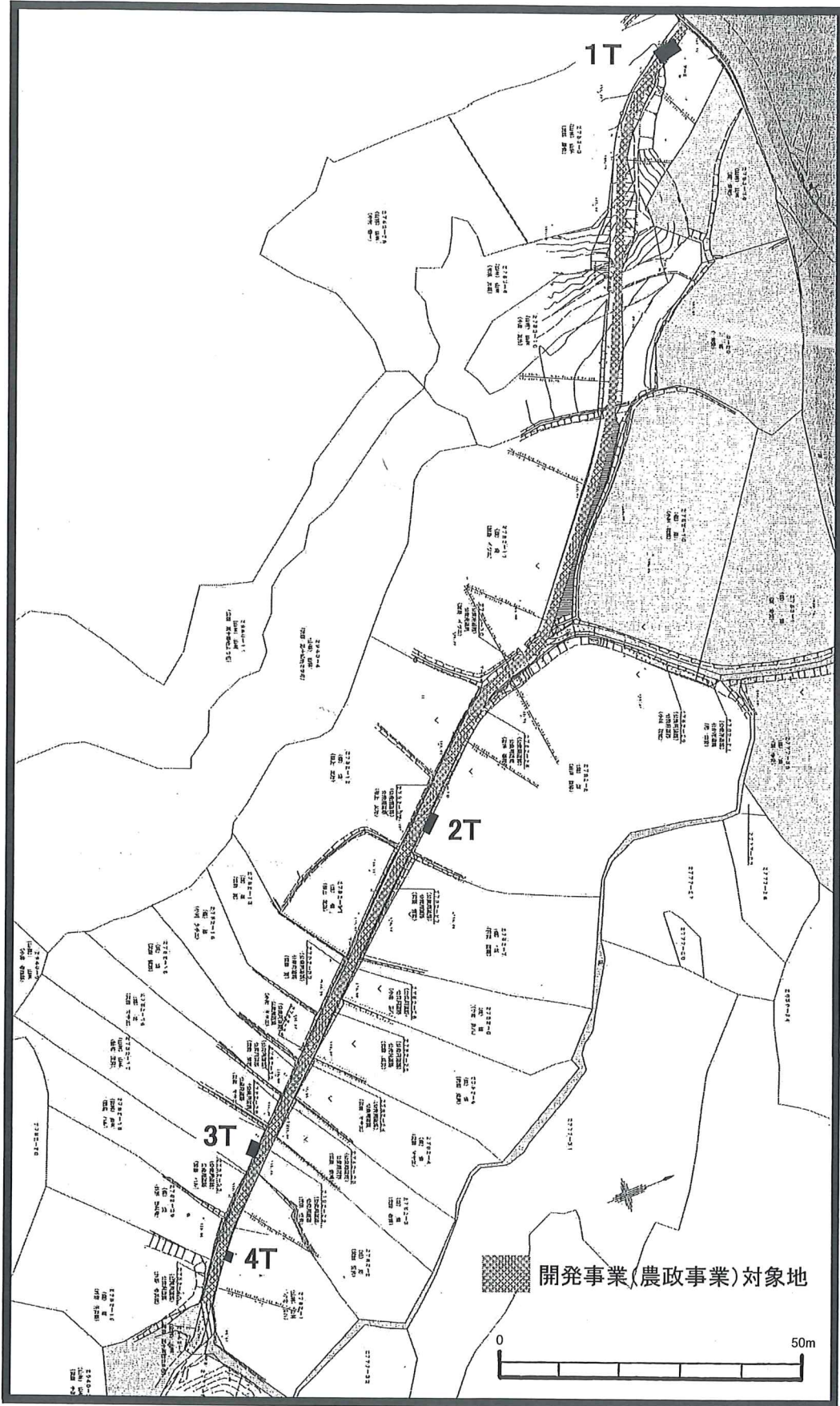
各トレンチの調査状況は下記のとおりである。

第2表 トレンチ調査状況

トレンチ番号	大きさ (m)	深さ (cm)	最下層	遺物	遺構	備考
1	4×2	148	暗黄色ローム	×	×	II層～VII層削平
2	4×1	150	暗黄色ローム	×	×	II層～III層削平
3	3×1.5	186	暗褐色土	×	×	
4	1×2	112	暗黄色ローム	×	×	I層～VII層削平

第4節 遺構・遺物

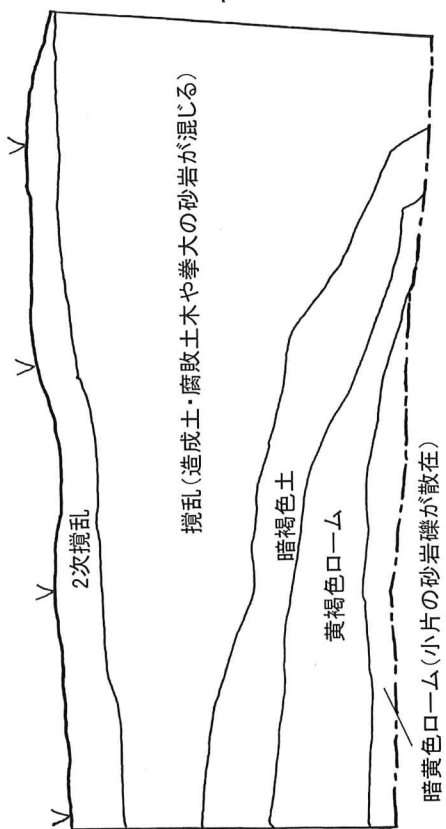
3 トレンチは土層の堆積状況が良好で、縄文時代早期相当の遺物が出土するアカホヤ火山灰層下位に位置するベージュ色ローム層が確認されたが、遺構・遺物等は出土しなかった。また、1・2・4 トレンチは削平・攪乱が著しく、同様に遺構・遺物等は出土しなかった。



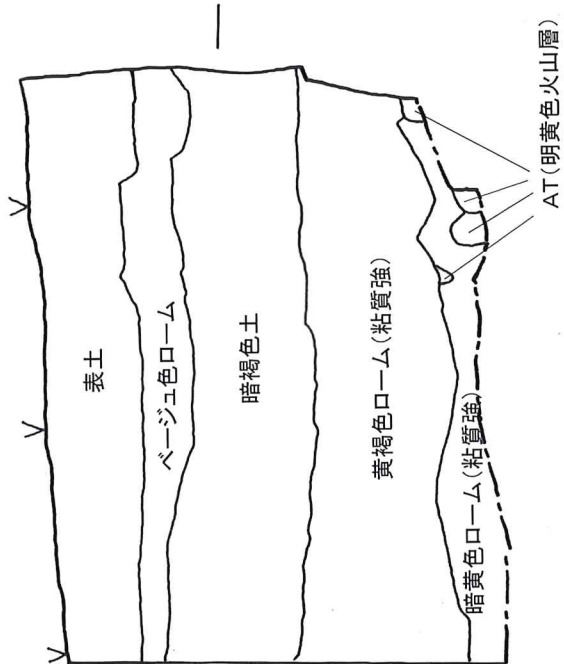
第3図 トレンチ配置図



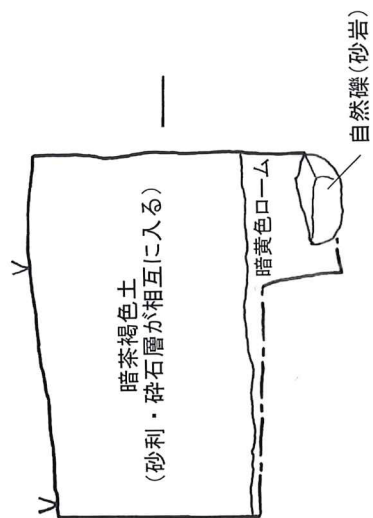
第3トレンチ東側土層断面図



第1トレンチ東側土層断面図



第2トレンチ西側土層断面図



第4トレンチ西側土層断面図



第4図 土層断面図

第IV章 調査のまとめ

第1節 遺跡の範囲等

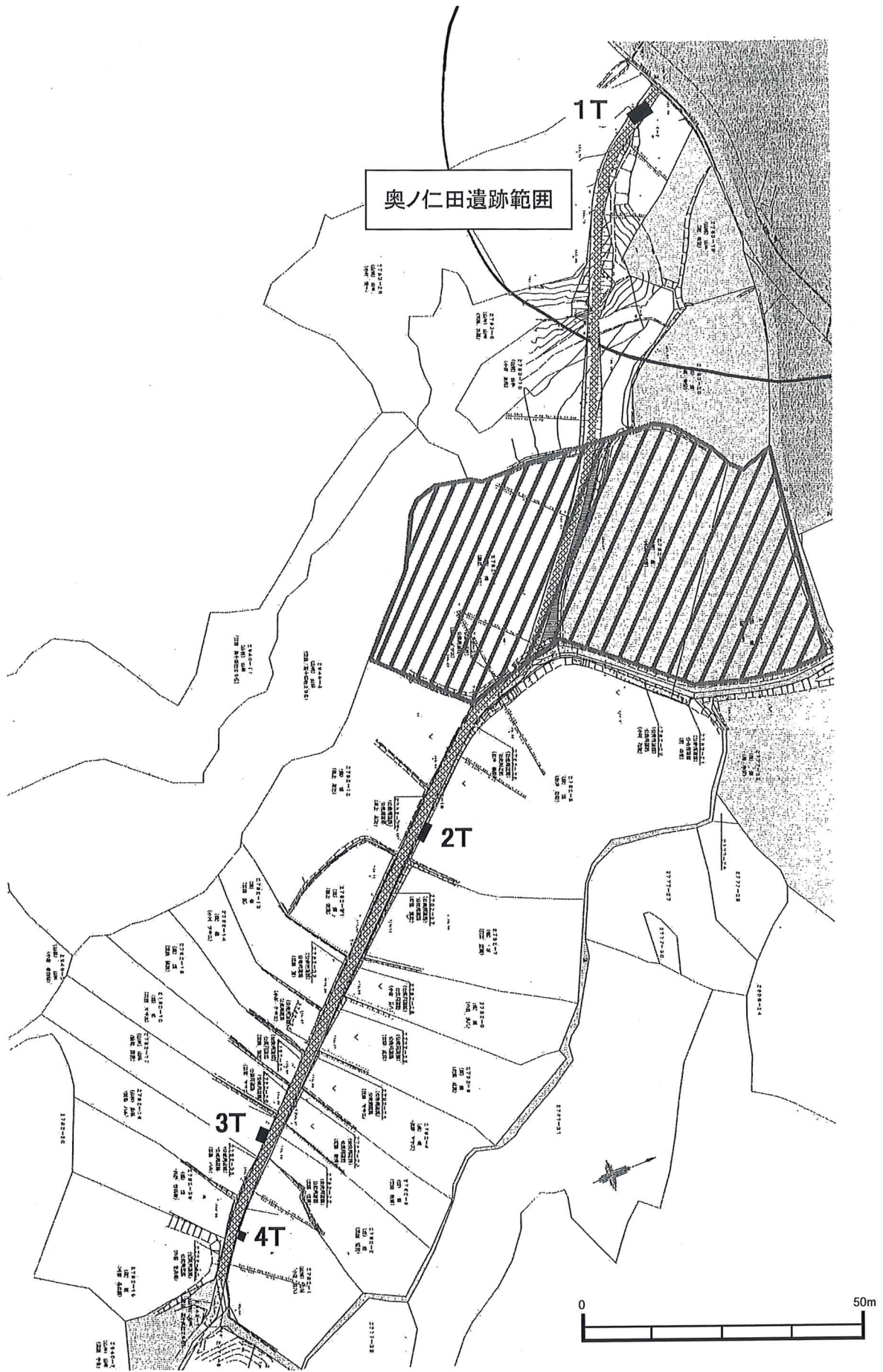
調査を行った結果、工事対象地である山林地帯及び農道周辺部のほとんどがすでに開発等により削平が行われていること、また地形から遺物包含層が残存しないと判断した。ただし、今回の調査で同意が得られなかった西側畑地は周囲と比較し、ひと際高いところに位置しているため、残存している可能性は高い。

第2節 調査のまとめ

今回の調査では、大部分が削平を受けており、遺物・遺構は発見されなかった。

1 トレンチは奥ノ仁田遺跡の範囲内ではあるが、かなり削平が行われており、埋め戻した跡が確認された。2・3 トレンチは一部アカホヤ火山灰層下位に位置するベージュ色ローム層が検出されたものの、遺構・遺物等は出土しなかった。4 トレンチは砂利や碎石が相互に混入し、削平が顕著であった。

遺跡の立地する地形や調査結果から、工事対象地の西側山林地帯及び農道を中心とした東側畑地帯は、遺物包含層が残存しないことが判明した。今回調査ができなかった西側畑地帯に残存している可能性が高いため、今後機会があれば調査を行い、遺跡の範囲を明らかにしたい。



第5図 遺物・遺構残存予測地

写真図版



調査地遠景(1トレンチ)



調査地遠景(2～4トレンチ)



1トレンチ調査状況



1トレンチ調査状況



2トレンチ調査状況



2トレンチ調査状況

調査状況 (1)



3トレンチ調査状況



3トレンチ調査状況



4トレンチ調査状況



4トレンチ調査状況



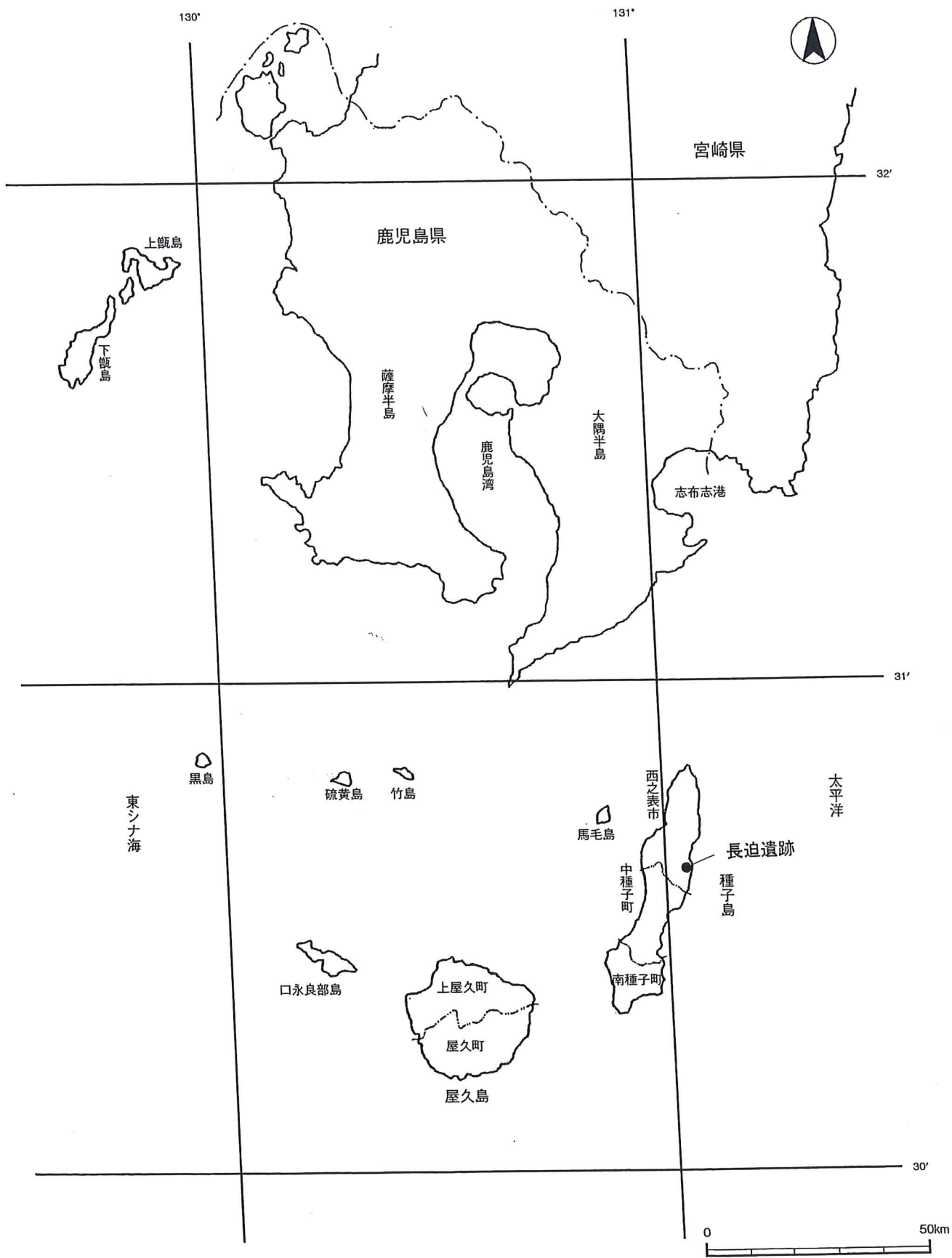
4トレンチ調査状況



4トレンチ調査状況

調査状況 (2)

長迫遺跡



第1図 長迫遺跡位置図

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

西之表市教育委員会は平成 23 年度から平成 24 年度まで国・県の補助事業を受け市内遺跡詳細分布調査を実施しており、平成 23 年度には奥ノ仁田遺跡と長迫遺跡・二石遺跡の調査を行った。長迫遺跡・二石遺跡はともに隣接する遺跡で、平成 25 年・26 年度に市営農道改築事業に伴う工事が予定されており、また周辺には縄文時代草創期・早期の貴重な資料が出土している重要な遺跡が数多く、それらとのつながりを探る目的も含め、工事対象地を中心に詳細分布調査を実施することとなった。発掘調査は西之表市教育委員会が調査主体となり、平成 24 年 2 月 17 日から 2 月 29 日まで行った。報告書作成に伴う整理作業は平成 25 年度に行った。

第 2 節 調査の組織

(発掘調査)

発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教 育 長 立石 望
発掘調査企画	西之表市教育委員会 社会教育課 課 長 奥村 学
	西之表市教育委員会 社会教育課 係 長 沖田純一郎
発掘調査担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主 査 和田 正樹
発掘調査指導	鹿児島県教育庁文化財課
発掘調査作業員	竹之内正春・牧瀬雄二・鮫嶋敏子・松下幸弘・松下和弘

(整理作業)

発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教 育 長 立石 望
発掘調査企画	西之表市教育委員会 社会教育課 課 長 中村 章二
	西之表市教育委員会 社会教育課 課長補佐 沖田純一郎
整理作業員担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主 査 和田 正樹
整 理 作 業 員	荒木眞紀子・宇都美保子

第 3 節 調査の経過

調査は工事対象地に隣接する畑地内に 6 カ所トレンチを設置し、表土を重機で除去した後、人力で掘り下げ遺物包含層の有無を調査した。トレンチの大きさは遺物の出土状況や土層確認のため適宜変更するなどした。

以下、調査の経過については日誌抄をもってかえる。

2月17日	金	1・2 トレンチ設置，重機による表土剥ぎ後，掘り下げ開始。2 トレンチベージュ色ローム層より遺物出土する。
20日	月	1・2 トレンチ掘り下げ，清掃，写真撮影。 沖田文化係長，中種子町教育委員会社会教育課山元氏，高磯氏来跡。
21日	火	1・2 トレンチ平板測量，断面図作成。1 トレンチ，レベル遺物取り上げ。 3・4・5・6 トレンチ設置，重機による表土剥ぎ後，掘り下げ開始。 3・4・5 トレンチより遺物出土する。
22日	水	3・5 トレンチ清掃，写真撮影。 4・6 トレンチ掘り下げ。
23日	木	3・5 トレンチ平板・レベル遺物取り上げ。 6 トレンチ清掃，写真撮影。 4 トレンチ掘り下げ。
27日	月	3・5・6 トレンチ土層断面図作成。 4 トレンチ清掃，写真撮影，
29日	水	4 トレンチ平板・レベル遺物取り上げ，土層断面図作成。道具等後片付け。 重機により全トレンチ埋め戻し。調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

長迫遺跡・二石遺跡は大隅半島の最南端にある佐多岬の東南海上約 54 kmに位置する種子島西之表市に所在する。種子島から薩南諸島、さらに奄美・沖縄諸島と蜿蜒 1,200 kmの海の飛び石が続き、これらの島々には南から北へと黒潮が走っている。

種子島は南北約 52 km、東西 12 kmの北北東から南南西に細長く伸びた、最高標高でも 282.3m しかない低平な細長い島で、地形は丘陵地の山地、海岸段丘、河川周辺の沖積低地からなり、西方に約 20 km 離れた九州最高峰の標高 1935.5m もある宮之浦岳を有する屋久島とは対照的である。また、西海岸には比較的砂丘が発達しているが、東海岸は段丘に富んでいる。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町の 1 市 2 町からなる。長迫遺跡・二石遺跡は西之表市の東南部安城大野の標高約 56m の海岸段丘上に位置し、遺跡の東側には太平洋に臨むことができる。周辺と比べ、一段高い位置に両遺跡は寄り添うように台地の先端部分に形成されている。

種子島は旧石器時代から歴史時代まで数多くの遺跡があり、最近の調査では、旧石器時代・縄文時代草創期の調査で全国的に注目を浴びるようになった。旧石器時代の遺跡では種子島で初めて約 3 万年前の礫群が検出された横峯遺跡（南種子町）や礫群・石器類・土坑が検出された立切遺跡（中種子町）などがあり、また平成 18 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査を行った大津保遺跡（中種子町）では約 3 万年前の落とし穴が 12 基検出され、現時点では日本最古となる可能性が高いものである。

縄文時代では、近年の調査で縄文時代草創期の良好な資料・遺構が相次いで発見されている。奥ノ仁田遺跡の調査をきっかけに、三角山遺跡（中種子町）・鬼ヶ野遺跡（西之表市）・横峯 C・D 遺跡（南種子町）での調査で隆帯体文土器片や石器類、多数の遺構が発見され注目を集めた。また磨製の石槍が数十本出土し東日本との文化の交流を窺わせる園田遺跡（中種子町）などがある。その後の縄文時代早期では前平式・吉田式・下剥峯式・塞ノ神式・平楯式などが出土した遺跡の報告例が多数あり、また最近の調査で報告例が少なかった押型文土器や手向山式土器の出土報告例も多数増えてきている。

前期の遺跡では轟式・曾畑式土器が出土する遺跡が多く、主な遺跡名を挙げると種子島で初めて発掘調査が行われた本城遺跡（西之表市）をはじめ、島内各地で確認されているが、中期の遺跡の様相は不明な点が多く、遺跡の数も現時点では皆無に等しい。後期では指宿式・一湊式・納曾式・磨消縄文・綾式などの報告例がある。晩期の遺跡では黒川式の報告例がある。

その後の弥生時代・古墳時代の遺跡として、出土品の一部が国の重要文化財に指定された広田遺跡（南種子町）に代表される埋葬址などを含め島内各地で確認されているが、弥生・古墳時代の遺跡は縄文時代の遺跡数に比べると、発掘調査例や表面採集資料も少ないため、未解明な点が多いのが現状である。

第2節 遺跡の環境

長迫遺跡・二石遺跡が所在する西之表市の東南海岸部、立山・安城地区は近年開発事業のため発掘調査が毎年実施され、良好な資料が出土している。特に奥ノ仁田遺跡・鬼ヶ野遺跡は縄文時代草創期（約 12,000 年前）の遺跡であり、両遺跡ともに出土品は県の文化財に指定された。また、周辺では縄文時代早期前葉から終末期までの遺跡が相次いで発見され、今後も増加していくものと思われる。種子島の縄文時代の成り立ちを考えるうえで、重要な場所である。



第2図 長迫遺跡と周辺遺跡図

第1表 長迫遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	仮屋園	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成10年農政分布調査
2	通利山	西之表市安城上之町	縄文時代	平成13年県道分布調査 平成15年試掘調査
3	鬼ヶ野A	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
4	鬼ヶ野B	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
5	鬼ヶ野	西之表市安城上之町	縄文時代草創期	平成13年発掘調査 出土品は県文化財に指定
6	日守C	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
7	三本松	西之表市安城川脇	縄文時代早期	平成17・18年発掘調査
8	日守B	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
9	日守	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成7・8年確認調査
10	長迫	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成25年発掘調査
11	東前平	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成14・15年発掘調査
12	芦野	西之表市立山芦野	縄文時代早期	平成16年発掘調査
13	九郎三エ門	西之表市立山芦野	縄文時代	平成3年農政分布調査
14	奥嵐	西之表市立山植松	縄文時代早期	平成5年発掘調査
15	奥ノ仁田	西之表市立山植松	縄文時代草創期・ 早期	平成5年発掘調査 出土品は県文化財に指定
16	尾呂ノ平	西之表市立山御牧	縄文時代	平成13年県道分布調査
17	長崎	西之表市立山御牧	縄文時代	平成13年県道分布調査
18	中園A	西之表市立山立山	縄文時代早期	平成25年発掘調査
19	中園B	西之表市立山立山	縄文時代早期	平成25年発掘調査
20	下ノ平	西之表市立山立山	縄文時代	平成13年県道分布調査
21	鉞ノ刃	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成17・18年発掘調査
22	二石	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成23年詳細分布調査

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 調査方法

調査は平成24年2月17日から2月29日まで実施した。工事対象地である農道面にトレンチを設置するには狭小で、車や耕耘機などの通行の妨げになるためやむを得ず、隣接する畑地内に6カ所設置して調査を行った。表土を重機で除去した後、人力で掘り下げながら遺物の出土状況、土層確認のため適宜トレンチの拡張等を行った。なお、工事対象地のうち6トレンチ付近より北側先に伸びる箇所については、分布調査の結果、遺物包含層が残存しないことが確認されているため、調査対象外とした。調査面積は約36.5㎡になった。

第2節 層位

土層は場所によって、一部の層が欠落している部分もあるが、基本的には下記のとおりである。

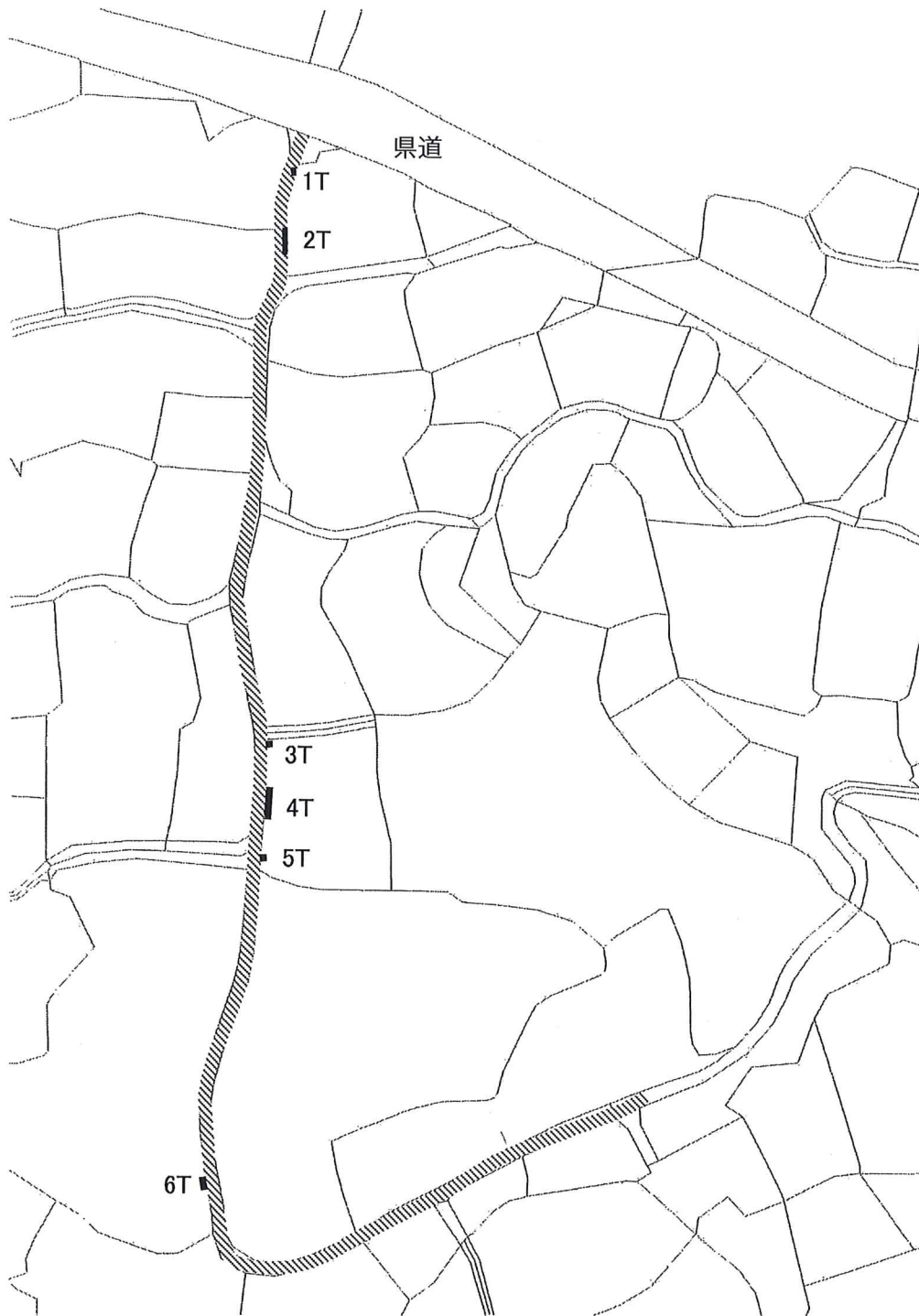
- I層 表土
- II層 黒色土
- III層 黄橙色火山灰層 アカホヤ火山灰層（約6,400年前の鬼界カルデラ噴出物）
- IV層 ベージュ色ローム土 遺物包含層
- V層 黒褐色土
- VI層 黄褐色ローム層
- VII層 明黄色火山灰土 AT火山灰層（始良カルデラの噴出物細粒）
- VIII層 暗黄色ローム層

第3節 各トレンチの調査

農道工事対象地に隣接する畑地内に6本のトレンチを任意の大きさと設定し、表土を重機で除去した後、人力で掘り下げ遺物包含層の有無を調査した。各トレンチの調査については第2表にまとめた。

第2表 トレンチ調査状況

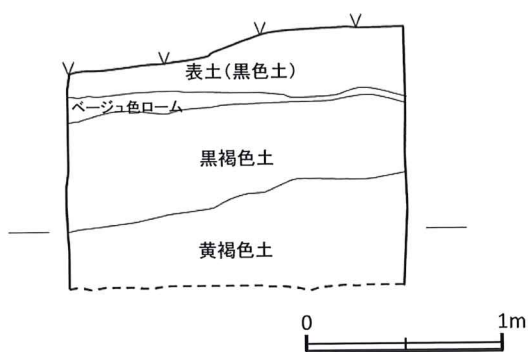
No.	トレンチ名	大きさ(m)	深さ(cm)	最下層	遺物	遺構	遺物が出土した深さ(地表面から)	備考
1	1 トレンチ	1.5×2	145	VI黄褐色土ローム	×	×		
2	2 トレンチ	1.5×8	112	V黒褐色土	○	×	84 cm	土器片
3	3 トレンチ	1.5×1.5	68	V黒褐色土	○	×	42 cm	土器片
4	4 トレンチ	1×10	62	V黒褐色土	○	×	48 cm	土器片・石器
5	5 トレンチ	1.5×1.5	122	V黒褐色土	○	×	110 cm	土器片・石器
6	6 トレンチ	2×3.5	306	VIII暗黄色ローム	×	×		



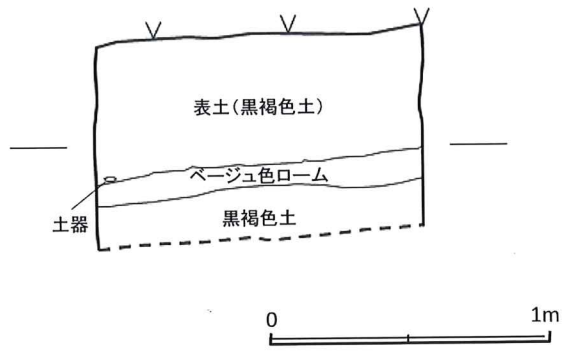
0 100m

 調査対象地

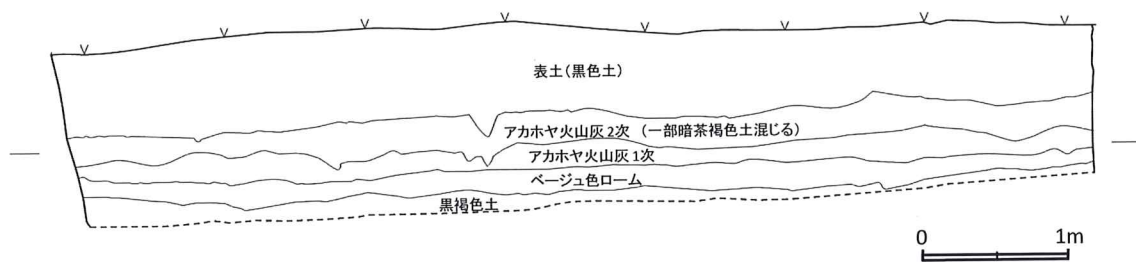
第3図 トレンチ配置図



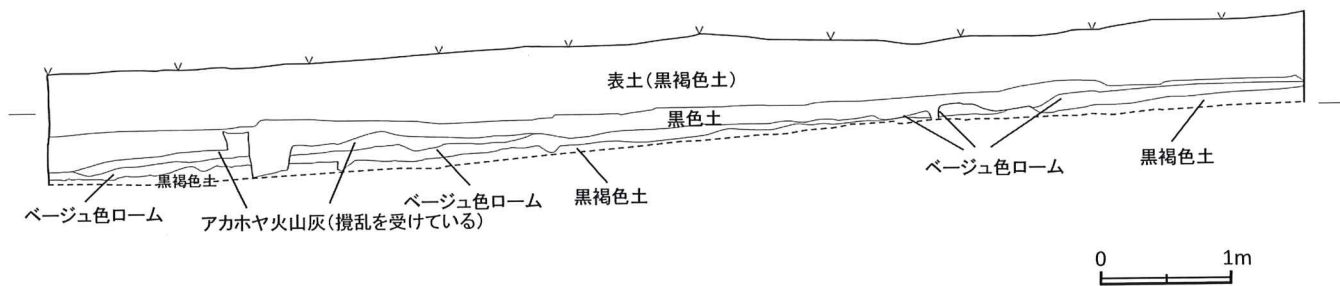
1トレンチ



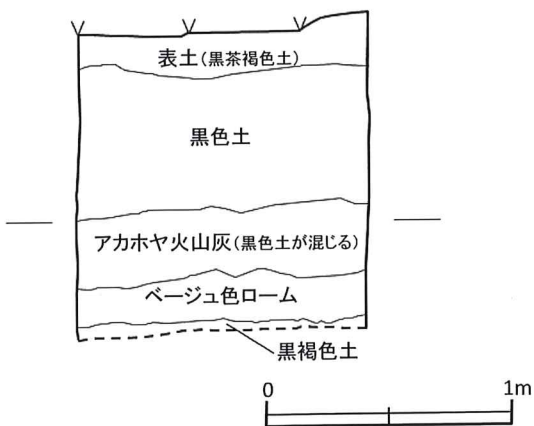
3トレンチ



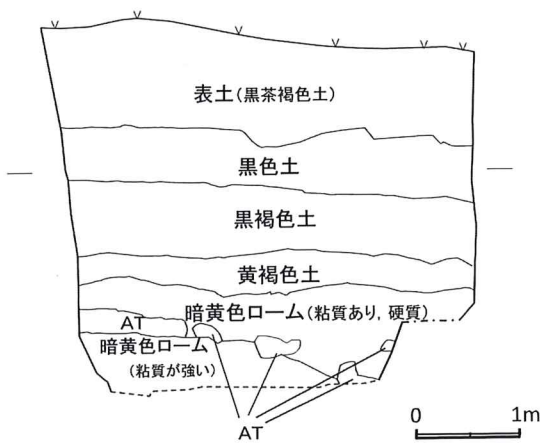
2トレンチ



4トレンチ



5トレンチ



6トレンチ

第4図 土層断面図

遺物が出土したのは2～5トレンチである。土層堆積は良好であり、アカホヤ火山灰層下位のベージュ色ローム層から土器片54点出土した。しかし、半分以上は小片土器で摩耗が激しく、図化できたものは24点にとどまった。石器は、4・5トレンチより出土した。自然礫が多数出土する中、使用痕等が確認できた石器はわずかに3点のみである。1・6トレンチはともに削平を受けており、遺物包含層の確認はできなかった。

第4節 遺構

今回の調査ではいずれのトレンチからも縄文時代相当の遺構は検出されなかった。

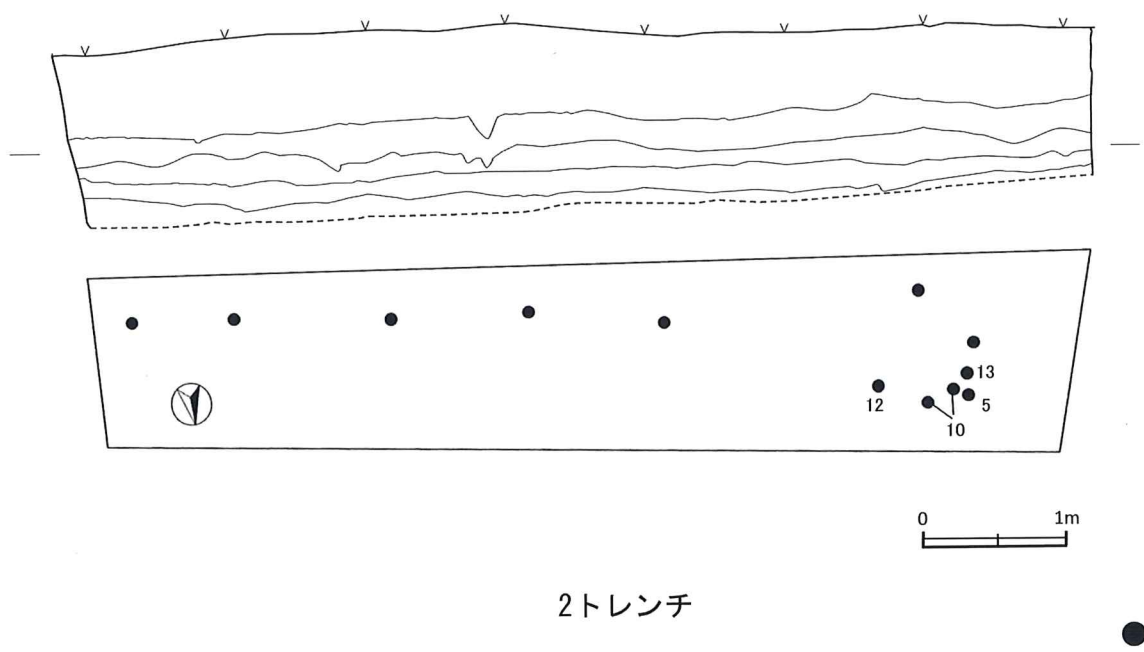
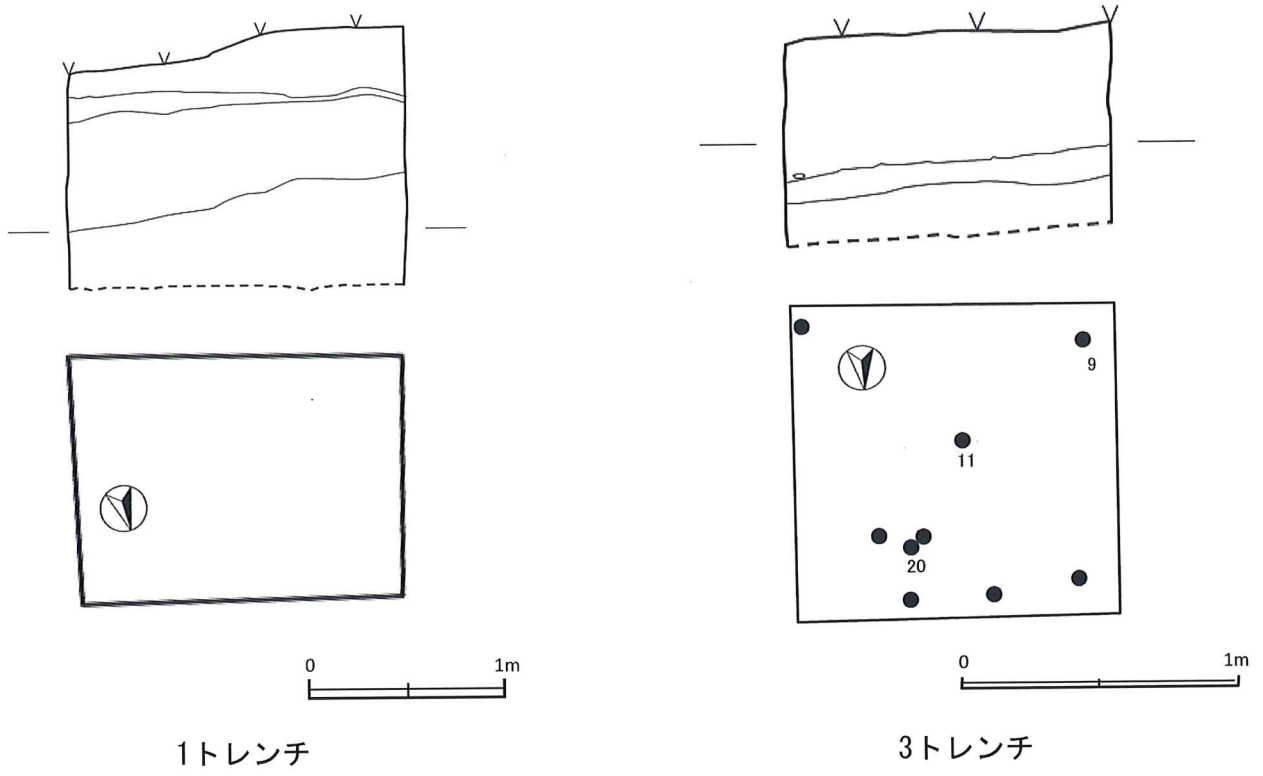
第5節 遺物

遺物は2～5トレンチから合わせてパンケース3箱分出土した。出土した層は全て第IV層で、一部を除き、縄文時代早期の土器である。今回の調査で、二石遺跡では器形及び文様からおおまかに2種類に分類できたが、長迫遺跡から出土した土器は1種類のみで、円筒形の器形を呈し、貝殻腹縁部による押引文・刺突文・押圧文を施した吉田式土器が主流である。

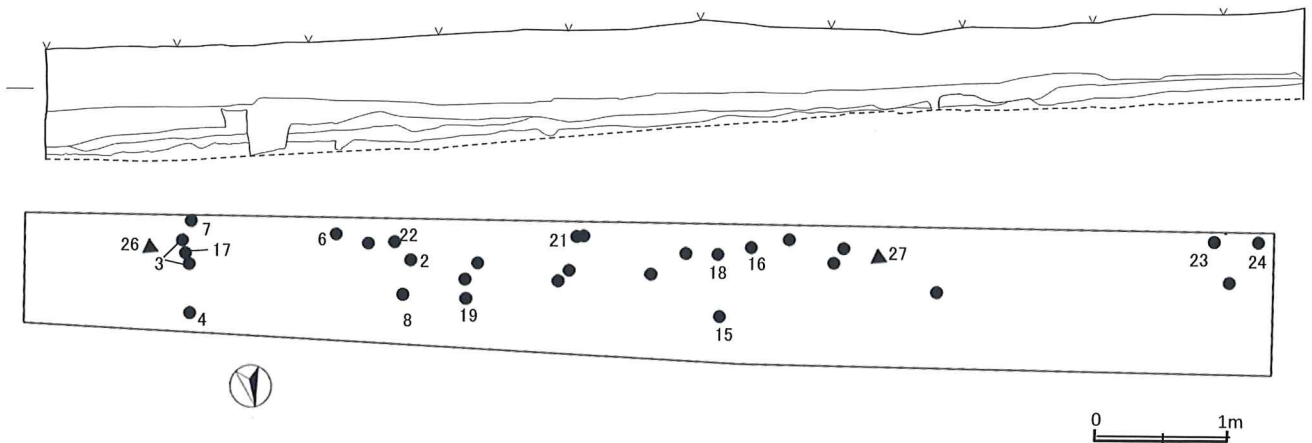
1は口縁部がやや外反し、口唇部は平坦でキザミ目はなく、外面には貝殻刺突文を4条巡らしその下に貝殻押引文を施している。場所によっては押引文がはっきりせず、条痕文になっている箇所もある。2・3は口縁部の一部が欠損しているが、器壁がやや外反しているので理解できる。外面上位に貝殻刺突文や押圧文、下位にわたっては幾重にも押引文を巡らせている。4の口唇部は平口縁を呈しており、縦位のキザミ目が見られる。外面には貝殻刺突文を3条施し、下位には貝殻を縦位に連続押圧し、楔形状に施した一部が観察できる。5はこれまでの平口縁タイプのものとは異なり、口唇部外面に貝殻頂部付近を施文具とし横位に連続押圧したもので、そのため口唇部の器壁が斜位に薄くなっている。口縁部より胴部にかけては貝殻押引文を施している。6は口縁部付近と思われる。外面上位に貝殻刺突文、その下位には貝殻押引文を施している。7は半裁竹管状施文具で刺突文が施され、下位に貝殻押引文を施している。8～17は胴部である。貝殻押引文が明確なものと、施文が浅いためはっきりせず条痕文に近い文様となっているものもある。18～22は底部で、18・19は不明瞭な個所が多いが、胴部のものと同様に貝殻押引文、または貝殻条痕文を下端まで施している。20・21・22は立ち上がり部分にヘラ状の施文具により、縦位のキザミ目を施している。

23・24は隆帯文土器であり、同一個体と見られる。横位に隆帯を巡らし、その上には貝殻で押圧文を施している。他の縄文時代早期の土器と、出土位置に時間差はあまり見られず判断しかねるが、縄文時代草創期土器の範疇に入るものと思われる。

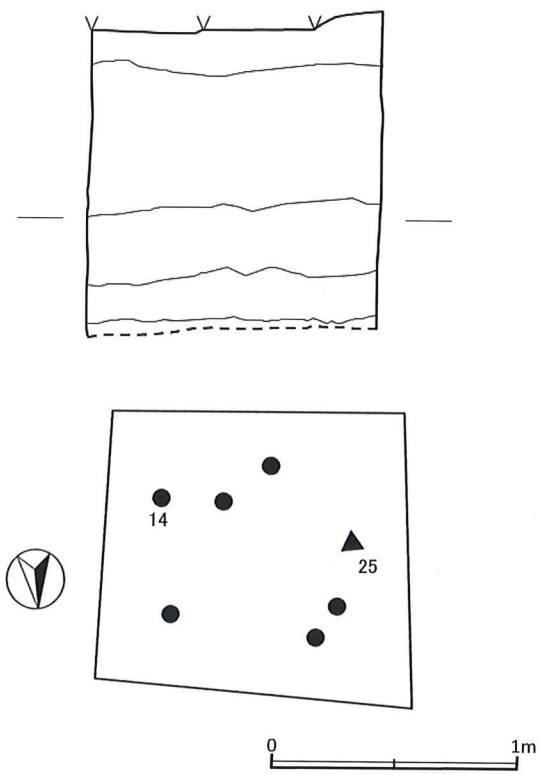
石器は土器の出土量と比べ極端に少なく、3点のみ出土した。石材はすべて砂岩である。25は5トレンチから出土した剥片石器である。上部中央に打痕跡が見られる。26・27は4トレンチから出土した磨石・敲石類である。いずれとも破損しており、磨りの痕跡が顕著である。



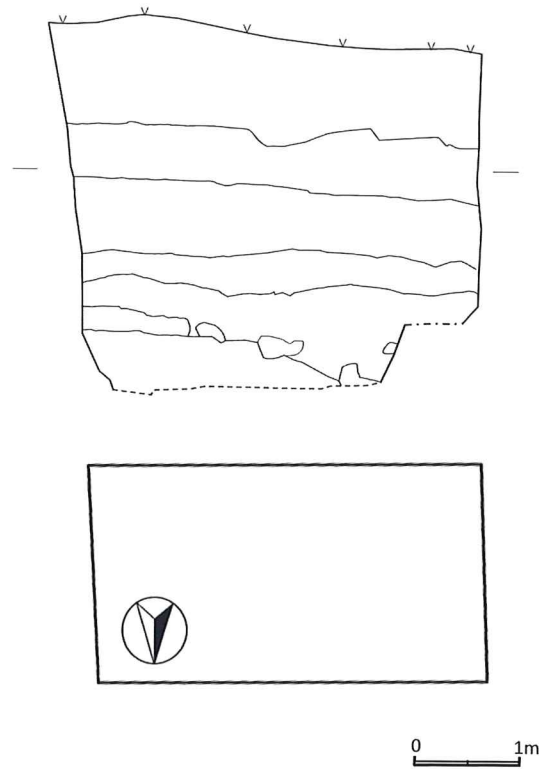
第5図 遺物出土状況 (1)



4トレンチ



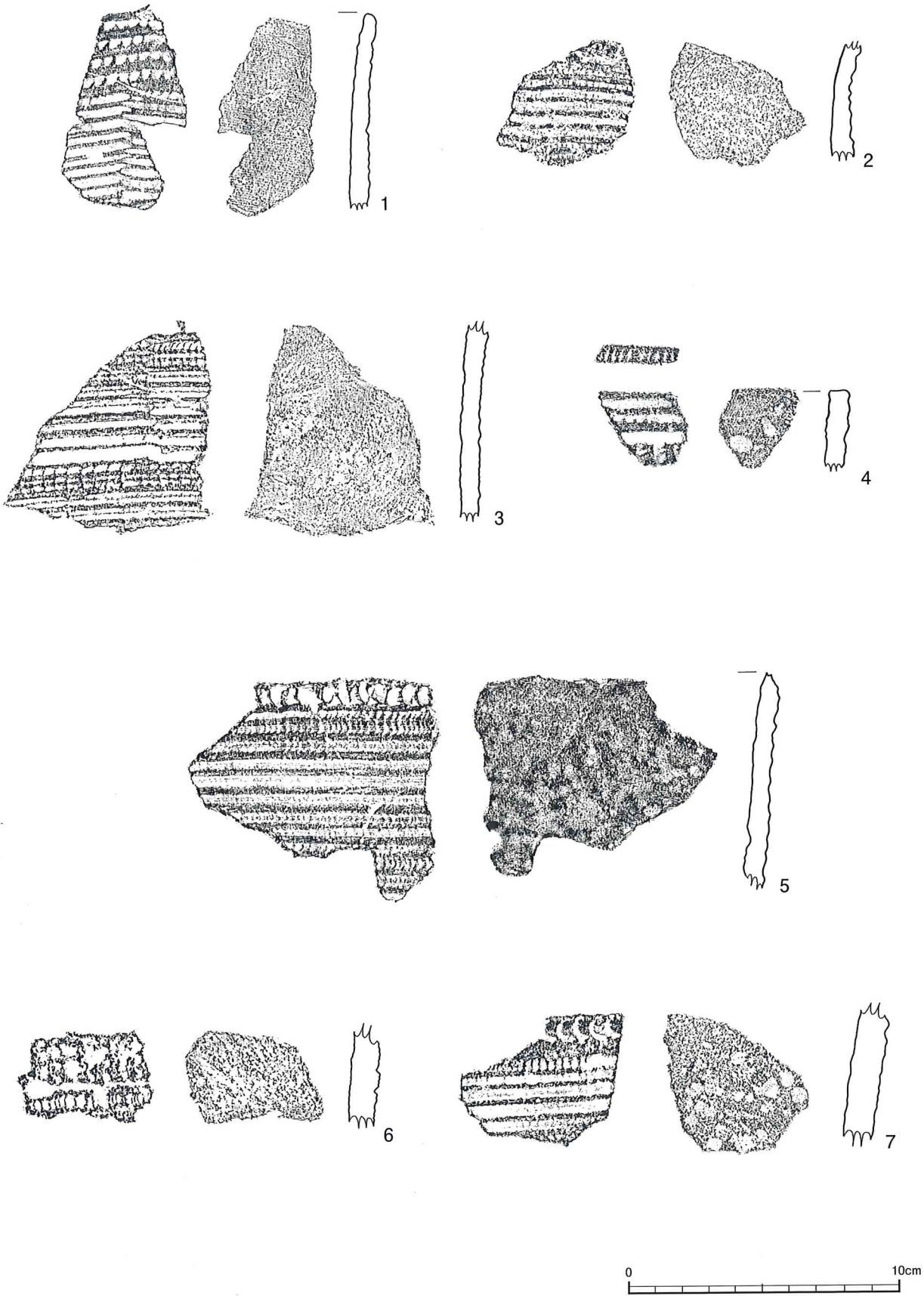
5トレンチ



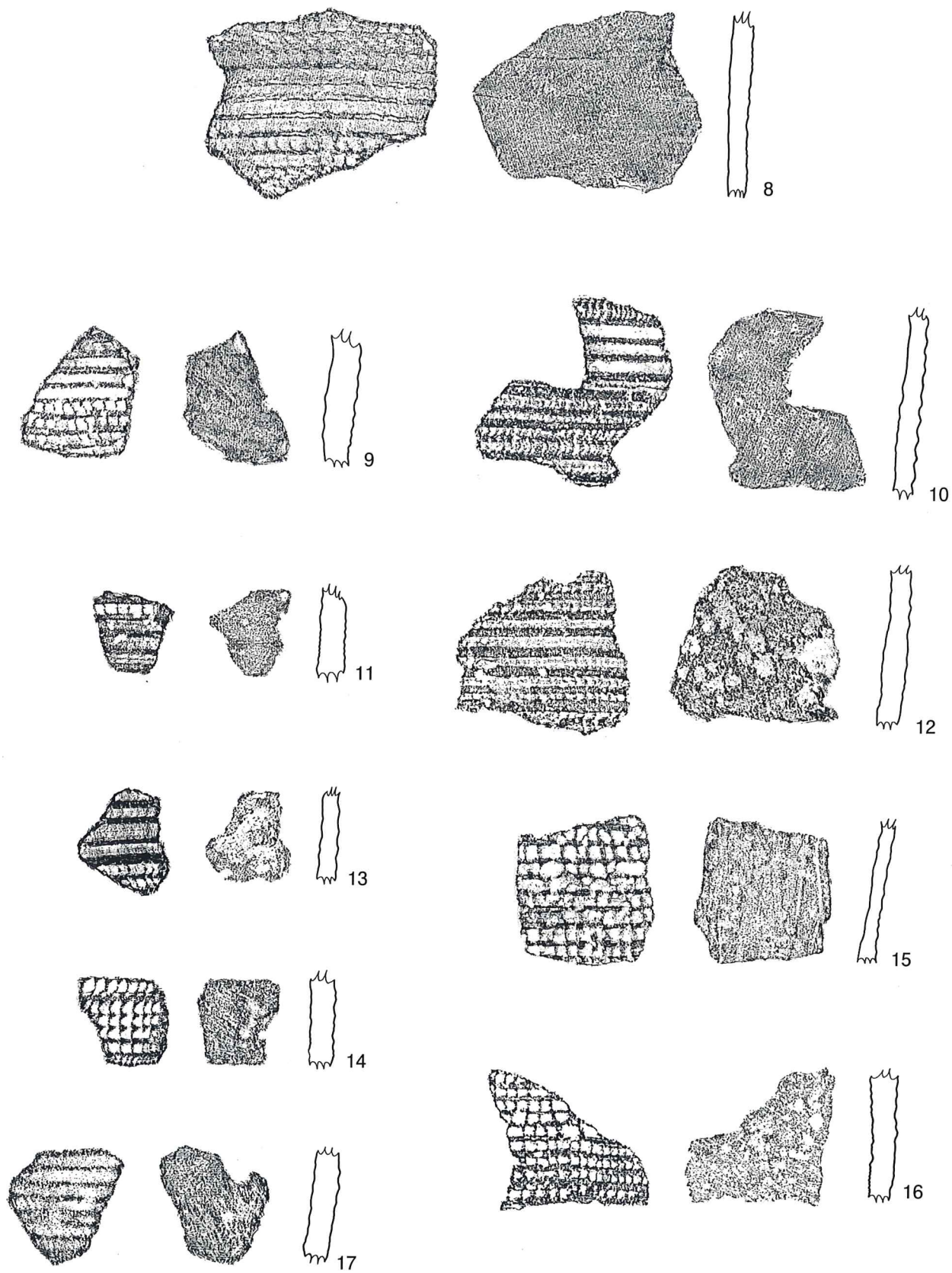
6トレンチ

- 土器片
- ▲ 石器類

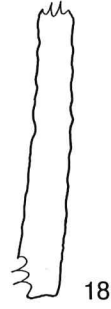
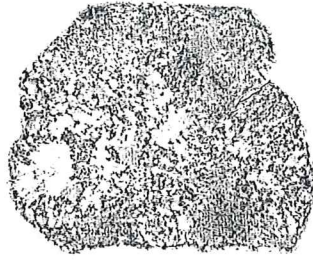
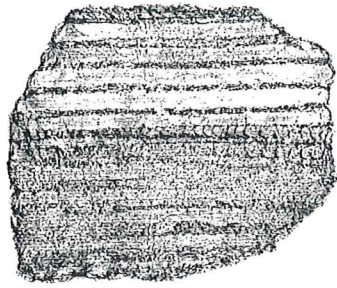
第6図 遺物出土状況 (2)



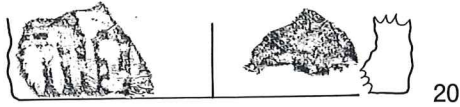
第7図 出土遺物 (1)



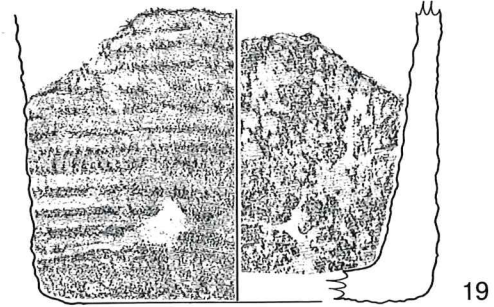
第8図 出土遺物 (2)



18



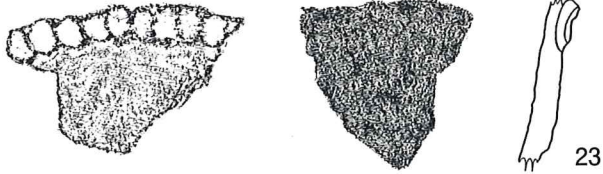
20



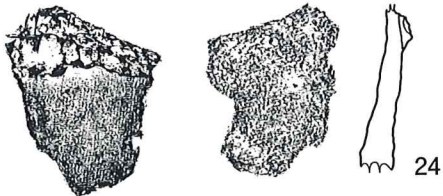
19



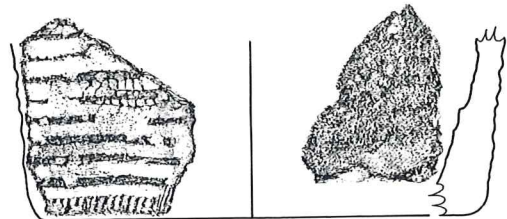
21



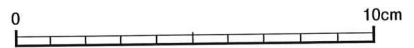
23



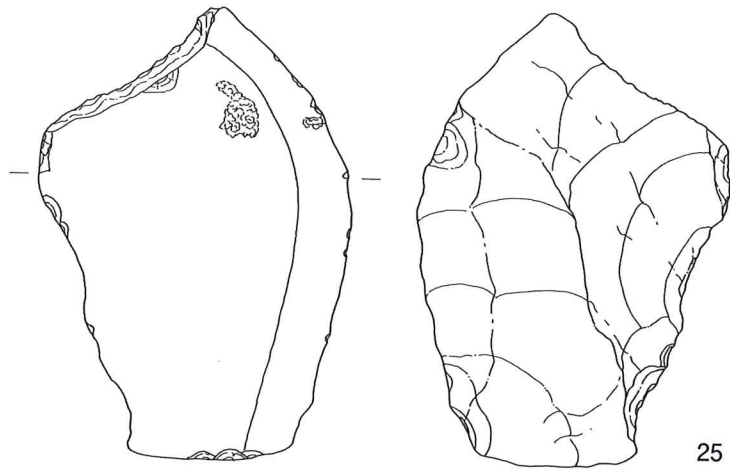
24



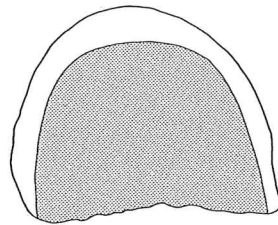
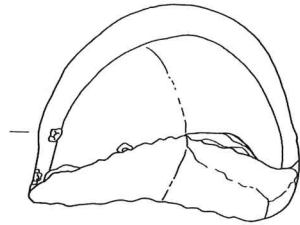
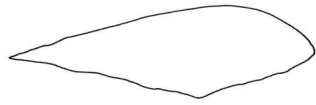
22



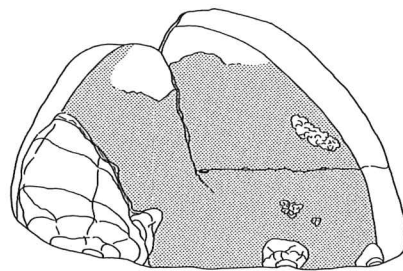
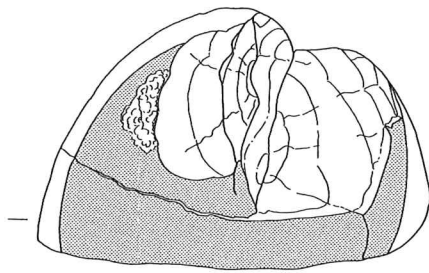
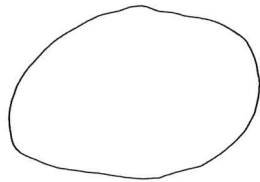
第9图 出土遺物 (3)



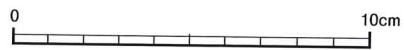
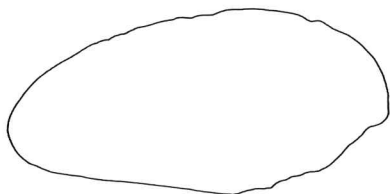
25



26



27



第10図 出土遺物(4)

第3表 土器観察表

挿図	番号	取上番号	色 調		胎 土	備考
			外 面	内 面		
7	1	4T 一括	乳茶褐色	黒褐色	石英・長石・雲母・砂粒	口縁部(平口縁)
	2	4T 57	暗赤褐色	暗茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	口縁部
	3	4T 63・65	暗赤褐色	赤褐色	石英・長石・砂粒・雲母・礫	口縁部
	4	4T 66	乳赤褐色	乳赤褐色	石英・長石・砂粒	口縁部(平口縁)
	5	2T 14・一括	茶褐色	赤褐色	石英・長石・雲母・砂粒・礫	口縁部
	6	4T 61	灰黄色	灰白色	石英・長石・雲母・砂粒	
	7	4T 62	灰白色	灰白色	石英・長石・雲母・砂粒	
8	8	4T 59	灰黒茶褐色	乳赤褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	9	3T 28	乳茶褐色	赤褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	10	2T 12・13	乳赤褐色	赤褐色	石英・長石・雲母・砂粒・礫	
	11	3T 18	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	12	2T 11	明赤褐色	灰茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	13	2T 15	乳赤褐色	明赤褐色	石英・長石・雲母・砂粒・礫	
	14	5T 73	乳赤褐色	乳赤褐色	石英・長石・雲母・砂粒・礫	
	15	4T 43	赤褐色	明赤褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	16	4T 41	茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒・礫	
	17	4T 64	乳赤褐色	乳赤褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
9	18	4T 42	乳茶褐色	灰黒褐色	石英・長石・雲母・砂粒	底部
	19	4T 55	明赤褐色	灰黄色	石英・長石・雲母・砂粒	底部
	20	3T 22	乳赤褐色	乳赤褐色	石英・長石・雲母・砂粒	底部
	21	4T 49	乳黒茶褐色	灰黄色	石英・長石・雲母・砂粒	底部
	22	4T 56	赤褐色	乳赤褐色	石英・長石・雲母・砂粒	底部
	23	4T 33	赤褐色	暗茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	24	4T 31	暗赤褐色	暗茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	

第4表 石器観察表

挿図	番号	器種	取上番号	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石材
10	25	剥片	5T 68	12.5	8.2	2.4	222	砂岩
	26	磨石・敲石類	4T 67	6.0	7.6	4.9	244	砂岩
	27	磨石・敲石類	4T 37	7.2	10.9	5.2	392	砂岩

第IV章 調査のまとめ

第1節 遺跡の範囲等

調査を行った結果、2～5 トレンチより良好かつ豊富な資料が出土した。このことから、隣接する農道東西約 200m の範囲に縄文時代早期の遺跡が所在しているものと思われる。1 トレンチは削平を受け、付近の岩盤が隆起していること、また 6 トレンチは周辺も含め、大部分が削平を受けていることから、縄文時代早期の遺物包含層は残存しないと考えられる。

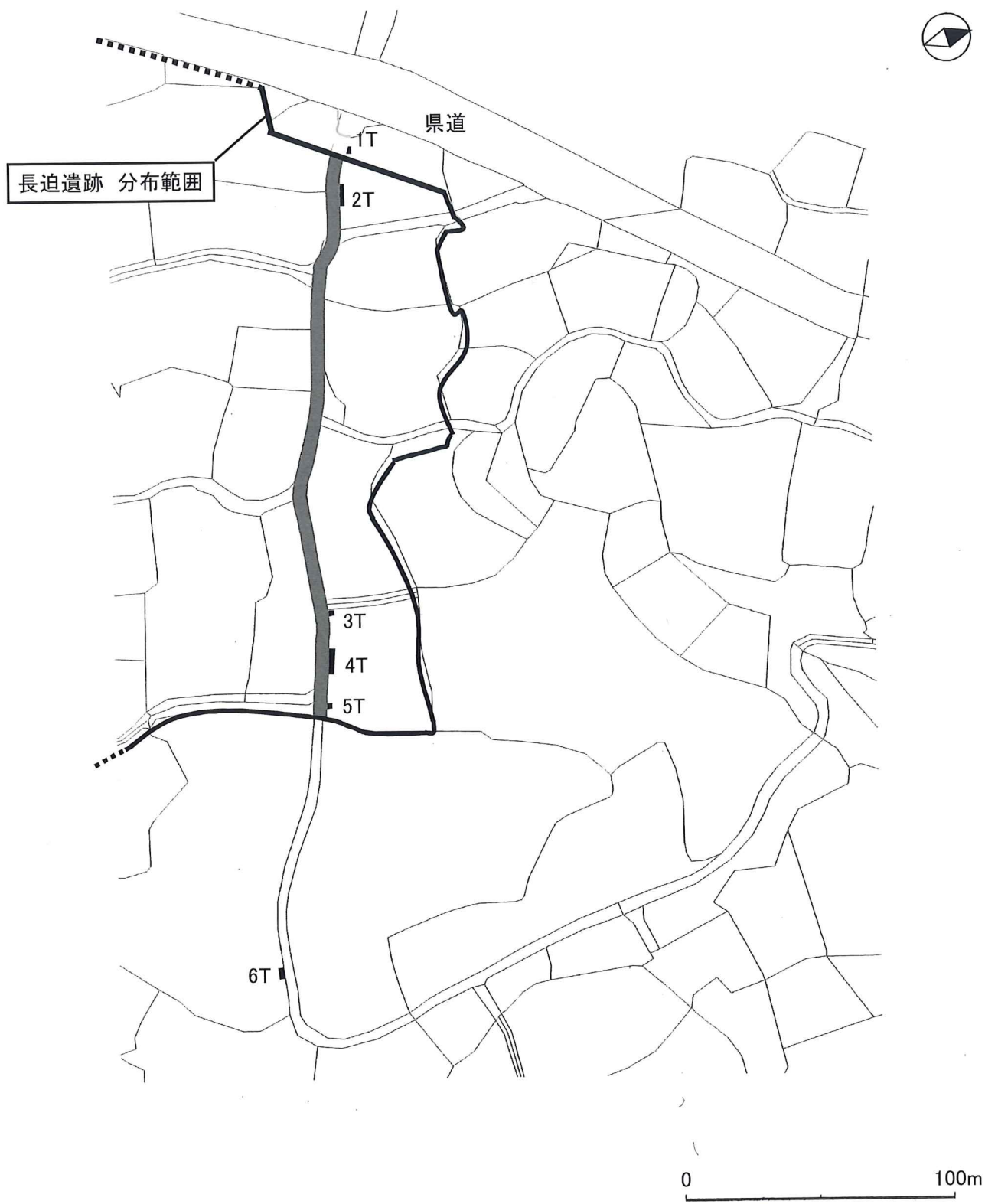
第2節 調査のまとめ

調査を行った長迫遺跡は、工事対象地である農道部分の東西約 200m の範囲に渡る調査地周辺一帯に貝殻押引文や条痕文を呈した円筒形の吉田式土器が出土したことから、縄文時代早期前葉の遺跡が所在することが明らかとなった。遺構は検出されなかったものの、今回の調査では、これまで種子島で出土した吉田式土器の共通する平口縁タイプだけではなく、口唇部に貝殻頂部による連続押圧を施した異質なものが出土している。

また、同一個体と思われる縄文時代草創期に見られる隆帯文土器が 2 点出土していることにも注目しなければならない。しかし、出土点数が少ないこと、出土層が縄文時代早期前葉に相当する土器出土層と同じであり、時間差を明らかにすることはできず詳細は不明であるが、移動の過程で残されたものと考えられる。これらは、今後調査事例が増加していくことにより、類似比較しながら、さらに種子島における縄文時代の土器編年を再検証していく必要がある。

長迫遺跡・二石遺跡が位置する東海岸部南側は近年、縄文時代早期前葉の吉田式土器を伴う遺跡の発掘調査が相次ぎ、良好な資料が発見されている。この地域になぜ、縄文時代早期前葉の遺跡が数多く立地するのか未解明な点が多く、今後両遺跡の本調査を実施する機会を得られるのであれば、重要かつ貴重な資料を提示してくれるに違いない。

なお、今回の調査結果を踏まえて、長迫遺跡は分布地の範囲が拡張された。



調査対象地における遺物・遺構残存予測地

第 11 図 遺跡の分布範囲

写真図版



調査地風景



1トレンチ



2トレンチ

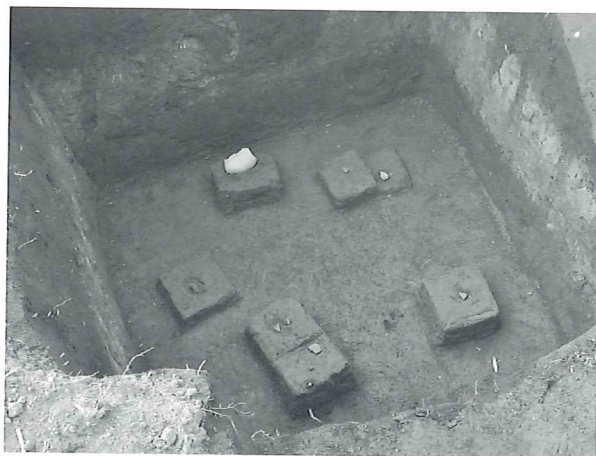
調査状況 (1)



3トレンチ



4トレンチ



5トレンチ

調査状況 (2)



6トレンチ



2トレンチ出土遺物



3トレンチ出土遺物

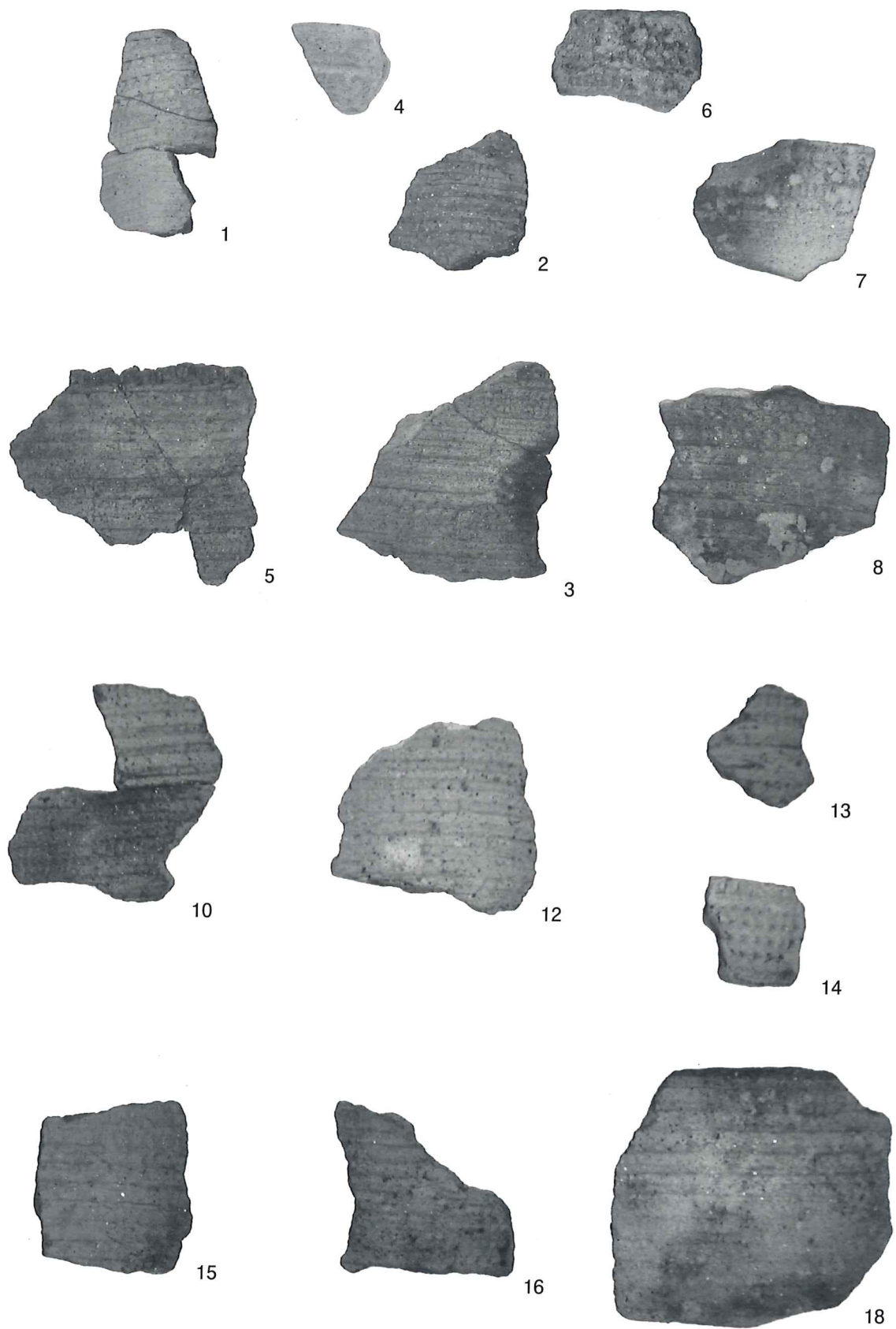


4トレンチ出土遺物



5トレンチ出土遺物

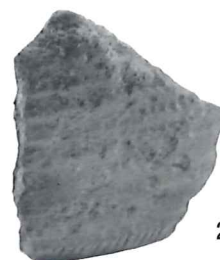
調査状況 (3)



出土遺物 (1)



19



22



20



21



23



24

出土遺物 (2)



25



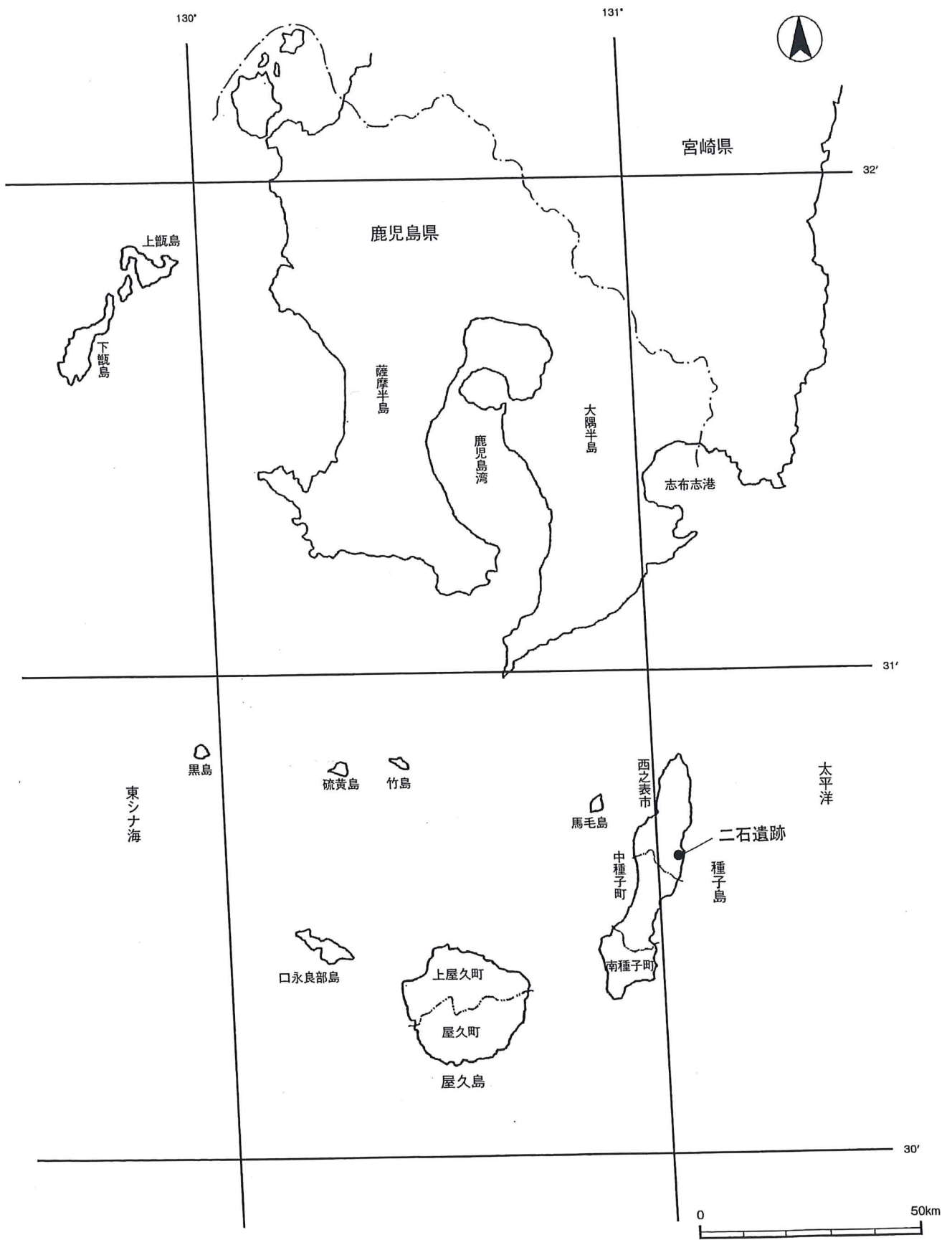
26



27

出土遺物 (3)

二石遺跡



第1図 二石遺跡位置図

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

西之表市教育委員会は平成 23 年度から平成 24 年度まで国・県の補助事業を受け市内遺跡詳細分布調査を実施しており、平成 23 年度には奥ノ仁田遺跡と長迫遺跡・二石遺跡の調査を行った。長迫遺跡・二石遺跡はともに隣接する遺跡で、平成 25 年・26 年度に市営農道改築事業に伴う工事が予定されており、また周辺には縄文時代草創期・早期の貴重な資料が出土している重要な遺跡が数多く、それらとのつながりを探る目的も含め、工事対象地を中心に詳細分布調査を実施することとなった。発掘調査は西之表市教育委員会が調査主体となり、平成 24 年 2 月 9 日から 2 月 17 日まで行った。報告書作成に伴う整理作業は平成 25 年度に行った。

第 2 節 調査の組織

(発掘調査)

発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教 育 長 立石 望
発掘調査企画	西之表市教育委員会 社会教育課 課 長 奥村 学
	西之表市教育委員会 社会教育課 係 長 沖田純一郎
発掘調査担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主 査 和田 正樹
発掘調査指導	鹿児島県教育庁文化財課
発掘調査作業員	竹之内正春・牧瀬雄二・鮫嶋敏子・松下幸弘・松下和弘

(整理作業)

発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教 育 長 立石 望
発掘調査企画	西之表市教育委員会 社会教育課 課 長 中村 章二
	西之表市教育委員会 社会教育課 課長補佐 沖田純一郎
整理作業員担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主 査 和田 正樹
整 理 作 業 員	荒木眞紀子・宇都美保子

第 3 節 調査の経過

調査は工事対象地に隣接する畑地内に 5 カ所を設置し、表土を重機で除去した後、人力で掘り下げを行った。トレンチの大きさは遺物の出土状況や土層確認のため適宜変更するなどした。

以下、調査の経過については日誌抄をもってかえる。

2月9日	木	トレンチ4カ所設置。重機による表土剥ぎ後、1トレンチ掘り下げ開始。アカホヤ火山灰層下位のベージュ色ローム層より土器片出土。
10日	金	1・2トレンチ掘り下げ。 1トレンチベージュ色ローム層より土器片・磨石・石皿出土。 2トレンチ南側壁面より土器片集中出土。
13日	月	2・3・4・5トレンチ掘り下げ。 1トレンチ掘り下げ、清掃、写真撮影。
14日	火	3・4・5トレンチ掘り下げ。 2トレンチ清掃、写真撮影。
15日	水	3・4・5トレンチ清掃、写真撮影。 1・2トレンチ、平板・レベル遺物取り上げ。
16日	木	1・2トレンチ土層断面図作成。 3・4・5トレンチ平板測量。
17日	金	3・4・5トレンチ土層断面図作成。 重機により全トレンチ埋め戻し。調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

長迫遺跡・二石遺跡は大隅半島の最南端にある佐多岬の東南海上約 54 kmに位置する種子島西之表市に所在する。種子島から薩南諸島，さらに奄美・沖縄諸島と蜿蜒 1, 200 kmの海の飛び石が続き，これらの島々には南から北へと黒潮が走っている。

種子島は南北約 52 km，東西 12 kmの北北東から南南西に細長く伸びた，最高標高でも 282. 3m しかない低平な細長い島で，地形は丘陵地の山地，海岸段丘，河川周辺の沖積低地からなり，西方に約 20 km 離れた九州最高峰の標高 1935. 5m もある宮之浦岳を有する屋久島とは対照的である。また，西海岸には比較的砂丘が発達しているが，東海岸は段丘に富んでいる。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町の 1 市 2 町からなる。長迫遺跡・二石遺跡は西之表市の東南部安城大野の標高約 56m の海岸段丘上に位置し，遺跡の東側には太平洋に臨むことができる。周辺と比べ，一段高い位置に両遺跡は寄り添うように台地の先端部分に形成されている。

種子島は旧石器時代から歴史時代まで数多くの遺跡があり，最近の調査では，旧石器時代・縄文時代草創期の調査で全国的に注目を浴びるようになった。旧石器時代の遺跡では種子島で初めて約 3 万年前の礫群が検出された横峯遺跡（南種子町）や礫群・石器類・土坑が検出された立切遺跡（中種子町）などがあり，また平成 18 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査を行った大津保遺跡（中種子町）では約 3 万年前の落とし穴が 12 基検出され，現時点では日本最古となる可能性が高いものである。

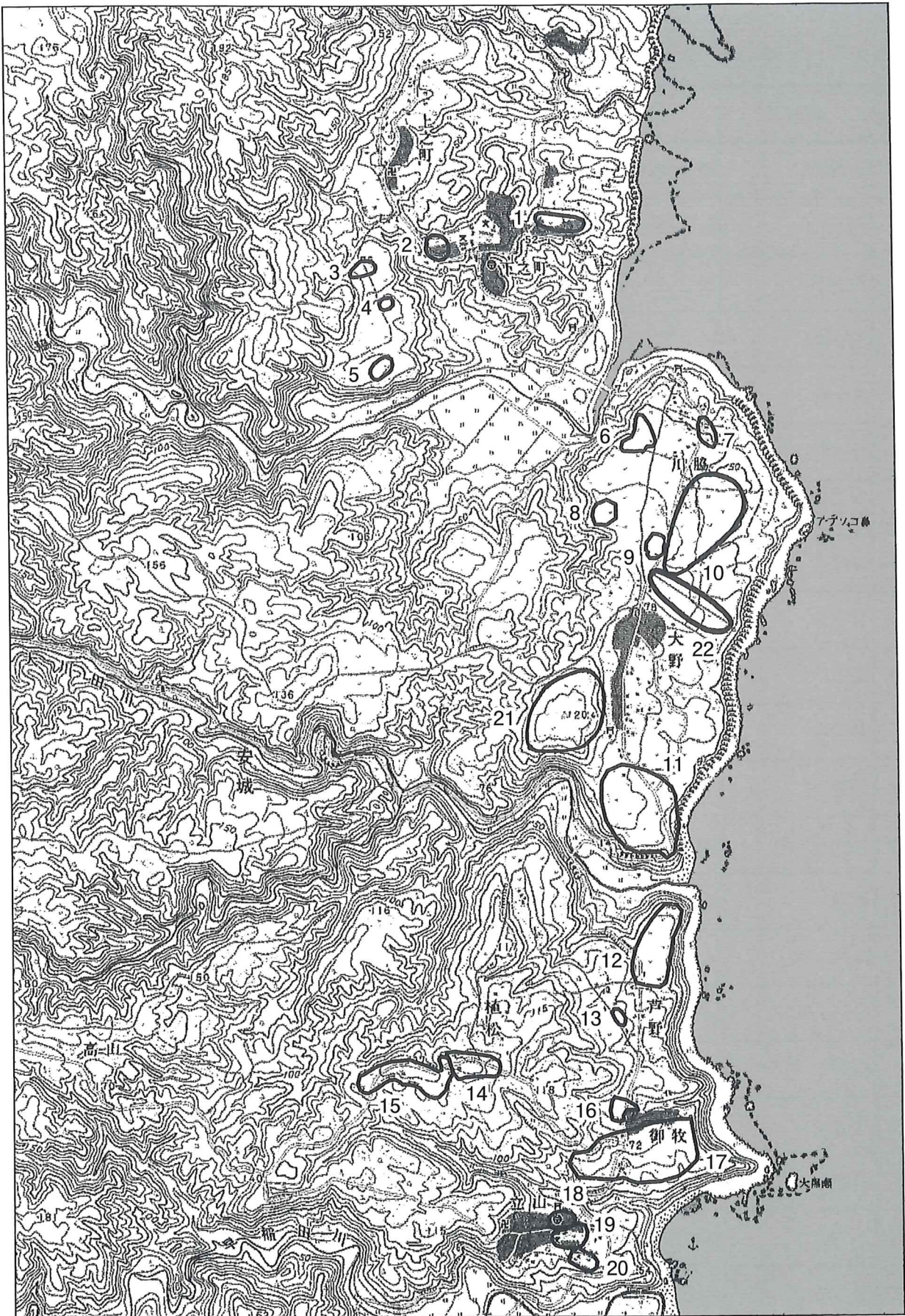
縄文時代では，近年の調査で縄文時代草創期の良好な資料・遺構が相次いで発見されている。奥ノ仁田遺跡の調査をきっかけに，三角山遺跡（中種子町）・鬼ヶ野遺跡（西之表市）・横峯 C・D 遺跡（南種子町）での調査で隆帯体文土器片や石器類，多数の遺構が発見され注目を集めた。また磨製の石槍が数十本出土し東日本との文化の交流を窺わせる園田遺跡（中種子町）などがある。その後の縄文時代早期では前平式・吉田式・下剥峯式・塞ノ神式・平楯式などが出土した遺跡の報告例が多数あり，また最近の調査で報告例が少なかった押型文土器や手向山式土器の出土報告例も多数増えてきている。

前期の遺跡では轟式・曾畑式土器が出土する遺跡が多く，主な遺跡名を挙げると種子島で初めて発掘調査が行われた本城遺跡（西之表市）をはじめ，島内各地で確認されているが，中期の遺跡の様相は不明な点が多く，遺跡の数も現時点では皆無に等しい。後期では指宿式・一湊式・納曾式・磨消縄文・綾式などの報告例がある。晩期の遺跡では黒川式の報告例がある。

その後の弥生時代・古墳時代の遺跡として，出土品の一部が国の重要文化財に指定された広田遺跡（南種子町）に代表される埋葬址などを含め島内各地で確認されているが，弥生・古墳時代の遺跡は縄文時代の遺跡数に比べると，発掘調査例や表面採集資料も少ないため，未解明な点が多いのが現状である。

第2節 遺跡の環境

長迫遺跡・二石遺跡が所在する西之表市の東南海岸部，立山・安城地区は近年開発事業のため発掘調査が毎年実施され，良好な資料が出土している。特に奥ノ仁田遺跡・鬼ヶ野遺跡は縄文時代草創期（約 12, 000 年前）の遺跡であり，両遺跡ともに出土品は県の文化財に指定された。また，周辺では縄文時代早期前葉から終末期までの遺跡が相次いで発見され，今後も増加していくものと思われる。種子島の縄文時代の成り立ちを考えるうえで，重要な場所である。



第2図 二石遺跡と周辺遺跡図

第1表 二石遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	仮屋園	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成10年農政分布調査
2	通利山	西之表市安城上之町	縄文時代	平成13年県道分布調査 平成15年試掘調査
3	鬼ヶ野A	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
4	鬼ヶ野B	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
5	鬼ヶ野	西之表市安城上之町	縄文時代草創期	平成13年発掘調査 出土品は県文化財に指定
6	日守C	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
7	三本松	西之表市安城川脇	縄文時代早期	平成17・18年発掘調査
8	日守B	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
9	日守	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成7・8年確認調査
10	長迫	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成25年発掘調査
11	東前平	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成14・15年発掘調査
12	芦野	西之表市立山芦野	縄文時代早期	平成16年発掘調査
13	九郎三エ門	西之表市立山芦野	縄文時代	平成3年農政分布調査
14	奥嵐	西之表市立山植松	縄文時代早期	平成5年発掘調査
15	奥ノ仁田	西之表市立山植松	縄文時代草創期・ 早期	平成5年発掘調査 出土品は県文化財に指定
16	尾呂ノ平	西之表市立山御牧	縄文時代	平成13年県道分布調査
17	長崎	西之表市立山御牧	縄文時代	平成13年県道分布調査
18	中園A	西之表市立山立山	縄文時代早期	平成25年発掘調査
19	中園B	西之表市立山立山	縄文時代早期	平成25年発掘調査
20	下ノ平	西之表市立山立山	縄文時代	平成13年県道分布調査
21	鍬ノ刃	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成17・18年発掘調査
22	二石	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成23年詳細分布調査

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 調査方法

調査は平成24年2月9日から2月17日まで実施した。現道面にトレンチを設置するには狭小で車や耕耘機などの通行の妨げになるためやむを得ず、農道工事対象地に隣接する畑地内に5カ所設置して調査を行った。表土を重機で除去した後、人力で掘り下げながら遺物の出土状況、土層確認のため適宜トレンチの拡張等を行った。調査面積は約28.5㎡になった。

第2節 層位

土層は場所によって、一部の層が欠落している部分もあるが、基本的には下記のとおりである。

- I層 表土
- II層 黒色土
- III層 黄橙色火山灰層 アカホヤ火山灰層（約6,400年前の鬼界カルデラ噴出物）
- IV層 ベージュ色ローム土 遺物包含層
- V層 黒褐色土
- VI層 黄褐色ローム層
- VII層 明黄色火山灰土 AT火山灰層（始良カルデラの噴出物細粒）
- VIII層 暗黄色ローム層
- IX層 黄褐色ローム層

第3節 各トレンチの調査

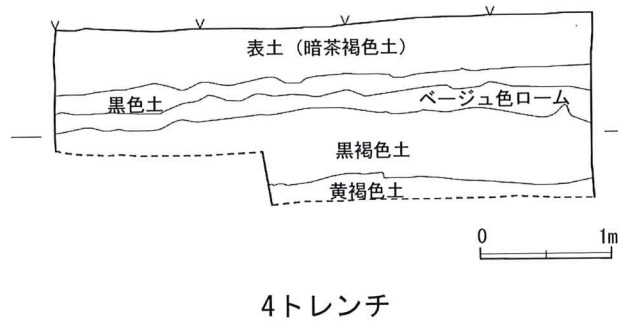
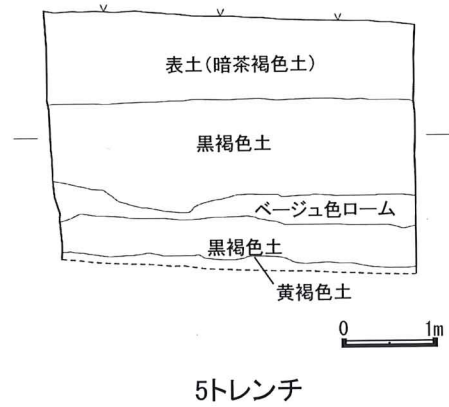
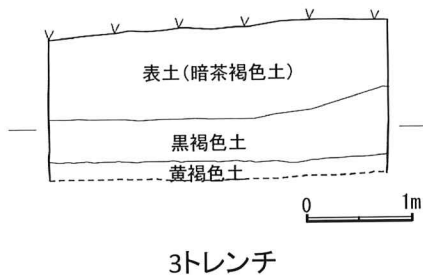
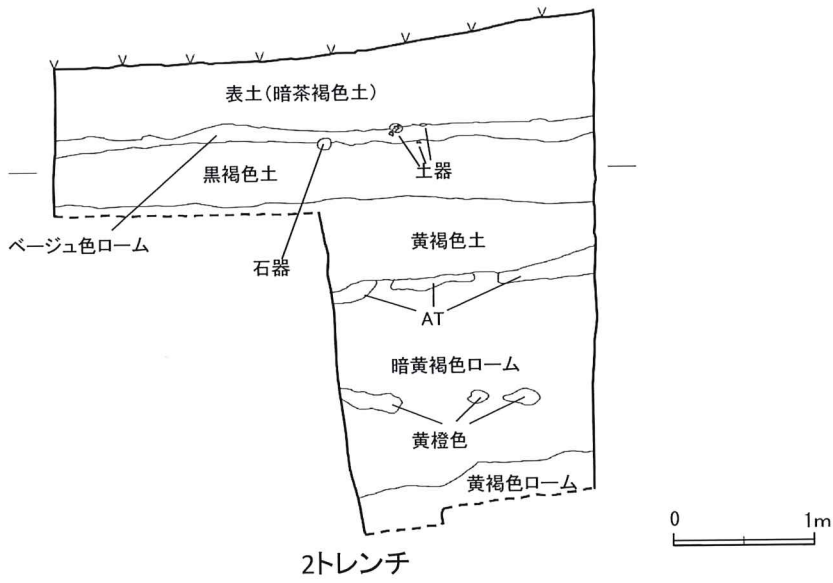
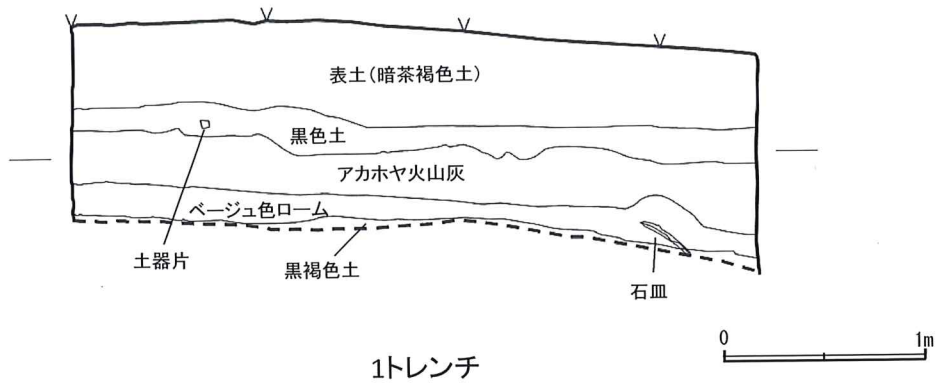
農道工事対象地に隣接する畑地内に1.5m×4mを基準とした5本のトレンチを設定し、表土を重機で除去した後、人力で掘り下げ調査を行った。各トレンチの調査については第2表にまとめた。

第2表 トレンチ調査状況

No.	トレンチ名	大きさ (m)	深さ (cm)	最下層	遺物	遺構	遺物が出土 した深さ(地 表面から)	備考
1	1 トレンチ	1.5×4	112	V 黒褐色土	○	×	84 cm	土器片・石器
2	2 トレンチ	1.5×4	313	IX 黄褐色ローム	○	×	44 cm	土器片・石器
3	3 トレンチ	1.5×3	124	VI 黄褐色ローム	×	×		
4	4 トレンチ	1.5×4	136	VI 暗黄色ローム	×	×		
5	5 トレンチ	1.5×4	240	VI 黄褐色ローム	×	×		



第3図 トレンチ配置図



第4図 土層断面図

遺物が出土したのは北側農道隣接畑地内に設置した1・2トレンチであった。1トレンチはアカホヤ火山灰層下位のベージュ色ローム層から縄文早期の土器片・石器69点出土した。トレンチ幅が狭小ながらも、遺物残存が良好なうえ豊富に出土したことが特筆される。2トレンチはアカホヤ火山灰層が削平されており、遺物包含層はトレンチ南側壁面の一部箇所にかろうじて残存していた。土器片・石器が8点まとまって出土している。南側農道隣接畑地内に設置した3・4・5トレンチについては、4トレンチから土器片2点出土されたものの攪乱層内からであり、いずれのトレンチも攪乱及び削平が著しく、遺物包含層の確認はできなかった。

第4節 遺構

今回の調査ではいずれのトレンチからも縄文時代相当の遺構は検出されなかった。

第5節 遺物

遺物は1・2トレンチから合わせてパンケース3箱分出土したが、ほとんど1トレンチからである。出土した土器は円筒形とバケツ状の2種類の器形に分けられる。前者は口縁部が平口縁で外反し、胴部は貝殻押引文を施している。それに対し後者は波状口縁で若干内湾を呈し、外面に縦、横に位幾重にも底部付近にわたって貝殻条痕文が施文されるといった特徴が見られる。

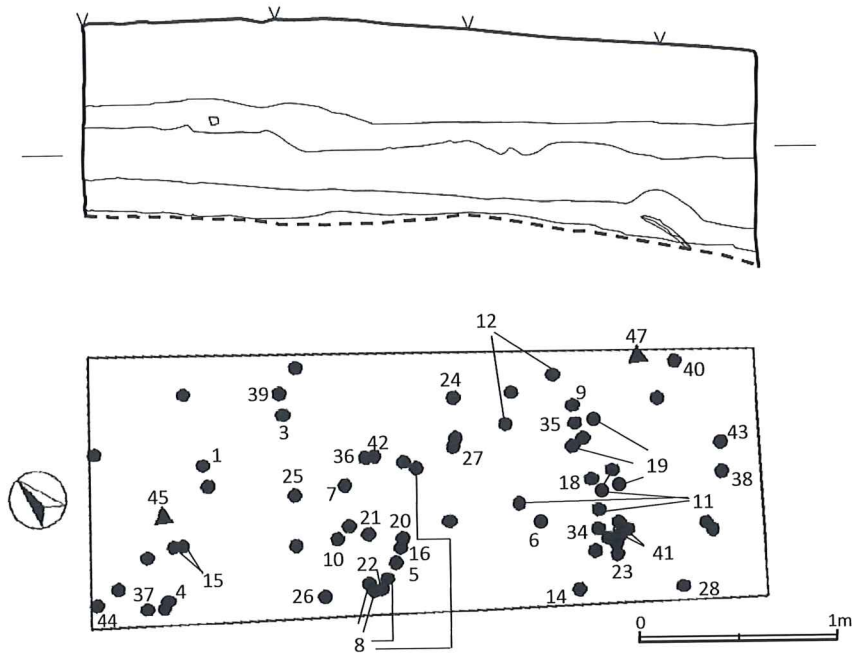
1～6は口縁部で小片ばかりだが、平口縁の口唇部には鋸歯文もしくは斜位にへら状の工具でキザミ目を施し、外面には横位もしくは縦位の貝殻腹縁による刺突文が見られる。7・8は口唇部が若干丸みを帯び、摩耗のためはっきりしないがキザミ目を施している。口縁部には横位に1条の貝殻刺突文を巡らしその下位には深めの5条の貝殻条痕文を施している。胴部は貝殻押引文である。7・8ともに同一個体のものと思われる。9～28は胴部であり、貝殻腹縁による押引文である。明確な箇所もあれば、浅くはつきりせず条痕文に近い文様となっているものもある。

29・30は口縁部がわずかに波状を呈するものである。口唇部は若干丸みを帯び、不明瞭ではあるが、口縁部に3条あるいは4条、下位には縦位に数条もの貝殻条痕文が施されている。特に29は口唇部が内湾し、陵を持つ。割れ口の状況から、1cmないしは1.5cm幅の粘土の帯を数段積み上げて製作したものと思われる。31は縦位にはっきりと明瞭だが、32・33はかろうじて貝殻条痕文が見受けられる。

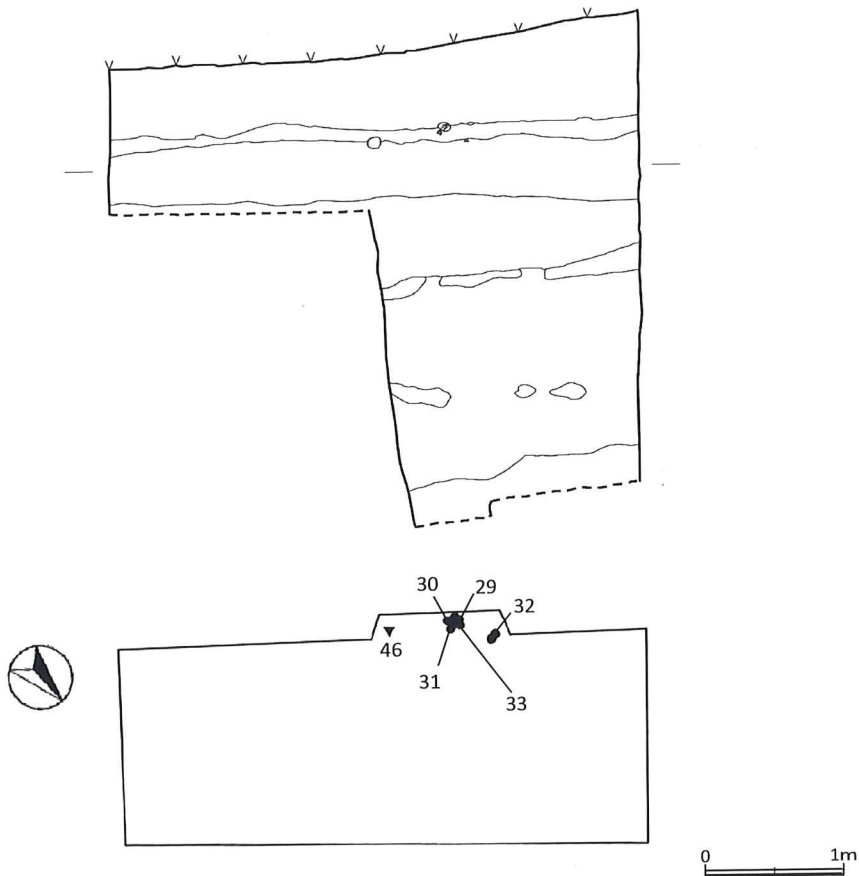
34・35・36は貝殻腹縁部を縦位に連続押圧して楔形凸帯を带状に巡らしたものである。小片のため、下位に続く文様が不明瞭である。

37～44は底部である。37・38・39は外面の立ち上がり部分にへら状のもので縦位のキザミ目を施文したものである。40・41・42は立ち上がり部分に貝殻押引文を巡らしている。43・44は貝殻押引文を施したあと上からさらにキザミ目を施しているものである。

石器は土器の出土量と比べ極端に少なく、3点のみ出土した。45は1トレンチから出土した敲石である。使用の際に破碎した一部と思われる。46は磨石で2トレンチより出土した。47は石皿・台石類で1トレンチより出土した。平滑面が見受けられる。石材はいずれとも砂岩である。



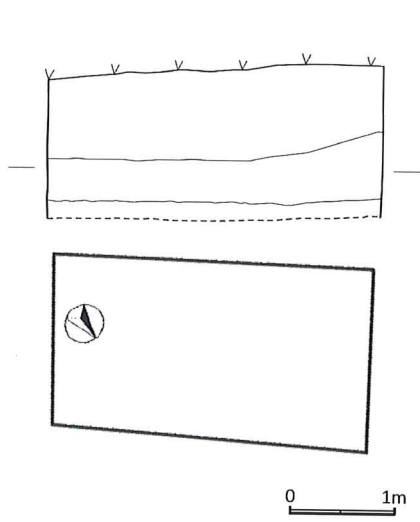
1トレンチ



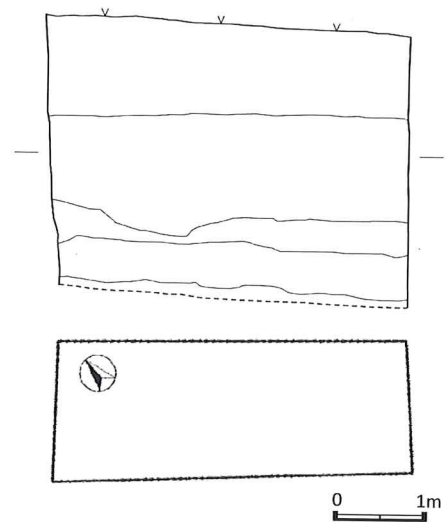
2トレンチ

- ▲ 石器類
- 土器片

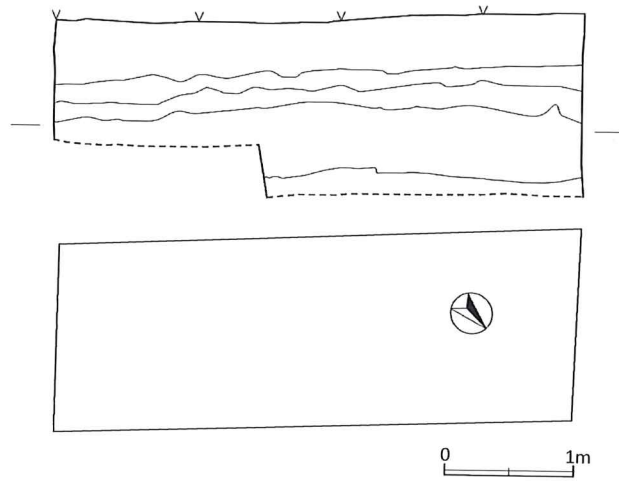
第5図 遺物出土状況 (1)



3トレンチ



5トレンチ



4トレンチ

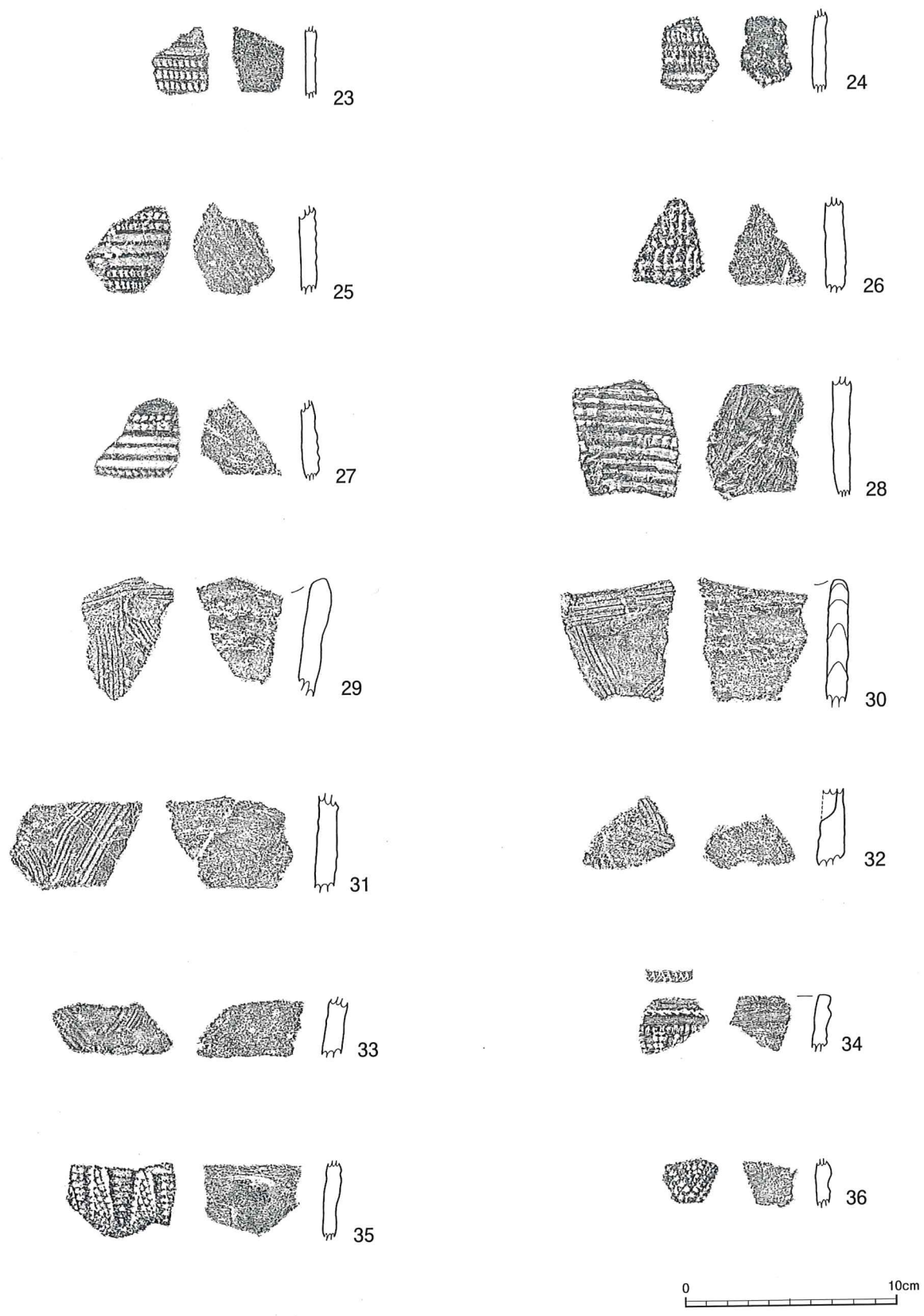
第6図 遺物出土状況 (2)



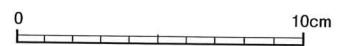
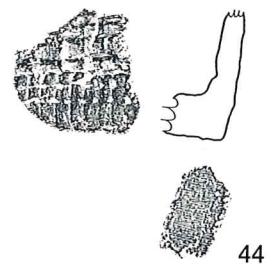
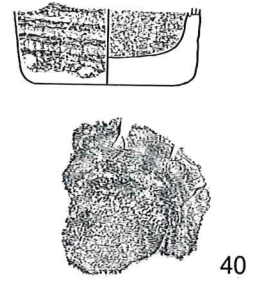
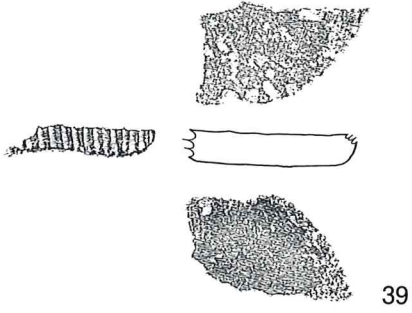
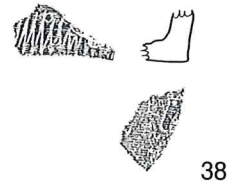
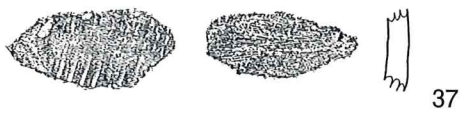
第7図 出土遺物 (1)



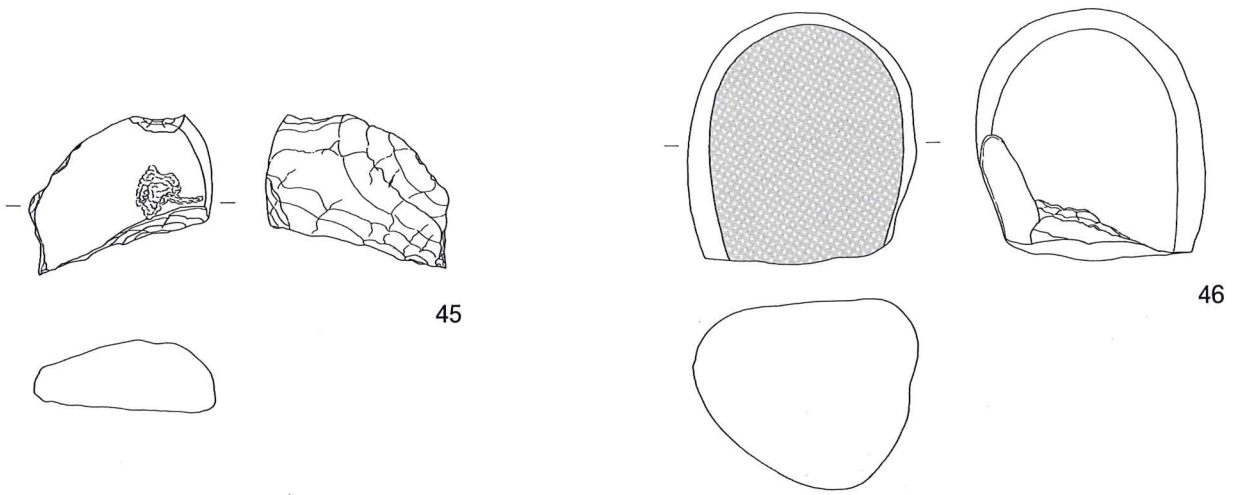
第8図 出土遺物 (2)



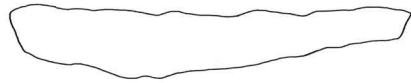
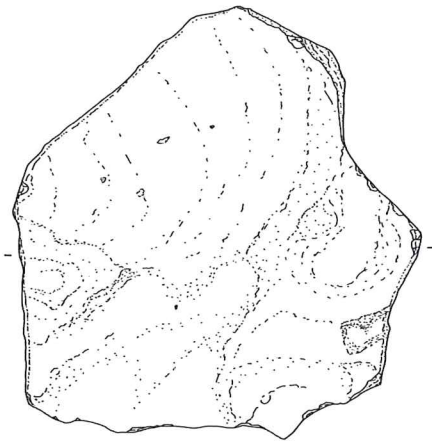
第9図 出土遺物 (3)



第10図 出土遺物 (4)



0 10cm



47

0 10cm

第11図 出土遺物(5)

第3表 土器観察表(1)

挿図	番号	取上番号	色 調		胎 土	備考
			外 面	内 面		
7	1	1T 13	赤茶褐色	暗黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	平口縁
	2	1T 一括	赤茶褐色	灰黒褐色	石英・長石・雲母・砂粒	平口縁
	3	1T 18	赤茶褐色	明赤茶褐色	石英・長石・砂粒・砂粒	平口縁
	4	1T 6	赤茶褐色	明赤茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	平口縁
	5	1T 25	黄茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・雲母	平口縁
	6	1T 75	灰茶褐色	明赤茶褐色	石英・長石・雲母	平口縁
	7	1T 31	灰黒褐色	黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	平口縁(若干丸みを帯びる)
	8	1T21・22・24・36	灰黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒・礫	平口縁(若干丸みを帯びる)
	9	1T 63	灰茶褐色	明赤茶褐色	石英・長石・雲母	
8	10	1T 28	赤茶褐色	暗赤茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	11	1T53・54・57・59	赤茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	12	1T 41・43	灰茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	13	1T 一括	灰黄茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	14	1T 44	灰茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	15	1T 8・10	赤茶褐色	赤茶茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	16	1T 26	赤茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒・礫	
	17	1T 一括	明赤茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	18	1T 55	明赤茶褐色	明赤茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	19	1T 56・58	灰黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	20	1T 27	赤茶褐色	明赤茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	21	1T 29	赤茶褐色	暗赤茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	22	1T 22・23	赤茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
9	23	1T 50	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	24	1T 38	灰茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	25	1T 17	赤茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・雲母・礫	
	26	1T 15	明赤茶褐色	明赤茶褐色	石英・長石・雲母	
	27	1T 40	灰黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	28	1T 64	乳赤茶褐色	灰黒褐色	石英・長石・雲母	
	29	2T 82	乳赤茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・雲母	波状口縁
	30	2T 78	乳赤茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・雲母	波状口縁

第4表 土器観察表(2)

挿図	番号	取上番号	色 調		胎 土	備考
			外 面	内 面		
9	31	2T 77	赤茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	32	2T 83	赤茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	33	2T 80	明赤茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	34	1T 46	灰黒褐色	白黄茶褐色	石英・長石・砂粒・雲母	平口縁
	35	1T 62	灰茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒・雲母	
	36	1T 34	赤茶褐色	暗赤茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒・礫	
10	37	1T 5	明赤茶褐色	暗赤茶褐色	石英・長石・雲母	
	38	1T 71	乳灰白色	乳白色	石英・長石・雲母	底部
	39	1T 19	灰茶褐色	明赤茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	底部
	40	1T 67	灰茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	底部
	41	1T 51・69	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・雲母・礫	底部
	42	1T 33	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	底部
	43	1T 72	明茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	底部
	44	1T 1	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	底部

第5表 石器観察表

挿図	番号	器種	取上番号	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石材
11	45	敲石	1T 9	5.9	7.0	2.8	129	砂岩
	46	磨石	2T 76	9.4	8.4	7.1	823	砂岩
	47	台石・石皿	1T 87	32.8	30.7	5.7	5620	砂岩

第IV章 調査のまとめ

第1節 遺跡の範囲等

調査の結果、1・2 トレンチを設置した北側農道隣接畑地一帯は遺物包含層が残存し、一部削平を受けているものの、良好かつ豊富な資料が検出された。しかし、3・4・5 トレンチを設置した南側農道隣接畑地一帯は大幅な削平を受けていたため、縄文時代早期の遺物包含層は残存しないものと考えられる。

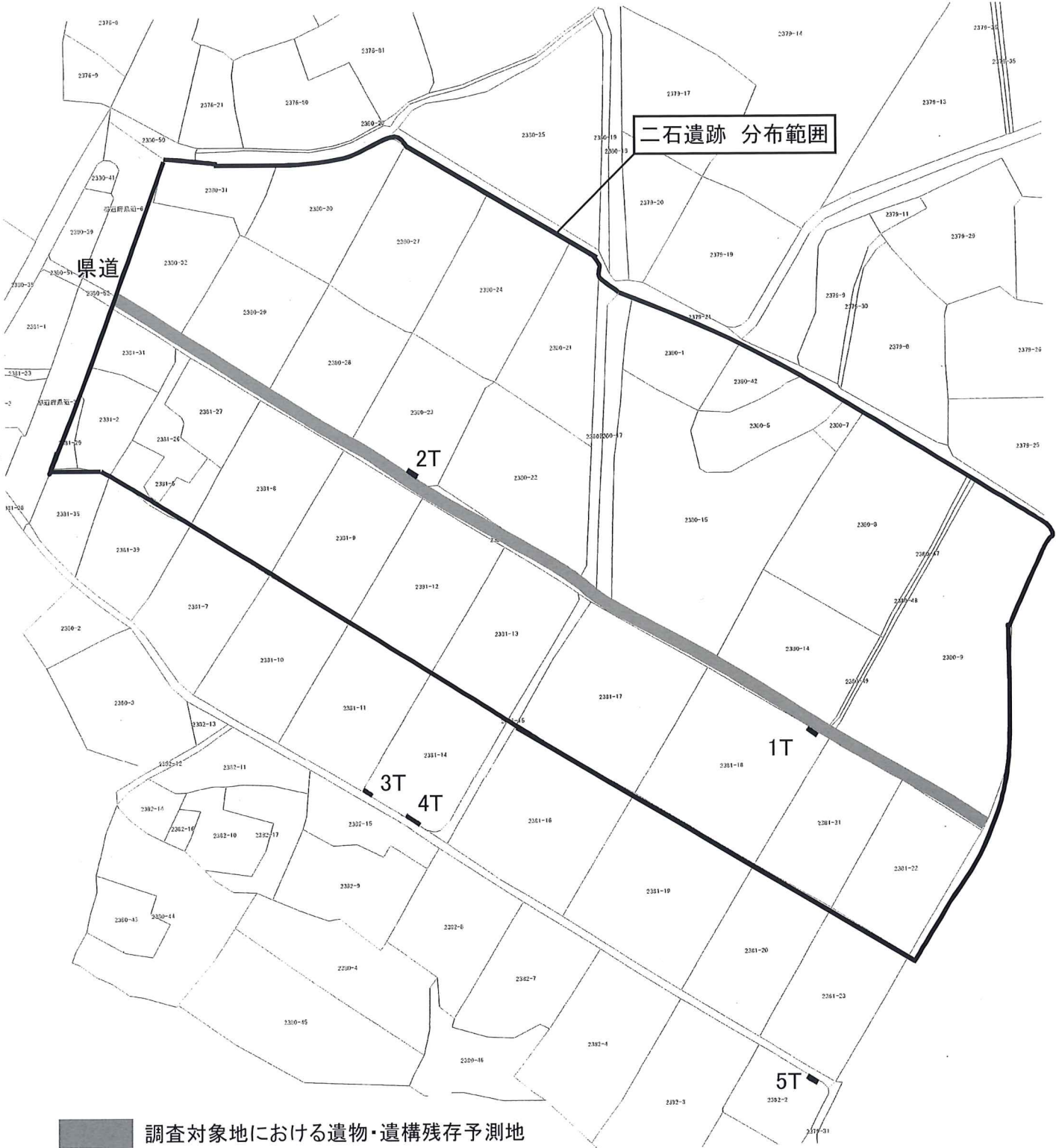
第2節 調査のまとめ

今回の調査では、北側農道に隣接する調査対象地一帯に貝殻押引文や条痕文を呈した吉田式土器が出土したことから、縄文時代早期前葉の遺跡が所在することが明らかとなった。

1 トレンチは狭小ながらも堆積は良好で、遺物も豊富に出土したが、2 トレンチは削平のため一部のわずかな箇所に残存する程度であった。しかし、隣接する北側農道面（工事対象地）は、調査地より一段高い位置にあるため、十分残存している可能性は高いと思われる。それに対し、南側農道隣接畑地帯に設置した3・4・5 トレンチは、いずれも削平を受けており、調査トレンチと農道面の高さがほぼ同レベルにあること、また地形などから判断して遺物包含層は残存しないものと考えられる。

長迫遺跡・二石遺跡が位置する東海岸部南側は近年、縄文時代早期前葉の吉田式土器を伴う遺跡の発掘調査が相次ぎ、良好な資料が発見されている。この地域になぜ、縄文時代早期前葉の遺跡が数多く立地するのか未解明な点が多く、今後両遺跡の本調査を実施する機会を得られるのであれば、重要かつ貴重な資料を提示してくれるに違いない。

なお、今回の調査を踏まえて、二石遺跡は新規発見として埋蔵文化財包蔵地の決定がされた。



調査対象地における遺物・遺構残存予測地



第 12 図 遺跡の分布範囲

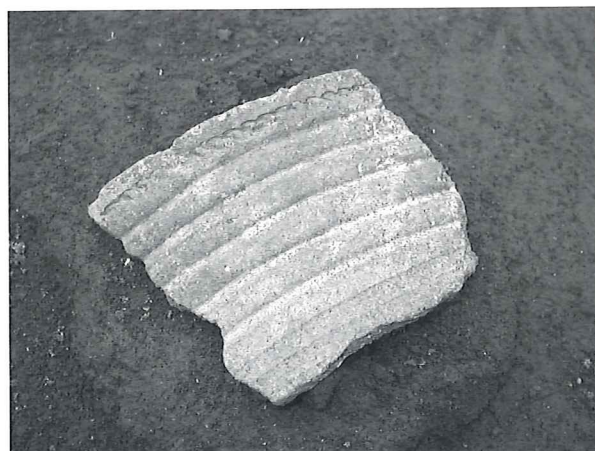
写真図版



調査地風景



1トレンチ調査状況



1トレンチ出土遺物

調査状況 (1)

図版2



2トレンチ調査状況



2トレンチ遺物出土状況



2トレンチ出土遺物

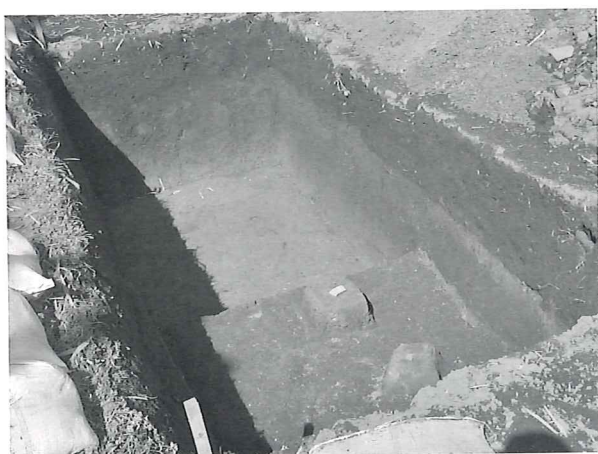


3トレンチ調査状況

調査状況 (2)



4トレンチ調査地状況



4トレンチ調査状況

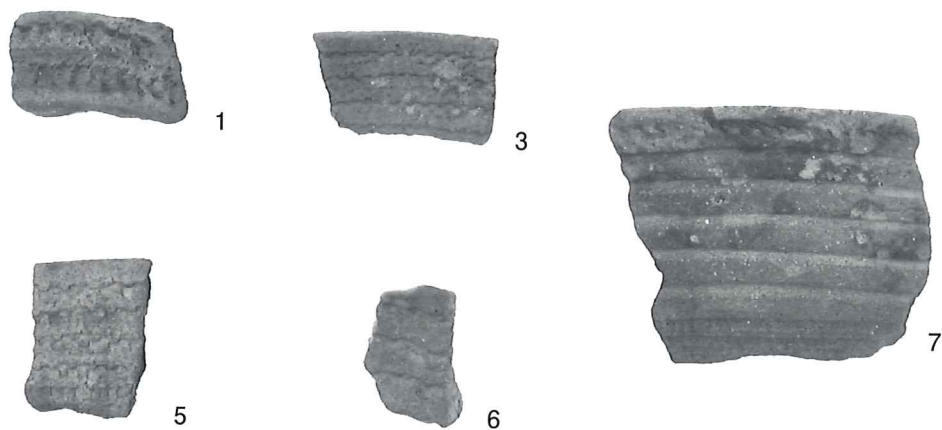


5トレンチ調査風景

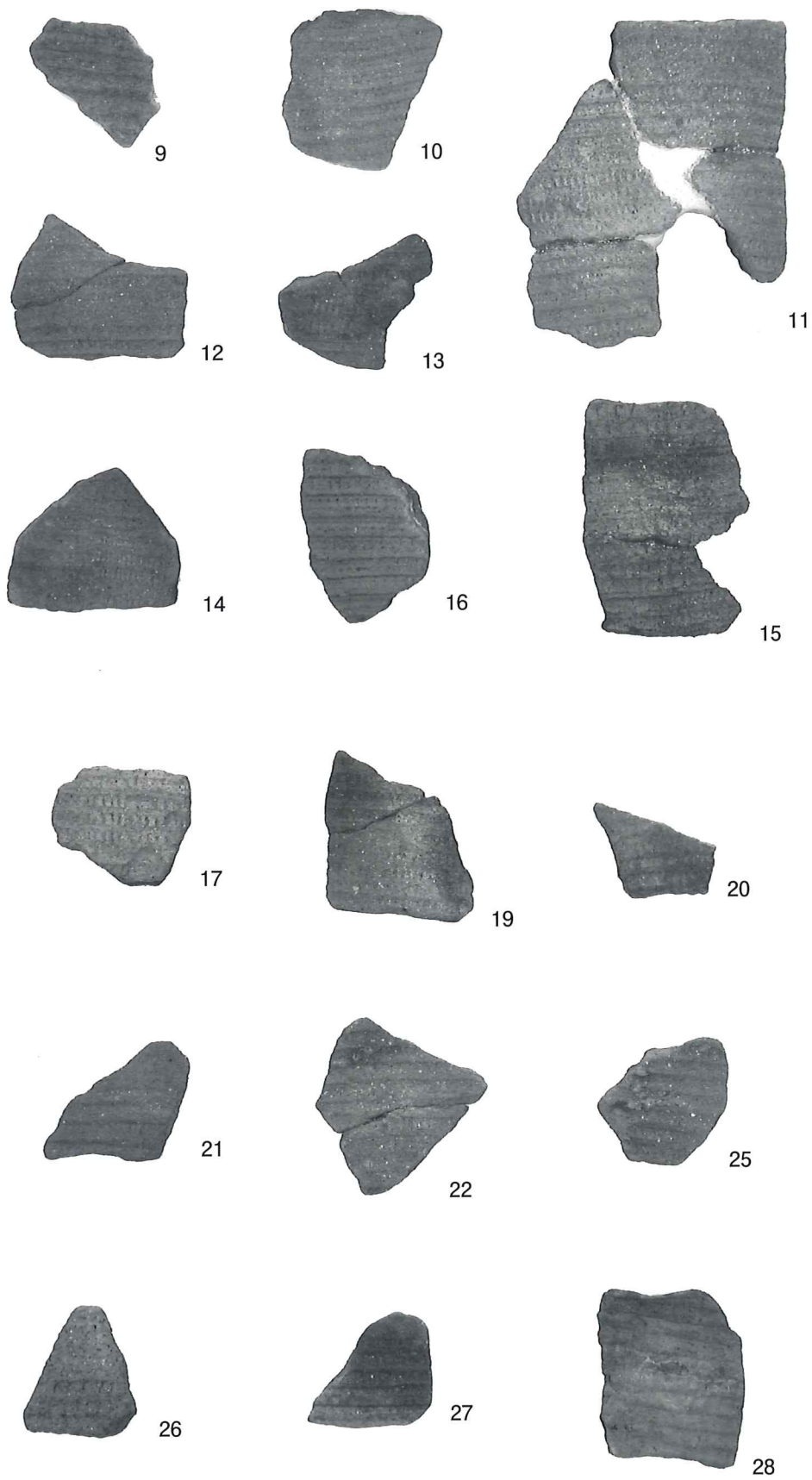


5トレンチ調査状況

調査状況 (3)



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

图版6



29



30



31



34



35



37



41



43



44



38



39



40

出土遺物 (3)



45



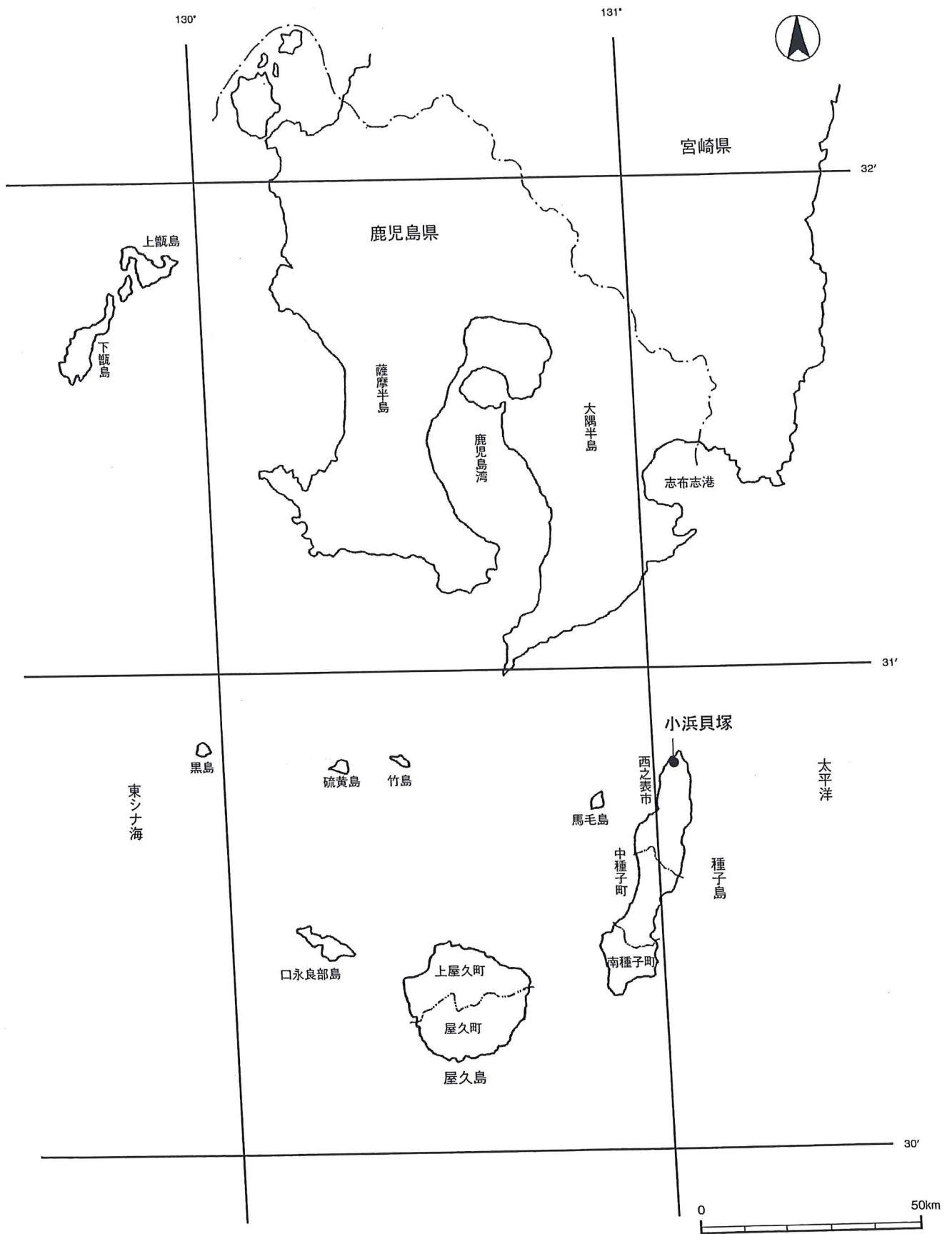
46



47

出土遺物 (4)

小浜貝塚



第1図 小浜貝塚位置図

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

西之表市教育委員会は平成 23 年度から平成 24 年度まで国・県の補助事業を受け市内遺跡詳細分布調査を実施しており、平成 24 年度に種子島家住宅敷地内と小浜貝塚の調査を行った。小浜遺跡は平成 8 年に市営による開発事業に伴う試掘調査を行っているが、砂丘地に形成されているため崩落等が起り、調査が難航したことで詳細を把握するには不十分な結果となった。今回の調査ではそれを補うことはもとより、小浜貝塚の分布範囲の確認と不明な点が多い、縄文時代における種子島の数少ない貝塚の情報を得るため、西之表市教育委員会が調査主体となり、平成 24 年 10 月 22 日から 11 月 16 日まで行った。報告書作成に伴う整理作業は平成 25 年度に行った。

第 2 節 調査の組織

(発掘調査)

発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教 育 長 立石 望
発掘調査企画	西之表市教育委員会 社会教育課 課 長 奥村 学
	西之表市教育委員会 社会教育課 係 長 沖田純一郎
発掘調査担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主 査 和田 正樹
発掘調査作業員	落合奉美・中村義弘・荒牧文子・河本テル子・倉元あゆみ

(整理作業)

発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教 育 長 立石 望
発掘調査企画	西之表市教育委員会 社会教育課 課 長 中村 章二
	西之表市教育委員会 社会教育課 課長補佐 沖田純一郎
整理作業員担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主 査 和田 正樹
整 理 作 業 員	荒木真紀子・宇都美保子

第 3 節 調査の経過

今回の詳細分布調査は当初、砂丘地山頂部の平面調査を予定していた。しかし、砂丘はその性格上、常に崩落の危険性を孕んでいるため、平面調査を断念し、安全性に配慮した砂丘地法面を縦位に断ち切る断面調査に変更した。また、平成 8 年の試掘調査の結果データをもとに、調査対象地を砂丘地南部とし、断面調査であるため、遺物包含層の確認に留意して慎重に調査を行った。以下、調査の経過については日誌抄をもってかえる。

10月22日	月	調査地周辺雑木・雑草等に覆われているため、伐採及び草払いを行う。1・2トレンチの設置。
24日	水	引き続き、雑木伐採・除草作業を行う。3・4トレンチの設置
29日	月	1・2トレンチの掘り下げ、小規模な崩落を度々起こすため、主に重機で様子を見ながら掘り下げを行う。奥村社会教育課長、沖田文化係長、南種子町社会教育課文化係石堂氏来遺跡。
30日	火	1・2トレンチ掘り下げ、ともに法面掘削深3m50cm～3m70cm（隣接道路面より60cm深）の位置から、30cm ² 大前後の自然礫が多数検出。遺物包含層検出されず。沖田文化係長、種子島開発総合センター田脇氏来跡。
31日	水	1・2トレンチともに一晩で大規模崩落を起こしたため、再度重機にて掘り下げ、早急に清掃等を行う。写真撮影。1・2トレンチの埋戻しを重機にて行う。
11月1日	木	3トレンチ掘り下げ、遺物包含層が2層確認される。貝殻等がおびただしく混入。遺物包含層2層のうち、下方層の断面に縄文時代前期の土器片が出土。これにより、分層が可能となる。包含層の砂を篩にかけ、遺物及び貝殻等の選別作業を行う。（崩落が常に起こるため、包含層ごとの遺物採取は断念。）
2日	金	3トレンチ、遺物及び貝殻等の選別作業。獣骨・魚骨も多数出土。
5日	月	3トレンチ、出土した貝殻は多量に出土したため、さらに選別を行い、一部サンプルとして種類ごとにわけ採取。トレンチ清掃、土層の分層作業、写真撮影。
7日	水	4トレンチ掘り下げ、3トレンチと同じく、遺物包含層2層確認される。遺物出土量は3トレンチと比べ少ない。縄文時代前期相当の遺物包含層はさらに下方に下る。包含層の砂を篩にかけ、遺物の選別、採取を行う。
8日	木	4トレンチ、出土遺物の分別作業。トレンチ清掃、土層の分層作業、写真撮影。3・4トレンチの埋戻し。
9日	金	他トレンチとは別カ所の南側砂丘法面に5トレンチを設置。掘り下げ開始、法面掘削深180cmから遺物包含層確認される。廃砂を篩に掛け、採取されたものの中から、弥生時代相当の土器を確認する。さらに下位層の検出作業を実施するも大規模な崩落が起きたため、状況を見ながら再度掘り下げを行うが、縄文時代前期相当の包含層に到達せず。
12日	月	5トレンチ、前日の調査状況から、隣接道路面より下方に縄文時代前期相当の包含層が残存すると思われる。重機で包含層に至るまで慎重に掘り下げを行う。さらに道路面より、130cm下位で縄文時代前期相当包含層を検出。一部まとまってオオツタノハ貝が10数枚出土、直後崩落。危険性伴う上に深い位置で包含層が検出されたため、人力による掘り下げは断念し、重機にて2～3バケツ掘り上げる。その後再び崩落。廃砂を篩にかけ、遺物の選別を行う。魚・獣骨等多数出土。
13日	火	5トレンチ、選別作業、道具等後片付け、埋戻し。
16日	金	トレンチの一部崩落あり。改めて埋戻しを行う。トレンチ周辺の整地及び清掃。トレンチ周辺測量、トレンチ配置図作成。本日にて調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

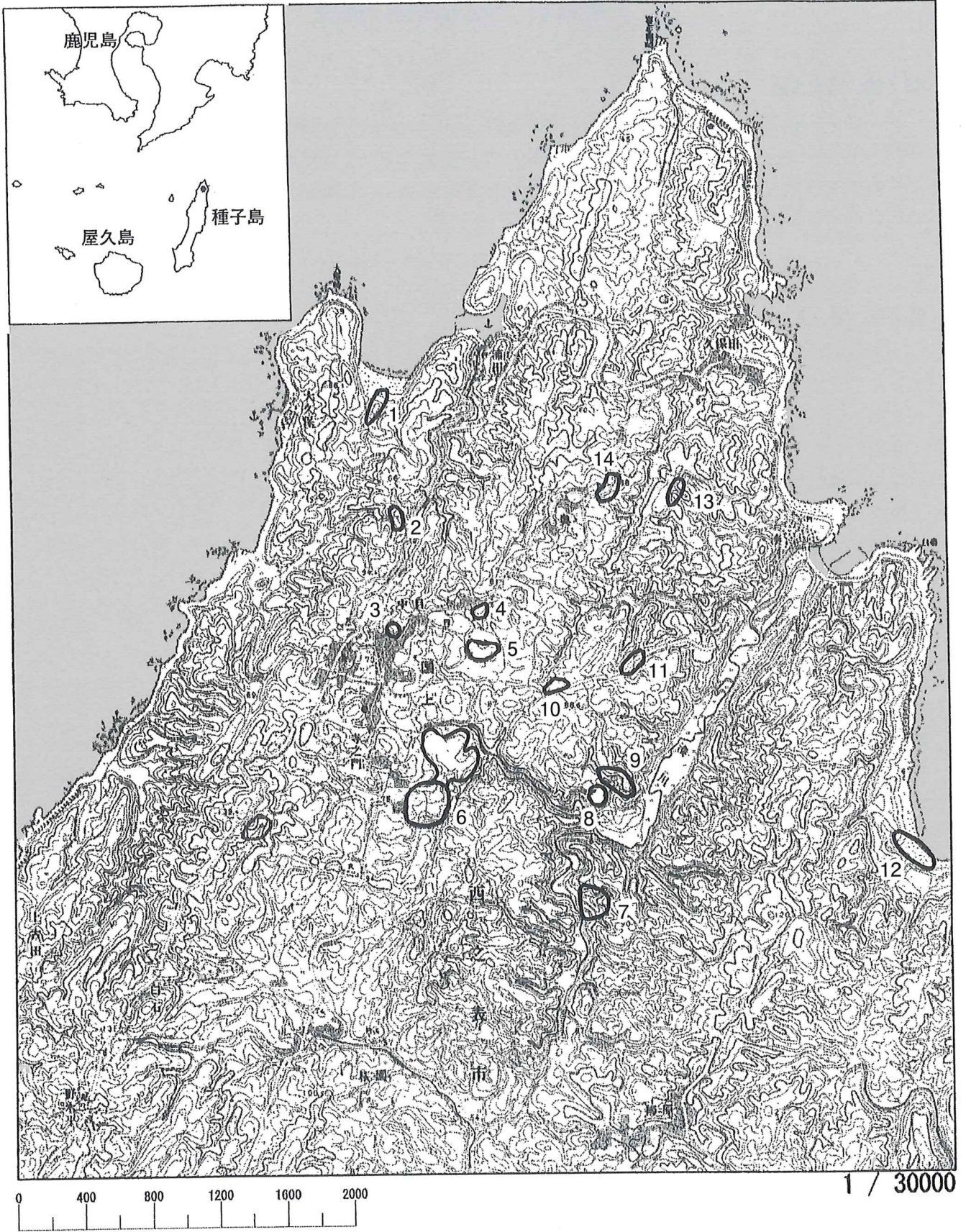
第1節 遺跡の位置と環境

種子島は本土最南端の佐多岬から大隅海峡を隔てた、東南約 40 km の会場にあり、南北 52 km、東西 12 km の北北東から南南西に細く伸びた、最高標高でも 282.3m しかない低平な細長い島で、地形は丘陵性の山地、海岸段丘、河川付近の沖積低地からなり、西方に位置する屋久島とは対照的である。また、西海岸部には比較的砂丘が発達しているが、東海岸は断崖に富んでいる。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町と 1 市 2 町からなる。

小浜貝塚は種子島の北側、日本の海水浴場 88 選に選ばれた西之表市国上「浦田海水浴場」の砂丘地に位置する。周辺の遺跡について見てみると、湊遺跡は種子島で初めて細石刃核が発見された（表面採集）遺跡であり、大中峯遺跡では多数の細石刃核・細石刃が発見（表面採集）された。平庭 B 遺跡では縄文時代前期の轟式土器が出土している。寺之門遺跡からは縄文時代早期の塞ノ神式土器、後期の指宿式・市来式土器や軽石製品などが出土した。今回調査した小浜貝塚も縄文時代前期から弥生後期・古墳時代にかけての遺物包含層が確認されている。出土した遺物には曾畑式土器・鳥之峯式土器や石器類、貝殻、魚・獣骨など食料の残滓だけでなく、オオツタノハ製貝輪も出土した。近年、種子島、特に西之表市では植物系食料の確保が中心であった縄文時代早期の遺跡が多く発見される中、比べて前期の遺跡の発見例は少ない。貝塚遺跡は小浜貝塚以外に、西之表市南西部の住吉西海岸に位置する上能野貝塚も知られており、弥生時代後期から古墳時代にかけての貝塚と見られている。現在、確認されている貝塚文化の様相を呈した遺跡はこの 2 件のみで、当時の海辺での暮らしを窺い知れる貴重な遺跡と言える。

第 1 表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物	備考
1	小浜貝塚	国上浦田	砂丘	縄文前期・弥生～古墳・中世	土器片	H8・24 年詳細分布調査
2	大中峯	国上浦田	台地	旧石器	細石核・細石刃	表面採集
3	稲村	国上中目	低地	縄文	土器片	H10 年確認調査
4	稲庭	国上中目	低地	古墳		H10 年確認調査
5	平庭 A	国上中目	台地	縄文早期・古墳	土器片	H10・22 年確認調査
6	寺之門	国上寺之門	低地	縄文早期・後期・中世	土器片・石器類	H9・23 年発掘調査
7	太田Ⅱ	国上寺之門	台地	縄文・歴史		
8	太田Ⅲ	国上寺之門	台地	歴史		H10 年確認調査
9	太田	国上寺之門	台地	古墳・奈良・中世・歴史	土師器・須恵器・青磁類	H14 年詳細分布調査
10	平庭 B	国上中目	台地	縄文前期	土器片	H10 年確認調査
11	高峯	国上中目	台地	縄文		H10 年確認調査
12	小浜	伊関柳原	砂丘	中世	土器片・人骨	平成 9 年発掘調査
13	湊	国上湊	台地	旧石器・縄文	細石核・土器片	
14	葉山	国上奥	台地	旧石器・縄文早期・晩期	細石刃核・土器片・石器類	平成 19 年発掘調査



第2図 小浜貝塚と周辺遺跡図

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 調査方法

平成24年10月22日から11月16日まで実施した。トレンチは調査対象地内の南西側の砂丘地法面を断ち切るように5か所設置して調査を実施した。場所によっては雑木や崩落の危険性があるため、調査に影響を及ぼすトレンチは状況に応じて面積を最小限にし、遺物包含層の範囲確認と遺物の一部採取のみに止めることとした。調査面積は約19㎡になった。

第2節 層位

土層は場所によって、一部の層が欠落している部分もあるが、基本的には下記のとおりである。

- I層 表土（褐色土層）
- II層 白色砂層
- III層 褐色混貝砂層（遺物包含層：弥生時代終末期～古墳時代初頭期）
- IV層 白色砂層
- V層 褐色砂層
- VI層 暗褐色混貝砂層（遺物包含層：縄文時代前期）
- VII層 黄褐色砂層
- VIII層 暗黄色砂層

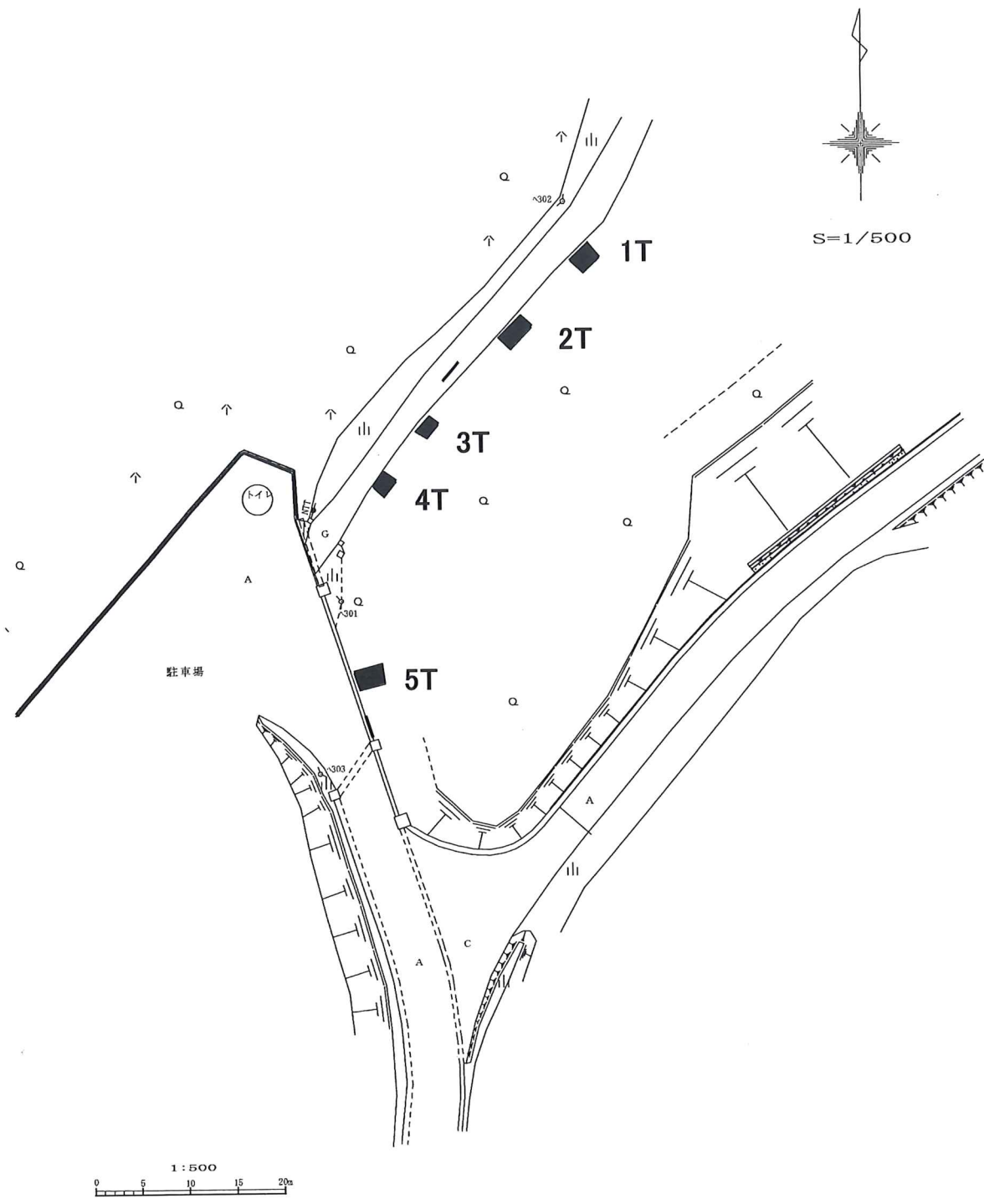
第3節 トレンチ調査状況

各トレンチの調査状況は下記のとおりである。

第2表 トレンチ調査状況

No.	トレンチ名	大きさ (m)	深さ (cm)	最下層	遺物	遺構	備考
1	1 トレンチ	2×2	290 (隣接道路面より約40cm)	VIII層	×	×	
2	2 トレンチ	1.5×3	315 (隣接道路面より約20cm)	VIII層	×	×	
3	3 トレンチ	1.5×2	315 (隣接道路面より0cm)	VIII層	○	×	貝類・獣骨・魚骨・土器片・石器類・貝製品
4	4 トレンチ	1.5×2	290 (隣接道路面より約20cm)	VIII層	○	×	貝類・獣骨・魚骨・土器片
5	5 トレンチ	1.5×3	275 (隣接道路面より約130cm)	VI層	○	×	貝類・獣骨・魚骨・土器片・石器類・貝製品

※深さは、断面の深さ（高さ）を表す。



第3図 トレンチ配置図

第4節 遺構

今回の調査では1・2トレンチⅧ層、法面を断ち切った深さおよそ2mの位置より、30 cm³大前後の円礫がまとまって確認されたが、岩盤付近に見られる自然礫であった。いずれのトレンチからも遺構は検出されなかった。

第5節 遺物

調査の結果、3～5トレンチから自然遺物（貝類、獣骨、魚骨）及び人工遺物（土器片、石器、貝製品）が出土した。出土層は第Ⅲ層及び第Ⅵ層である。断面調査のため、遺物は重機による断面剥ぎ取り後の廃砂を篩に掛けて選別する方法をとった。遺物包含層（第Ⅲ層・第Ⅵ層）ごとの採取を試みるも、常に砂丘の崩落が生じ、遺物が輻輳してしまったものも多く、断念せざるを得なかった。

以下、各トレンチ出土した遺物を種別ごとに述べる。

1. 自然遺物

自然遺物は全て採取したが、そのうち貝類のみは夥しい数の出土量であったため、貝種ごと最大量280 mm×410 mmサイズのビニール袋一つ分を目安に保存状態の良いものを選別し、採取した。

a) 貝類

貝類は3表・4表のとおり判別した。出土状況及び貝種、遺物の状態から残滓遺物であることは明らかである。岩礁域潮間帯の貝類がほとんどで、特にニシキウズ科を中心とした貝類が全体の6割を占めているが、そのうちクマノコガイはなかでも圧倒的である。他種の貝より比較的食べやすいことも理由のひとつであろう。オオツタノハについては5トレンチ第Ⅵ層にまとまって出土されたことから、特別な意味合いを持ったオオツタノハの貝だまりとも考えられるが、精査中に砂丘崩壊が起きたため、記録することができず、やむを得ず重機による採取を行った。

第3表 貝類集計表(1)

種名	個数			計	構成比(%)
	3トレンチ	4トレンチ	5トレンチ		
アマオブネ (アマオブネ科)	22	5	5	32	4.39
イシダタミ (ニシキウズ科)	22	7	6	35	4.80
ヒメクボガイ (ニシキウズ科)	11			11	1.51
ウズイチモンジ (ニシキウズ科)	7			7	0.96
クマノコガイ (ニシキウズ科)	197	155	32	384	52.74
ヘソアキクボガイ (ニシキウズ科)	26			26	3.57
マツバガイ (ヨメガカサ科)			26	26	3.57
ベッコウガサ (ヨメガカサ科)	31	3		34	4.67
イボアナゴ (ミミガイ科)	17	9	24	50	6.86
トコブシ (ミミガイ科)	10		2	12	1.64
フクトコブシ (ミミガイ科)	6			6	0.82

第4表 貝類集計表 (2)

種名	個数			計(個)	構成比(%)
	3トレンチ	4トレンチ	5トレンチ		
イソニナ (エゾバイ科)	15		3	18	2.47
テツボラ (アッキガイ科)	10	4		14	1.92
シラクモガイ (アッキガイ科)			1	1	0.13
テツレイシ (アッキガイ科)	5		1	6	0.82
ムラサキイガレイシ (アッキガイ科)	1		1	2	0.27
クリフレイシ (アッキガイ科)	1			1	0.13
ツノレイシ (アッキガイ科)	1			1	0.13
ガンゼキボラ (アッキガイ科)	1			1	0.13
リュウキュウツノマタ (イトマキボラ科)	1			1	0.13
ハチジョウダカラ (タカラガイ科)	4			4	0.54
ヤマタニシ (ヤマタニシ科)		1	3	4	0.54
タカチホマイマイ (オナジマイマイ科)		1		1	0.13
チャイロマイマイ (オナジマイマイ科)		8	4	12	1.64
オオツタノハ (ツタノハ科)	5	1	13	19	2.60
チョウセンハマグリ (マルスダレガイ科)	3		1	4	0.54
リュウキュウマスオ (シオサザナミ科)	1	1		2	0.27
スガイ (サザエ科)	14			14	1.92
合計	411	195	122	728	99.84

b) 獣・魚骨

3トレンチ

ブダイ科の上顎骨 (2点)・上咽頭骨 (1点)・下咽頭骨 (2点)・左上顎骨 (1点), ベラ科の上咽頭骨 (1点), サメ目の脊椎骨 (11数点), イノシシと思われる上下肢骨 (20数点) や上顎骨 (1点), シカの下顎骨 (1点), ウミガメの下顎骨 (2点) などが検出された。それら以外は細片のため部位は不明だが, 黒褐色の焼骨と思われるもの1点を含め, 100数点以上も確認されている。出土層は第Ⅲ層及び第Ⅵ層である。

4トレンチ

魚類の脊椎骨 (1点), ウミガメの骨板 (5点), その他獣骨 (3点) が検出された。出土層は第Ⅲ層及び第Ⅵ層である。

5トレンチ

ベラ科の下咽頭骨 (4点), サメ目の脊椎骨 (3点), イルカ?の脊椎骨 (1点), 魚類の脊椎骨 (15点), ウミガメの下顎骨 (2点)・骨板 (小片含む14点), イノシシの下顎骨 (1点)・下肢骨 (2点), 胴骨 (2点) シカの上顎骨 (1点), その他焼骨 (1点) 含む部位不明の細片骨 200数点以上検出された。出土層は第Ⅲ層及び第Ⅵ層である。

いずれのトレンチも魚骨よりも比較的大きめで残存しやすい獣骨が割合を占めている。全て10cm内に砕かれた残滓遺物である。

2. 人工遺物

3～5 トレンチから土器片・石器類・軽石製品・貝製品等パンケース 1 箱分が出土した。土器は 3 トレンチの断面に検出された土器片や胎土，文様の様相から遺物包含層（第Ⅲ層・第Ⅵ層）ごとの判別が可能である。

a) 土器

3 トレンチ

出土層は第Ⅵ層のみである。1～12 は外面全体に渡ってヘラ状もしくは棒状の施文具を使って幾何学的かつ鮮明な沈線文を施した土器片である。1 は口唇部に縦位のキザミ目が見られる。外面口唇部近くには断続的な沈線文を，その下位には四角形の沈線文を施している。内面には沈線が断続的に巡らしている。2・3 は若干外反した口縁部の土器片である。7・8・10 は胎土に金雲母を含む。12 は丸底を呈し，底部からやや丸みを持たせながら胴部上半はほぼ直立し，そのまま口縁部に至る。文様はこれまでの土器片と同様に平行もしくは四角形の沈線文が施されている。さらに底部からの立ち上がりには鋸歯文を刻んでおり，外面全体に煤の付着が見受けられる。13～18 は文様の鮮明さはなく，浅い沈線を巡らしている。19・20 は底部からの立ち上がり部分で，丸みを呈しており底部寄りに横位の沈線文を施す。また 19 は内面に平行沈線が施されている。19 は内面全体に 20 は内面の左右上部端に煤の付着が見られる。21 は口唇部に連点状の刺突文を施し，口縁部上端から外面 3 条，内面 2 条の刺突文を横位に巡らす。さらに下位には外面縦位，内面横位に沈線文が見られるが，内面の沈線文は連続しない。器形はわずかに外反するものと思われる。

22・23 は外面横位に，さらに約 2cm 下位に縦位の沈線文を施し，その間に連点文を横位に 2 条巡らした同一個体の土器片と思われる。24 は不明瞭だが刺突文もしくは押引文を横位に施している。内面は煤の付着量が多い。25 は縦位に太くかつ断続的にひっかいた間に格子状の細い沈線文を施している。内面全体に煤が付着する。

4 トレンチ

出土層は第Ⅲ層である。3 点のみ小片が出土している。26 はやや粗いハケ目を斜，縦位に施している。27 は頸部の一部と思われる。外内面ともに斜位にハケ目，さらに外面横位に 1.5 cm 幅の隆帯を貼付し，その上に 2 条の沈線文を施している。外面全体に煤が付着している。28 は外反を呈しており，頸部の一部と思われる。外面には横位に 1 cm 幅の隆帯を貼付し，ヘラ状の施文具でキザミ目を施している。そのキザミ目は縦位に隆帯を超えて 2.5 cm ほどの長さ呈している。26～28，3 点ともに金雲母を含んでいる。

5 トレンチ

第Ⅲ層・第Ⅵ層から出土している。29・30 は第Ⅵ層からの出土である。29 はヨコハケ目を施した後，外面には幅が均一の押引文を，内面には沈線文を施しており，貝殻押引文と類似するが，押引間の幅が広く，溝が深い。ヘラ状もしくは棒状の施文具で施したものと考えられる。30 は外面横位に均一の沈線を 6 条施している。31～36 は第Ⅲ層からの出土である。胎土に金雲母及び白粒を多く含む。31 は頸部付近の小片と思われる。2cm 前後の幅広い隆帯を貼付し，その上に 2 条のヘラ描きによる深い沈線を施している。32 は口縁部である。器形はわずかに外反し，外面は縦位のハケ目後，口唇部下に横位のハケ目を施す。さらに，横位のハケ目を軽く擦り消すように口唇部下 3.5 cm に渡りナデ仕上げ，内面は横位にハケ目を施した後，外面と同様の仕上げを施している。口唇部には棒状の施文具によるごく浅い連点状の押圧が 6 つ確認される 33 は外反していることから，上部欠損した口縁部である。外面に縦位，内面に横位のハケ目の後，縦ナデを施す。28 と同様に隆帯を貼付し，キザミ目を施したものが左下にかろうじて残る。34 は大部分の口縁及び胴下半を欠き，半周程度が残ったものである。口縁は大きく外反し，

外内面ナデ，外面頸部に4条の1周完結しない沈線を施している。口縁部に幅4cm前後，中央部に幅8センチ前後の帯状に1周した煤が付着する。35は34と同様の様相を見せることから，同一土器と思われる。36は口縁部が欠損した頸部から胴部にかけての部分である。1条の隆帯を横位に貼付し，直下に弧状の隆帯を2カ所施している。28・33と同様に隆帯を貼付けるが，粗雑な貼付けと弧状隆帯が確認されたことから他のものとは異質な土器である。外面縦位にハケ目のあと横位にナデ，内面は横位にナデを施す。煤が口縁部から胴部にかけて8cm前後の幅で付着する。

b) 石器類

3・4 トレンチともに出土されなかった。

5 トレンチ

7点出土したが，いずれとも磨石・敲石類である。37は敲打痕が至る所に見られる。裏面には剥離面が見られ，使用の際に破砕したものと思われる。石皿的な要素も考えられる。38～43は磨り・敲きの両方の痕跡が見られ，使用の際に40・43は破損したものと思われる。

c) 軽石製品

3 トレンチ

使用痕が確認されたものは2点である。44は表面に溝状の細長い窪みを2本持つもので，表裏面ともに磨りが顕著である。45は両面中央に丸く浅い窪みを持つものである。

4 トレンチ

軽石製品は出土されなかった。

5 トレンチ

使用痕が確認された軽石製品は3点である。46は表面上部に溝状の細長く，ごく浅い窪みと右端中央にL字に磨った痕跡が見られ，裏面には浅い窪みを持つ。47は表面中央及び頭頂部に窪みを持つものである。48は右端下方寄りに浅いU字状の磨った痕跡が見られる。

D) 貝製品

3 トレンチ

貝製品は2点出土している。49・50ともにオオツタノハ貝輪である。研磨調整はされていない。

50は一部欠損しているが，大型である。

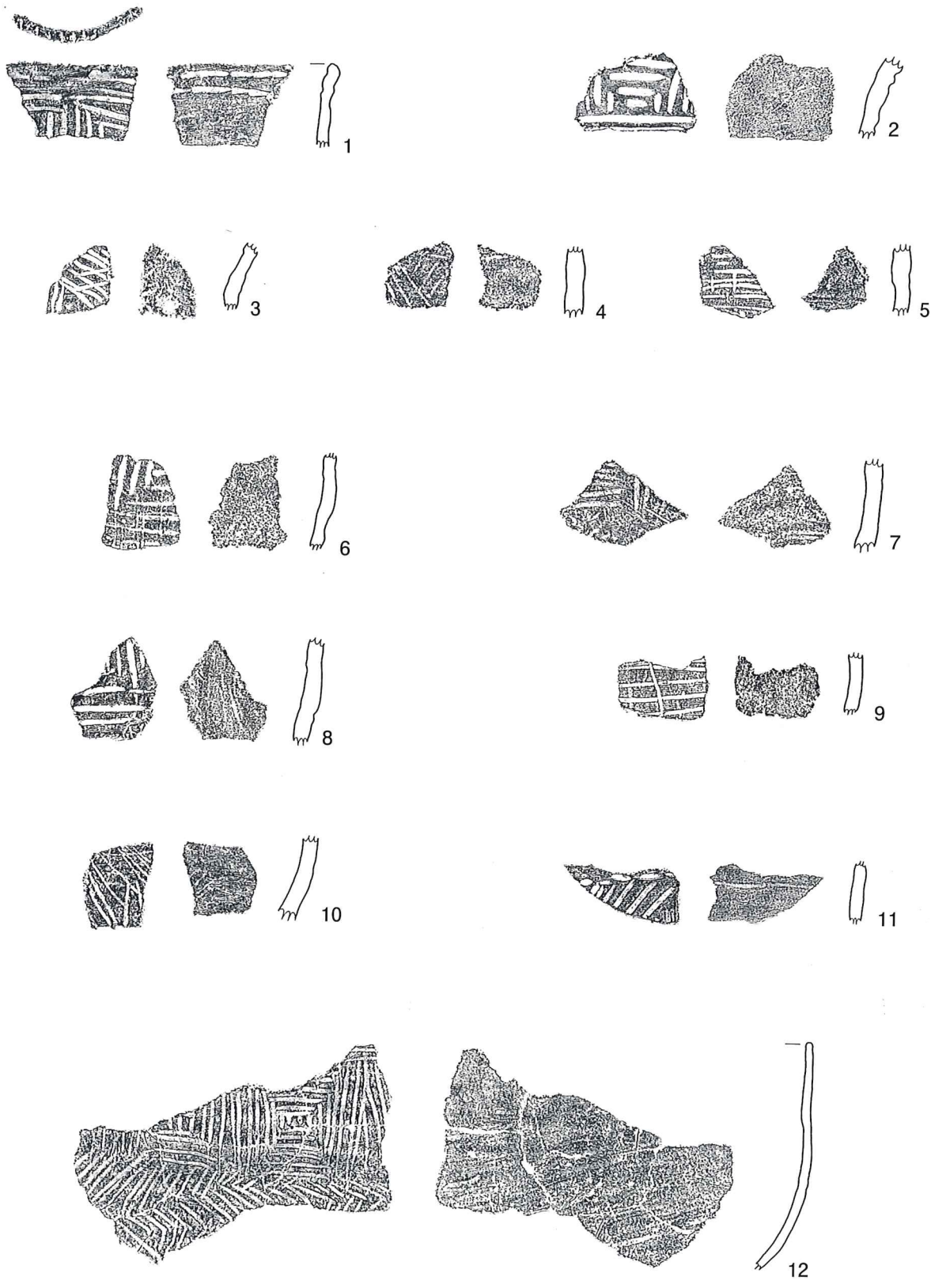
4 トレンチ

貝製品は出土されなかった。

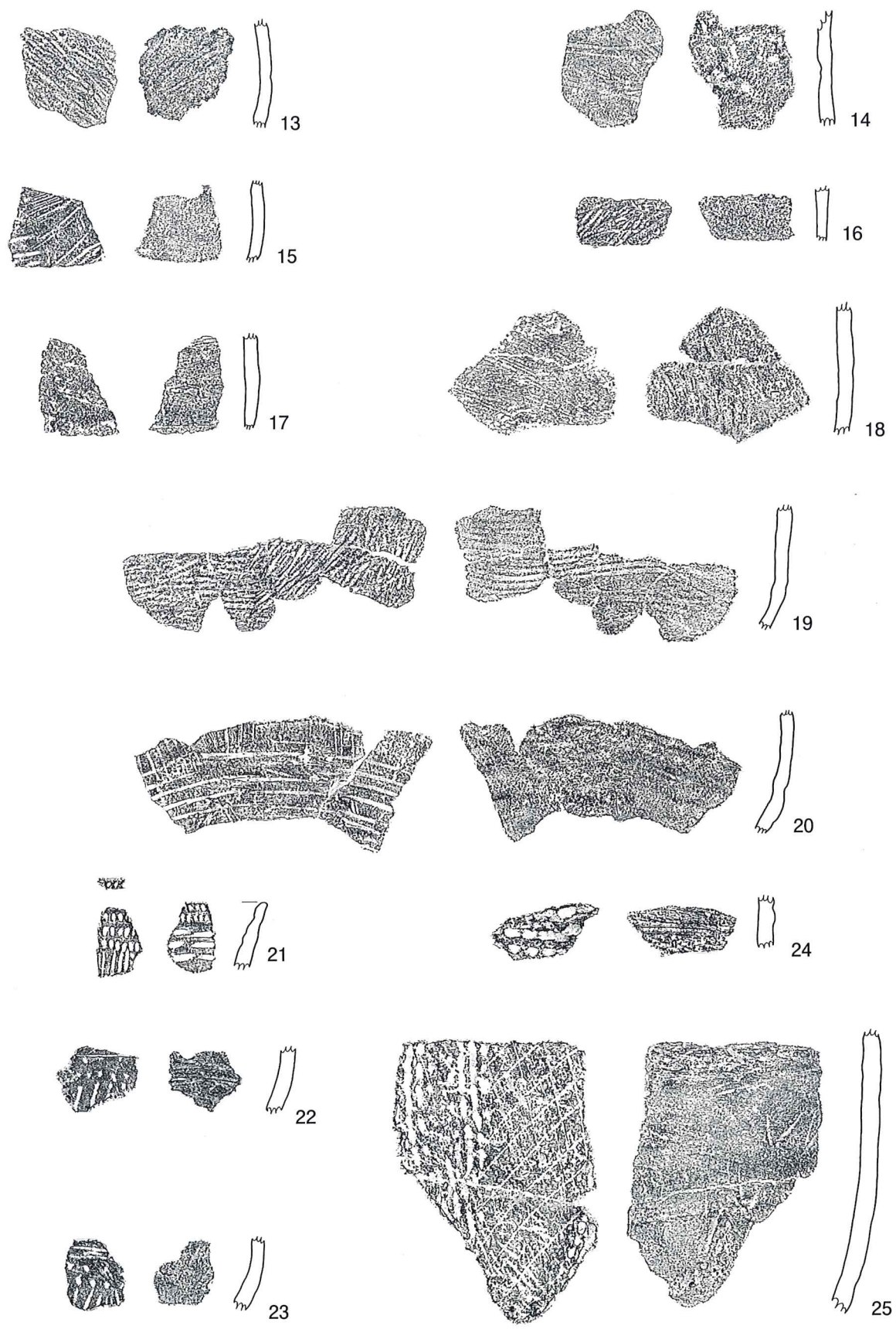
5 トレンチ

1点のみ出土している。51はオオツタノハ貝殻頂部を穿孔した部分である。5 トレンチからオオツタノハ貝がまとまって出土したものの，貝輪の出土は見られなかった。

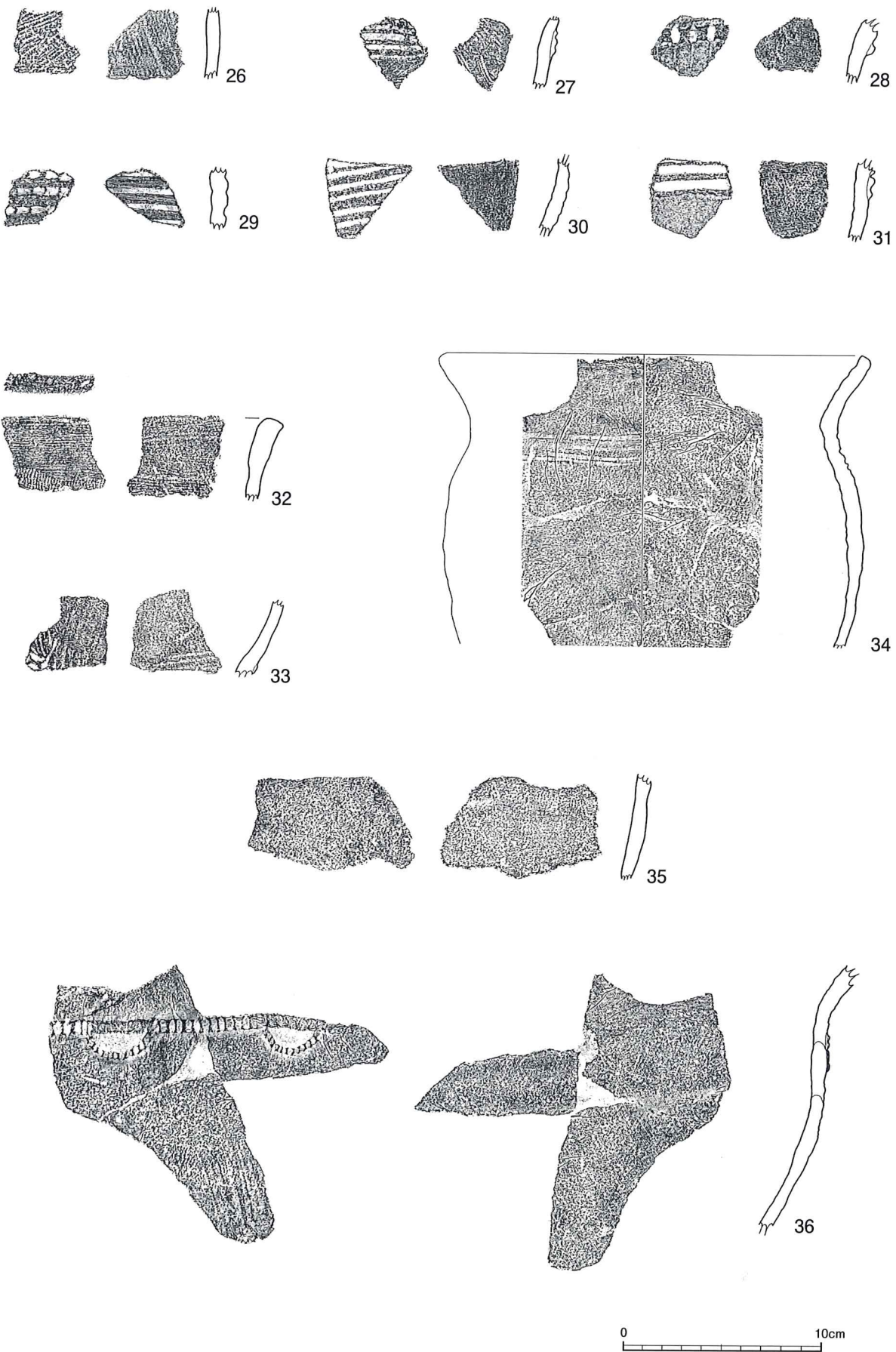
遺物の整理において，鹿児島県立埋蔵文化財センター 東和幸氏，種子島開発総合センター臨時職員 尾形之善氏から指導・援助を受けた。



第4図 出土遺物 (1)



第5図 出土遺物 (2)



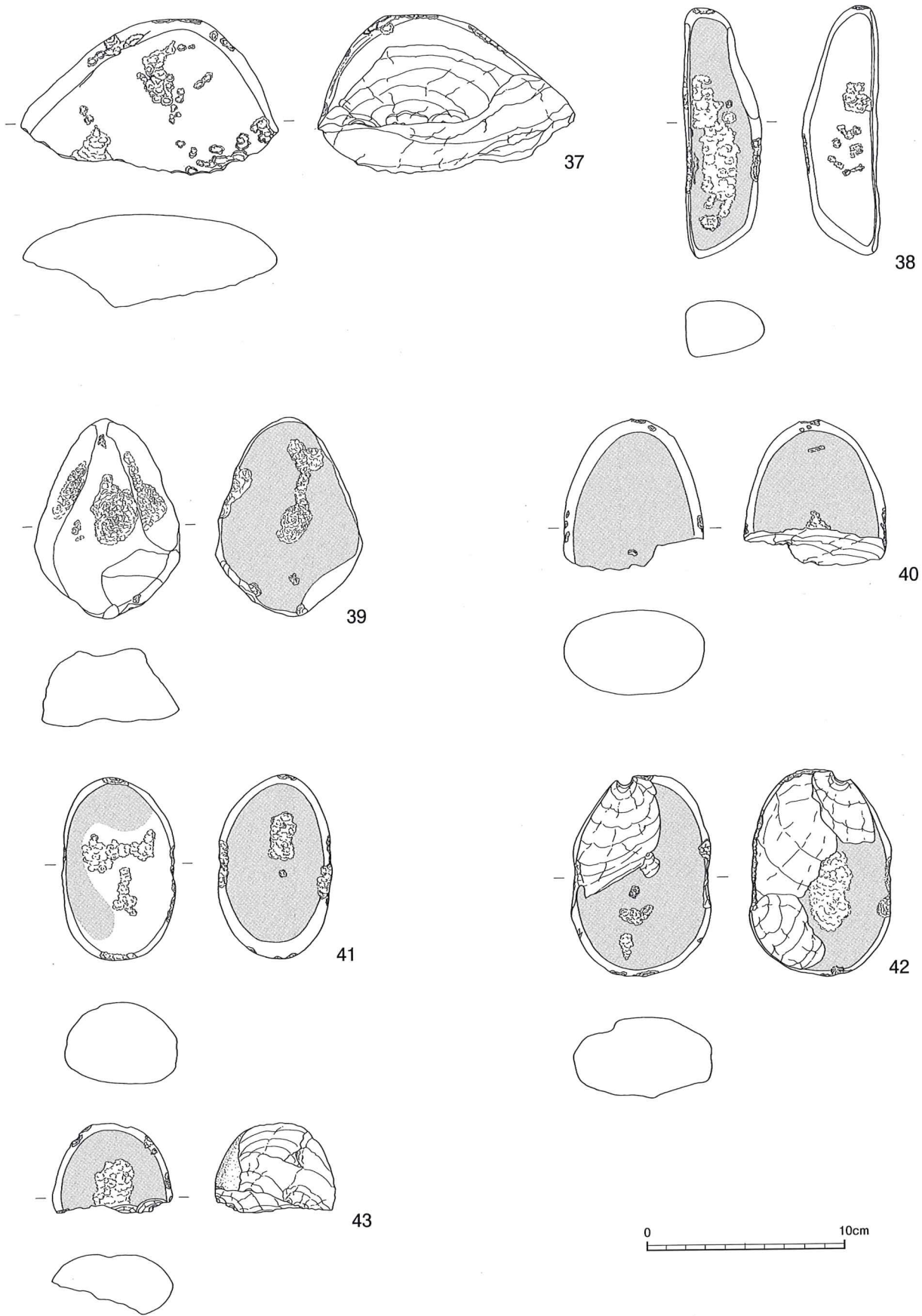
第6図 出土遺物 (3)

第5表 土器観察表 (1)

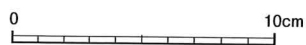
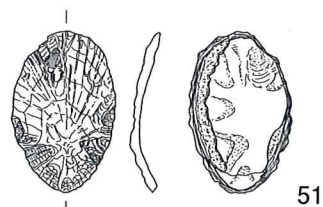
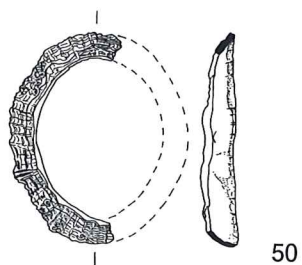
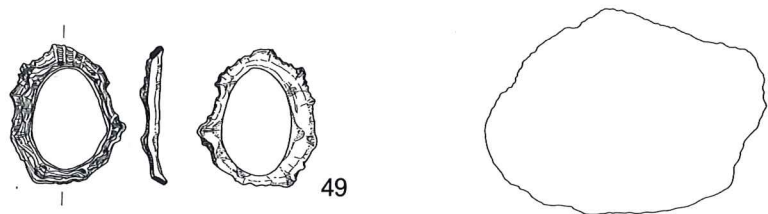
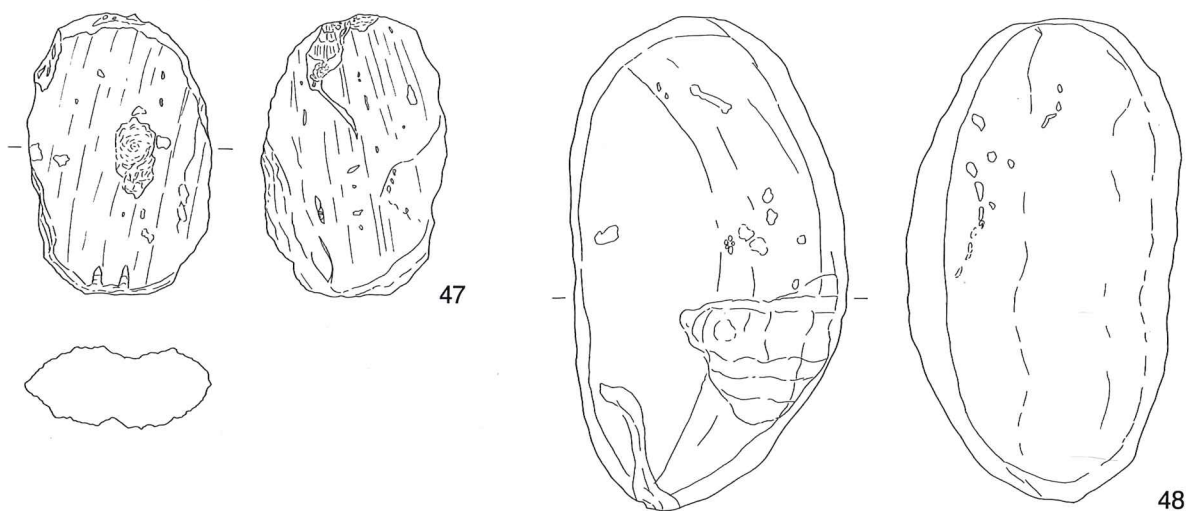
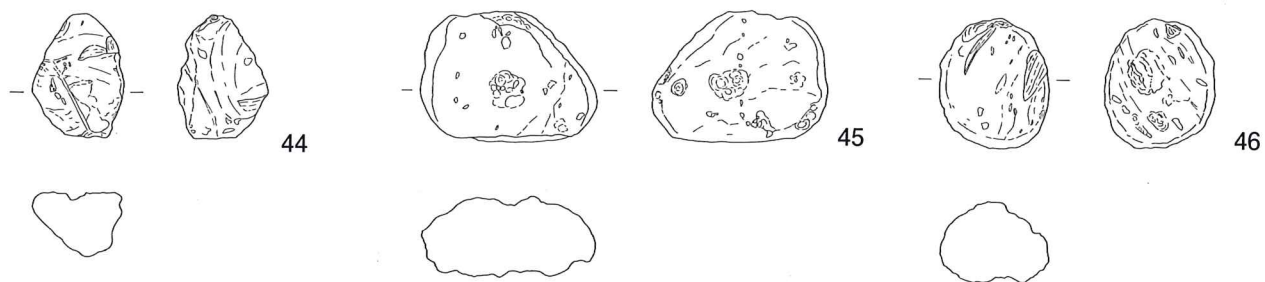
挿図	番号	取上番号	色 調		胎 土	備考
			外 面	内 面		
4	1	3T 一括 25	灰黒茶褐色	明茶褐色	長石・石英・雲母・砂粒	口縁部
	2	3T 一括 1	黒茶褐色	茶褐色	長石・石英・雲母・砂粒	口縁部
	3	3T 一括 35	暗茶褐色	茶褐色	長石・石英・砂粒・雲母・礫	口縁部
	4	3T 一括 31	明茶褐色	明茶褐色	長石・石英・雲母・砂粒	
	5	3T 一括 4	黒茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・砂粒	
	6	3T 一括 39	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	
	7	3T 一括 40	灰黒茶褐色	黒茶白色	長石・雲母・砂粒	金雲母を含む
	8	3T 一括 22	明茶褐色	明茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒・礫	金雲母を含む
	9	3T 一括 15	灰黒茶褐色	黒茶褐色	長石・砂粒・礫	
	10	3T 一括 16	暗茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	金雲母を含む
	11	3T 一括 5	乳茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	12	3T 一括 21・24・26・ 27・33・37	黒茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	口縁部
5	13	3T 一括 23	灰黒茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・砂粒	
	14	3T 一括 28	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	15	3T 一括 36	乳赤茶褐色	明茶褐色	長石・雲母・砂粒	
	16	3T 一括 6	灰黒茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・砂粒	
	17	3T 一括 34	茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒	
	18	3T 18・48	暗茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	19	3T 一括 2・ 7・8・9・45	黒茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	20	3T 一括 19・ 29	乳赤茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	
	21	3T 一括 11	黒褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	口縁部
	22	3T 一括 43	灰黒茶褐色	暗茶褐色	石英・長石砂粒	
	23	3T 一括 30	灰黒茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	
	24	3T 一括 46	暗茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	
	25	3T 一括 17・20	明茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・砂粒	
6	26	4T 一括 14	明茶褐色	灰茶褐色	長石・雲母・砂粒	金雲母を含む
	27	4T 一括 13	黒茶褐色	茶褐色	石英・長石・雲母・砂	金雲母を含む
	28	4T 一括 12	茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒	金雲母を含む
	29	5T 一括 67	乳茶褐色	灰赤茶褐色	石英・長石・砂粒	

第6表 土器観察表 (2)

挿図	番号	取上番号	色 調		胎 土	備考
			外 面	内 面		
6	30	5T 一括	暗茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・礫	
	31	5T 一括 74	乳茶褐色	灰黄茶褐色	長石・雲母・砂粒	
	32	5T 一括 82	乳赤茶褐色	茶褐色	長石・石英・雲母・砂粒	口縁部 金雲母・白い砂 粒を多量に含む
	33	5T 一括 52	赤茶褐色	茶褐色	長石・雲母・砂粒	口縁部 金雲母・白い砂 粒を多量に含む
	34	5T 一括 54 55・56・57・ 58・59・61・ 62・63・64 70・72・73・ 75・77・78・ 79・81・81	明茶褐色	灰黄茶褐色	長石・雲母・砂粒	口縁部 金雲母・白い砂 粒を多量に含む
	35	5T 一括 71	明茶褐色	乳赤茶褐色	長石・雲母・砂粒・礫	金雲母・白い砂 粒を多量に含む
	36	5T 一括 51 ・53・69	灰黄茶褐色	乳赤茶褐色	長石・雲母・砂粒	金雲母・白い砂 粒を多量に含む



第7図 出土遺物 (4)



第8図 出土遺物 (5)

第7表 石器・軽石製品・貝製品観察表

挿図	番号	器種	取上番号	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	材質
7	37	敲石	5T 一括 85	7.8	12.9	4.6	535	砂岩
	38	磨石・敲石	5T 一括 84	12.5	3.9	2.6	206	砂岩
	39	磨石・敲石	5T 一括 87	10.0	7.3	3.9	332	砂岩
	40	磨石・敲石	5T 一括 88	7.5	7.1	4.1	273	砂岩
	41	磨石・敲石	5T 一括 86	9.4	5.8	4.1	291	砂岩
	42	磨石・敲石	5T 一括 89	10.4	7.3	4.0	377	砂岩
	43	磨石・敲石	5T 一括 68	4.5	6.1	3.1	81	砂岩
8	44	軽石製品	3T 一括	4.7	3.4	2.4	3	軽石
	45	軽石製品	3T 一括	5.0	6.6	3.0	17	軽石
	46	軽石製品	5T 一括	4.9	4.1	3.1	10	軽石
	47	軽石製品	5T 一括	10.6	7.0	3.1	49	軽石
	48	軽石製品	5T 一括	18.6	10.5	7.8	308	軽石
	49	貝製品 (貝輪)	3T 一括	5.2	4.4	0.8	6	オオツタノハ
	50	貝製品 (貝輪)	3T 一括	8.0	6.8	0.4	12	オオツタノハ
	51	貝製品 (殻頂部)	5T 一括	6.1	4.0	0.4	15	オオツタノハ

第IV章 調査のまとめ

第1節 遺跡の範囲等

調査の結果から、3～5 トレンチを中心とした南部砂丘地に縄文時代前期と弥生時代終末期～古墳時代初頭期の二つの遺物包含層が残存することが判明した。また、これらの遺物包含層は1・2 トレンチを設置した北部砂丘地に向かうにつれ、消失するものと思われる。5 トレンチは隣接道路面よりさらに130 cm深さの位置で縄文時代前期の遺物包含層が確認されたことにより、隣接道路及び駐車場が所在する南西側地中深くに広がる可能性が示された。

第2節 調査のまとめ

調査面積が狭小であり、砂丘という調査に支障を来す不利な環境で、遺物包含層ごとに採取できなかったことは残念であるが、様々な制約を受けつつも豊富な遺物が出土した。貝殻や魚・獣骨など自然遺物（残滓遺物）が大半を占める中、それらの調理を行った痕跡を裏付けるものとして、至る所に敲击面が顕著な磨石・敲石、そして煤の付着量の多い土器が出土したことである。それらは、硬い貝や骨を砕くための道具、そして煮炊きをする道具として当時の様子が容易に推測できる。

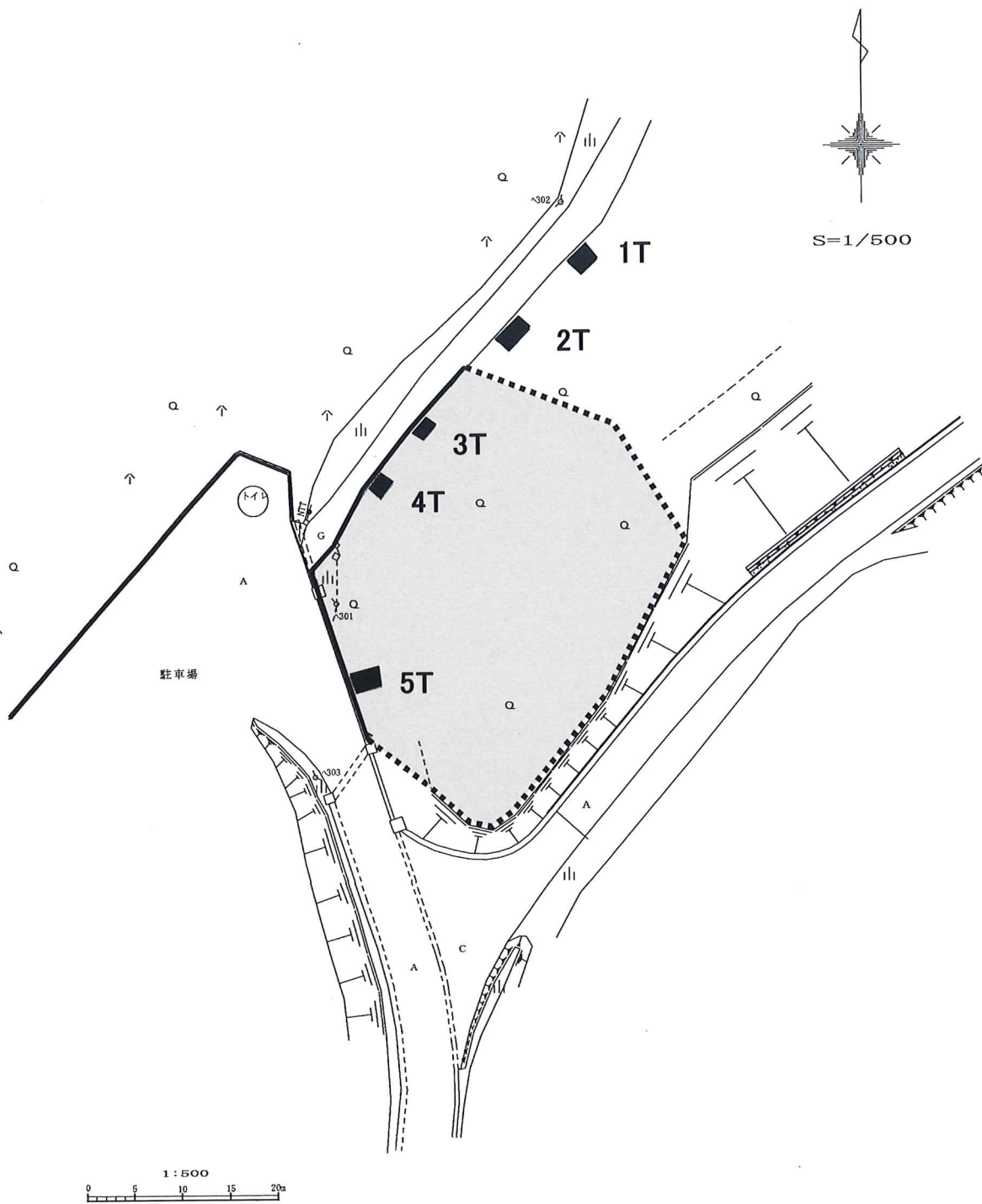
土器は幾何学模様の沈線文を施し、丸底を呈していることから、縄文時代前期を代表する曾畑式土器と思われる。出土層は第VI層である。近年、種子島特に西之表市における縄文時代前期の調査事例が少なく、曾畑式土器を研究するうえで小浜貝塚の資料は貴重なものとなった。

また、第III層から中種子町鳥之峯遺跡を標式とする鳥之峯式土器と同一タイプの土器が出土しており、弥生時代終末から古墳時代初頭期に位置づけられるものと考えられる。口縁部が外反し、胎土に多くの金雲母を含み、土器の器面には隆帯または沈線をめぐらし、直下に弧状もしくは縦位の沈線を施したものが鳥之峯式土器の特徴である。小浜貝塚の土器は、口縁部の下位に隆帯を1条または沈線を3～4条施している点は鳥之峯式土器と共通しているが、その下位に見られる弧状文が隆帯で表現していたり、幅広の隆帯上にキザミ目を施すものがあったりと様々である。これらは時間差を示している可能性があるため、その判断材料として、土器に付着した煤の分析を今後の検討課題としたい。

石器は敲击面が顕著なものだけではなく、使用時に破碎したと思われるものもある。よく使いこまれており、海辺の調理には欠かせないものであったことが窺い知れる。同時に調理道具として磨面や細長い窪みが見られることから、砥石の役割であったと思われる軽石製品も出土している。

また、貝製品としてオオツタノハ貝輪が出土した。研磨調整は見られないが、貝殻頂部を穿孔した完形品、一部欠損したもの、くり抜かれた殻頂部のもの、それぞれ1点ずつ確認されている。装身具として使用されたかどうかは不明だが、貝輪の素材となるオオツタノハは、散在して出土する他の貝殻とは違い、ある一部にまとまって出土した。このことから単なる自然遺物（残滓遺物）ではなく、重要なものとして保存していた可能性も考えられる。

貴重なタンパク源として、当時の小浜貝塚の人々はあらゆる海辺の生き物だけではなく、身近な動物も食し、厳しい自然環境を生き抜いてきた。それに伴う多様な道具も生産したと考えられるが、今回の調査では骨角器など狩猟・漁労具に関する遺物が出土されなかったため、生活様相の全容は不明である。だが、分布範囲が砂丘地南部側に特定されたことは今後の調査を容易にするだけでなく、遺跡の保存・活用を図るうえでも大きな成果であったと言えよう。



第9図 小浜貝塚の分布範囲

写真図版



調査現況



調査地遠景



1トレンチ調査状況



2トレンチ調査状況



調査状況 (1)



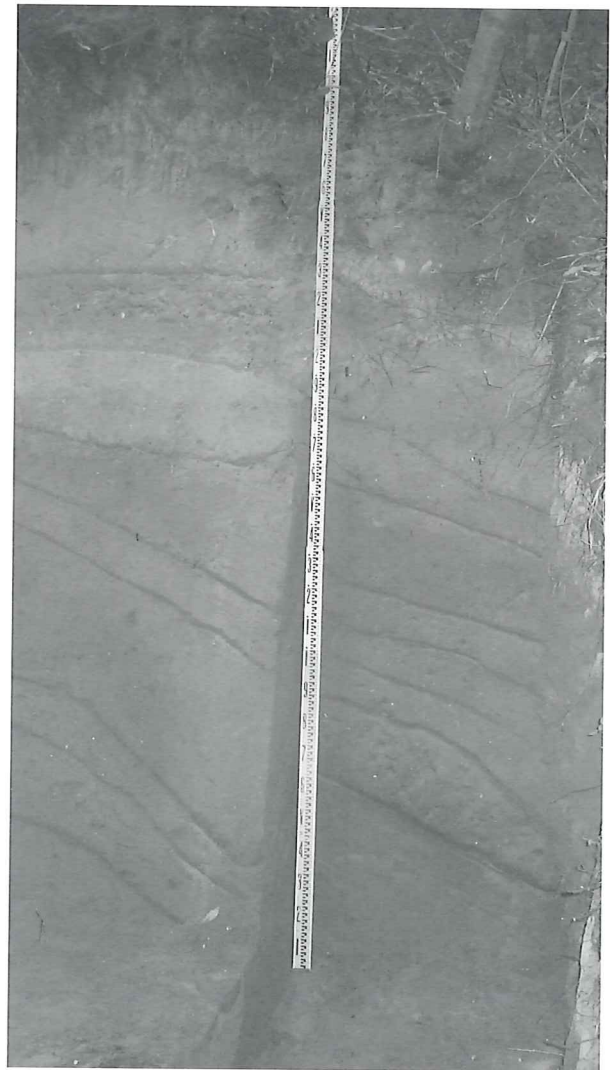
3トレンチ調査状況



4トレンチ調査状況



3トレンチ調査状況



4トレンチ調査状況

調査状況 (2)



3トレンチ遺物出土状況



3トレンチ遺物出土状況



5トレンチ調査状況

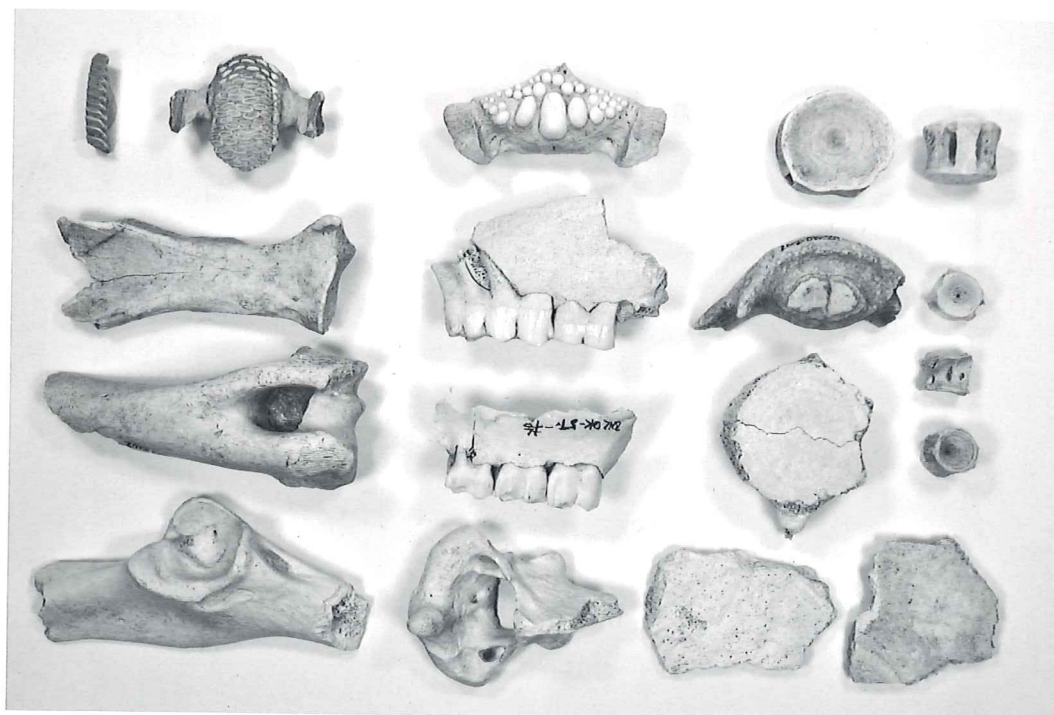


5トレンチ調査状況

調査状況 (3)

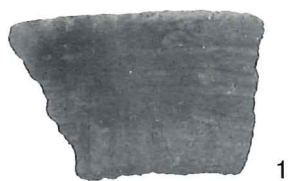


自然遺物(貝類)



自然遺物(魚・獣骨)

出土遺物 (1)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

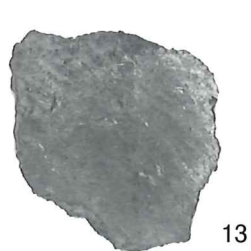


11

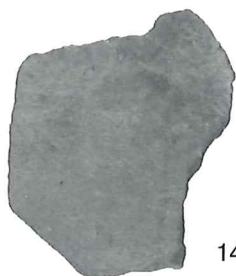


12

出土遺物 (2)



13



14



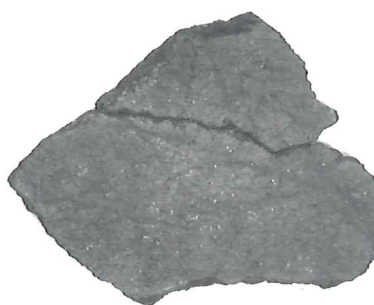
15



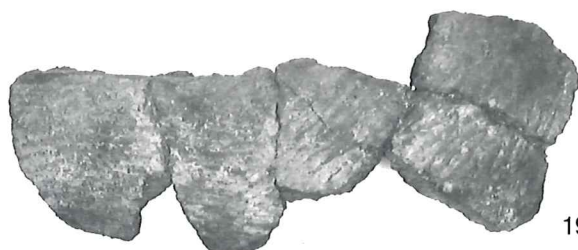
16



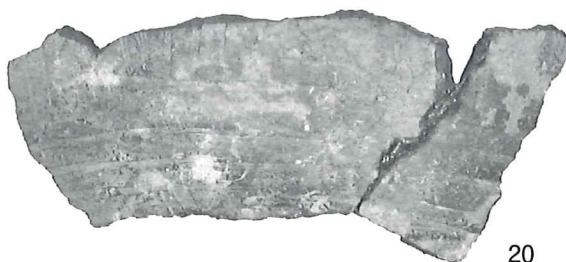
17



18



19



20

出土遺物 (3)



21



24



23



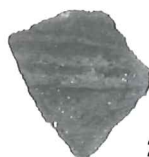
25



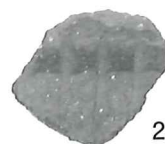
22



26



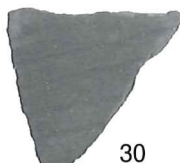
27



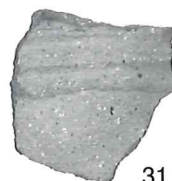
28



29



30



31



32



33



35

出土遺物 (4)



34



36

出土遺物 (5)



37



38



39



40



41



42



43

出土遺物 (6)



44



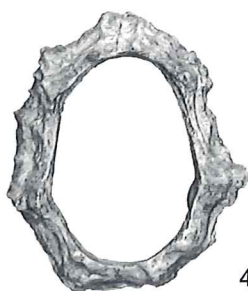
47



48



46



49



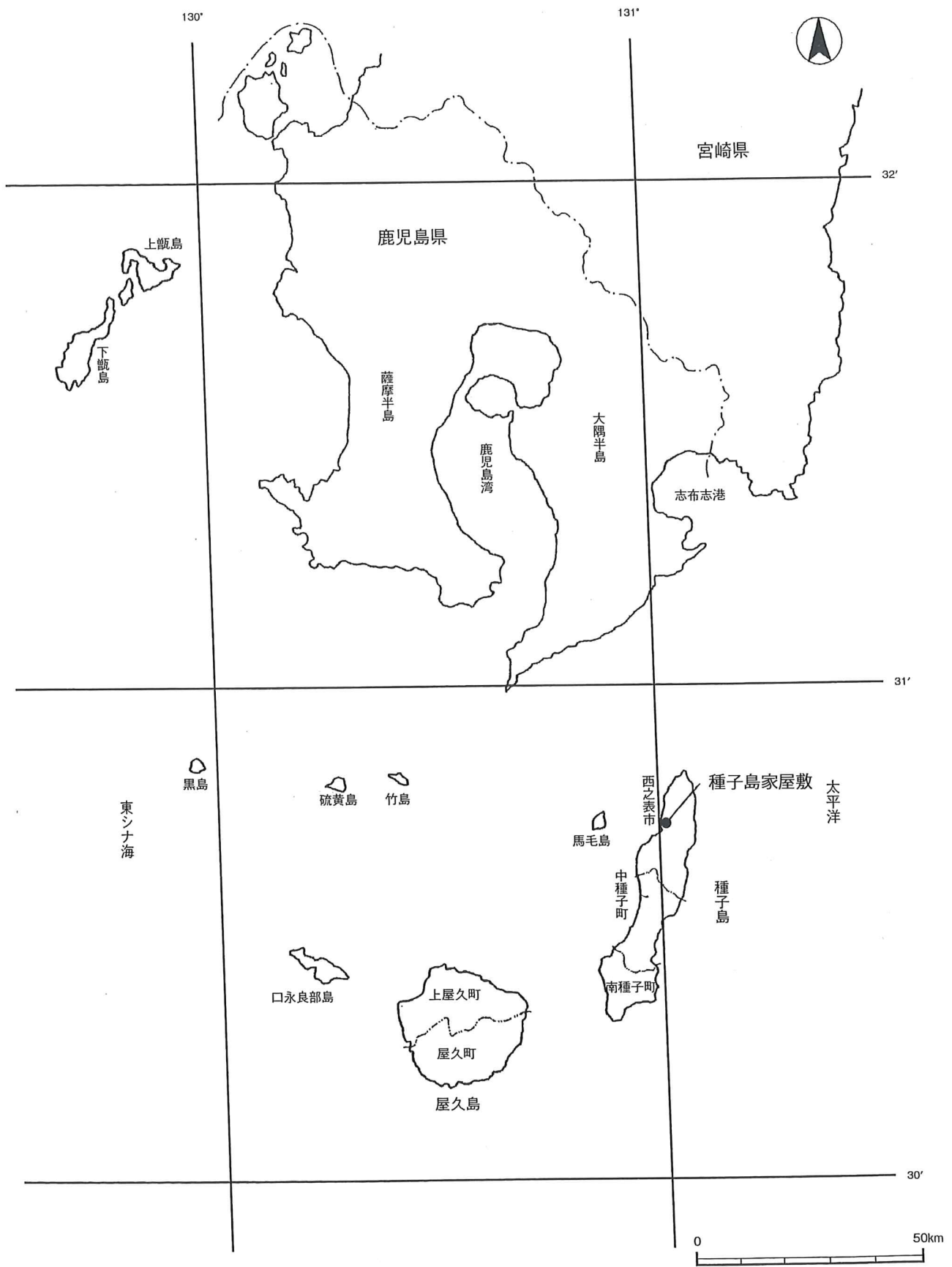
50



51

出土遺物 (7)

種子島家屋敷内



第1図 種子島家屋敷位置図

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

西之表市教育委員会は平成 23 年度から平成 24 年度まで国・県の補助事業を受け市内遺跡詳細分布調査を実施しており、平成 24 年度に種子島家屋敷内と小浜貝塚の調査を行った。武家社会南限の地種子島西之表市に所在する種子島家屋敷は単なる文化財だけではなく、種子島の文化を後世にわたり傳承していく社交の場として赤尾木城文化伝承館月窓亭として生まれ変わった。平成 22 年に一般公開されて以来、市民だけではなく、島内外の多くのお客様に親しまれている。この屋敷は江戸時代中期頃に建てられており、現在では更地となっている敷地内東側部分にも及んでいたといわれる。前任人の聞き取りでその様相を想像することはできるが、不明な点も多く、屋敷に関する文献資料等も残っていないことから、今回この東側更地部分の詳細分布調査を行うこととなった。

発掘調査は西之表市教育委員会が調査主体となり、平成 25 年 1 月 28 日から 2 月 4 日まで行った。報告書作成に伴う整理作業は平成 25 年度に行った。

第 2 節 調査の組織

(発掘調査)

発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教 育 長 立石 望
発掘調査企画	西之表市教育委員会 社会教育課 課 長 奥村 学
	西之表市教育委員会 社会教育課 係 長 沖田純一郎
発掘調査担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主 査 和田 正樹
発掘調査作業員	川村洋子・上妻伸子・小倉美代子・野辺まちこ

(整理作業)

発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教 育 長 立石 望
発掘調査企画	西之表市教育委員会 社会教育課 課 長 中村 章二
	西之表市教育委員会 社会教育課 課長補佐 沖田純一郎
整理作業員担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主 査 和田 正樹
整 理 作 業 員	荒木真紀子・宇都美保子

第 3 節 調査の経過

調査は種子島家屋敷内東側更地部分に 2 カ所トレンチを設置し、表土を重機で除去した後、人力で掘り下げながら調査を行った。トレンチの大きさは遺構及び土層の検出状況に応じ変更するなどした。以下、調査の経過については日誌抄をもってかえる。

1月28日	月	重機による調査地北側部分の整地後，1・2トレンチ設置。2トレンチ表土剥ぎ。2トレンチは当初2m×2mトレンチを3本ほど設置予定であったが，ごく浅い位置からの遺構が多数検出されたため変更し，調査対象地内ほぼ全面に拡張する。
29日	火	1・2トレンチ西側掘り下げ開始。2トレンチ遺物表土内出土，柱穴遺構多数検出。1トレンチ清掃，写真撮影。市文化財保護審議会会長鮫島氏来跡。沖田文化係長来跡。
30日	水	2トレンチ東側掘り下げ。柱穴，溝状遺構検出。2トレンチ清掃，写真撮影。奥村社会教育課長来跡。
31日	木	1・2トレンチ，平板・遺物取上げ。1トレンチ人力にて埋戻し。道具等後片付け。
2月4日	月	2トレンチ重機にて埋戻し。整地作業。本日にて調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と環境

種子島は本土最南端の佐多岬から大隅海峡を隔てた、東南約 40 kmの会場にあり、南北 52 km、東西 12 kmの北北東から南南西に細く伸びた、最高標高でも 282.3m しかない低平な細長い島で、地形は丘陵性の山地、海岸段丘、河川付近の沖積低地からなり、西方に位置する屋久島とは対照的である。また、西海岸部には比較的砂丘が発達しているが、東海岸は断崖に富んでいる。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町と 1 市 2 町からなる。

種子島家屋敷は西之表市の文化財に指定されており、西之表市市街地中心部に位置する。近隣には南側に現在の榕城小学校となっている赤尾木城址や、その西側には旧榕城中学校跡地であるかつて内城と呼ばれた城館址が立地する。このあたりは種子島氏の居城であり、その城下には武士の集住地と役所からなる麓が形成された。

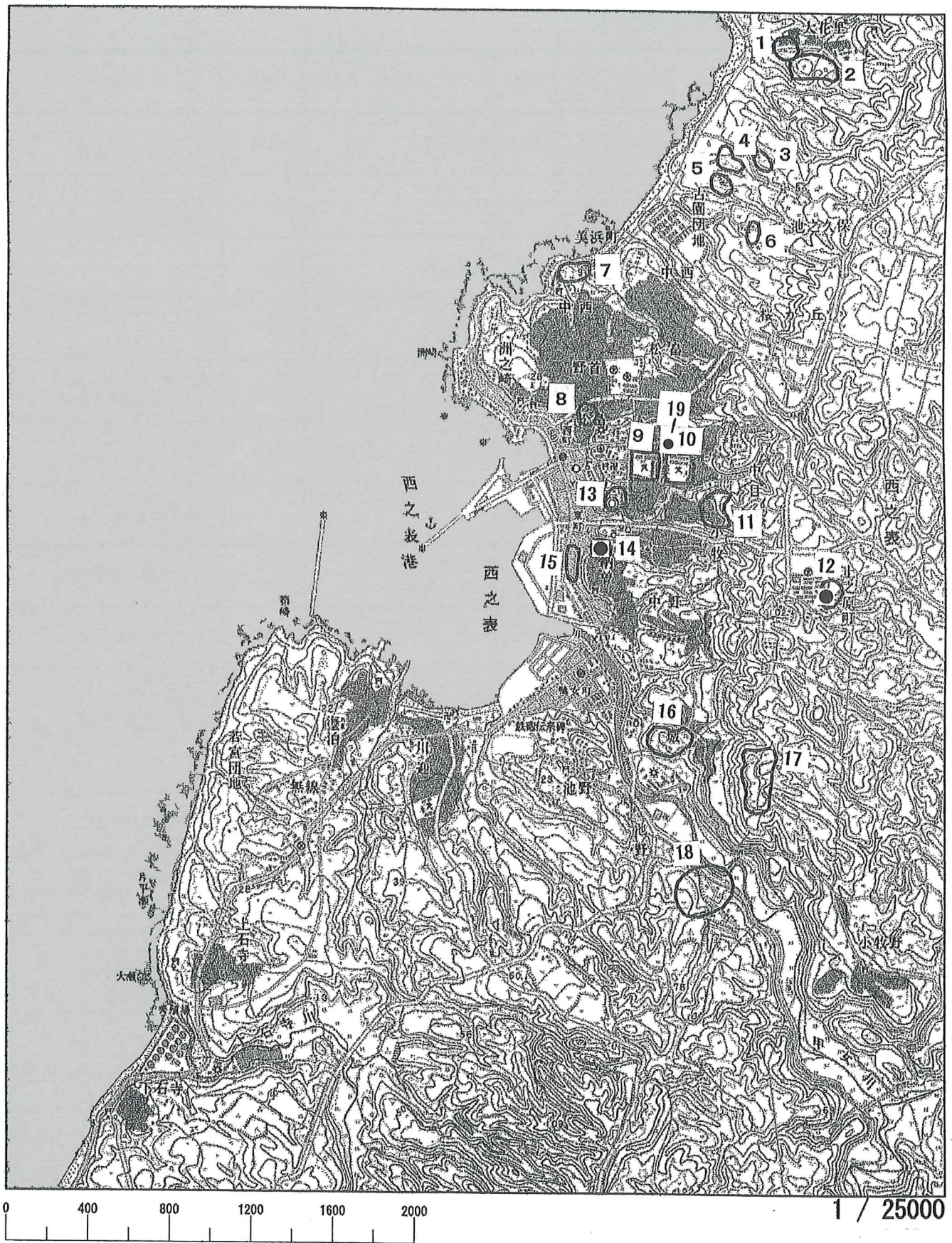
その麓集落のひとつでもあり、赤尾木城址に隣接する種子島家屋敷は元来、種子島家の家臣である羽生道潔が寛政 5 年（1793）にこの屋敷を建造したのが起源である。道潔の孫、羽生慎翁が屋敷で茶道や花道などを鍛錬した後に明治 15 年（1882）花道池之坊の大日本総会頭職に就任して以降、羽生家は東京での生活が中心となった。

その頃種子島氏は、島津氏の命により、寛永 20 年（1643）から鹿児島に移住していた。種子島家譜によると、「明治 19 年（1886）6 月 27 日守時君幼沖にして依るところ無きを以てす。是に至りて讓蔵等、島人らと協議し、守時君をして、しばらく旧臣に依らしめ、その成立を待つて以て家運を挽回せんと欲す・・・」とある。旧臣を中心とする種子島家加勢集団は、版籍奉還という新しい時代に翻弄され、また父である 25 代久尚と兄 26 代時丸の逝去が続き、不遇な幼少期にあった 27 代守時を種子島に迎えるために奔走した。この時、羽生慎翁は住居を東京に移し、種子島の屋敷は空き家となっていたため、明治 19 年 10 月 31 日、守時を慎翁旧宅へ奉迎することとなった。

以来、平成 12 年まで種子島家の屋敷として使用されていたが、所有者の転居により再び空き家となった。西之表市は武家社会南限の地に所在するこの貴重な武家屋敷を平成 20 年に所有者から譲受け、保存・活用に向けた整備改修を図った。平成 22 年 4 月 29 日一般公開以来、今では種子島の文化伝承の拠点・おもてなしの場として、羽生慎翁の号「梅蔭亭月窓」にちなんだ『赤尾木城文化伝承館・月窓亭』という名称で多くの市民や観光客に親しまれるようになった。

敷地内の屋敷東側は更地となっているが、かつてはそこも屋敷が続いていたといわれている。住環境の変化に伴い、現在その部分は失われているが、基礎となる本来の屋敷の様相を解明するため今回、詳細分布調査を実施した。溝状遺構・柱穴・陶磁器など中世～近代にかけての遺構・遺物が出土し、その成果から東側に屋敷が延長していたことが確認されている。

参考文献 種子島の人 柳田桃太郎著（1975 年）



第 2 図 種子島家屋敷と周辺遺跡図

第1表 種子島家住宅周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物	文献等
1	一ノ鳥居	西之表市上西池之窪	砂丘	縄文後期	土器片	H4年 サンオーシャン リゾート分布調査
2	大花里	西之表市上西大花里	砂丘	縄文後期	土器片	S52年 確認調査 「南種子郷土誌」
3	池之久保Ⅰ	西之表市上西池之久保	台地	縄文前期	土器片	
4	池之久保Ⅱ	西之表市上西池之久保	台地	縄文前期	土器片	
5	池ノ窪	西之表市上西池之久保	砂丘	縄文後期	土器片	H4年 サンオーシャン リゾート分布調査
6	松原	西之表市榕城美浜町	砂丘	縄文・中世（室町時代）	土器片	H4年 サンオーシャン リゾート分布調査
7	古城跡	西之表市榕城美浜町	丘陵	歴史		県埋文報告書（43）
8	本城	西之表市榕城松島	台地	縄文前期・後期・ 晩期・歴史	土器片・ 石器類	S34・35年 発掘調査
9	内城跡	西之表市榕城中目	丘陵	歴史		県埋文報告書（43）
10	赤尾木城跡	西之表市榕城中目	丘陵	歴史		県埋文報告書（43） 市指定文化財 H14年詳細分布調査
11	新城跡	西之表市榕城中目	丘陵	歴史		県埋文報告書（43）
12	農林	西之表市榕城上之原	台地	縄文早期・古代		市埋文報告書（6）
13	坂ノ上城跡	西之表市榕城中目	丘陵	歴史		県埋文報告書（43） H6・7・9年詳細分布調査
14	納曾	西之表市榕城納曾	台地	縄文後期	土器片・ 石器類	鹿兒島考古第9号 納曾遺跡概報 鹿兒島考古第12号 S50年発掘調査
15	黒山尻	西之表市榕城池田	丘陵	歴史		県埋文報告書（43）
16	城	西之表市榕城城	丘陵	歴史		県埋文報告書（43）
17	古城跡	西之表市榕城城内	丘陵	歴史		県埋文報告書（43）
18	屋久田城跡	西之表市下西池野	丘陵	歴史		
19	種子島家屋敷	西之表市榕城中目	丘陵	歴史		市指定文化財 H25年詳細分布調査

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 調査方法

調査は平成25年1月28日から2月4日まで実施した。当初は調査対象面積が狭小なため、2×2mの小規模トレンチを3～4カ所設置予定していた。しかし、表土を重機で除去した際、5cmも満たないごく浅い位置から多数の遺構及び明橙色火山灰土（西之表テフラに相当、約7万5千年前）が検出したため、予定を変更し、トレンチを調査対象地ほぼ全面に拡張し調査を行った。またミニトレンチを1カ所設置している。調査面積は約57㎡になった。

第2節 層位

土層は基本的には下記のとおりである。

I層 表土

II層 明橙色火山灰層（西之表テフラに相当・約7万5千年前）

第3節 トレンチ調査状況

各トレンチの調査状況は下記のとおりである。

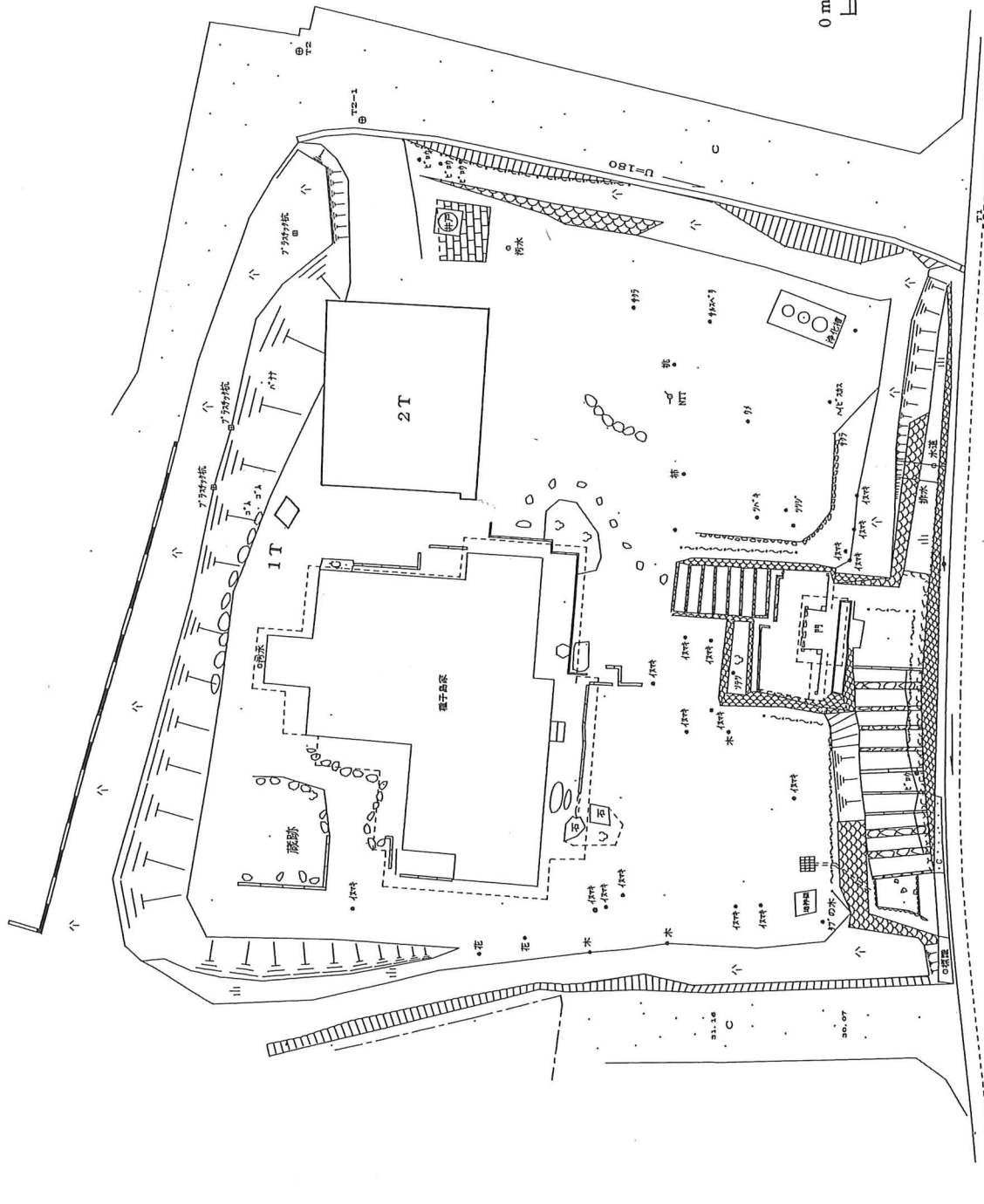
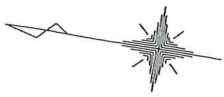
第2表 トレンチ調査状況

No.	トレンチ名	大きさ (m)	深さ (cm)	最下層	遺物	遺構	備考
1	1 トレンチ	1×1	12	II明橙色火山灰層	×	×	
2	2 トレンチ	7×8	5	II明橙色火山灰層	○	○	遺物は全て表土内出土 柱穴遺構の深さは表層より 約15cm 溝状遺構（排水溝）の深さは表層より約25cm

第4節 遺構

敷地内東側更地部分ほぼ全域にわたって拡張した2トレンチから、屋敷の基礎とみられる柱穴列や溝状遺構が確認され、表土下位の明橙色火山灰層を掘り込んだかたちですべて検出されている。

特徴として柱穴 SP01～12 は、砂利を多量に混入させており、さらに注視すると細かな貝殻片が含まれていることから海砂利を利用しているものと思われる。柱穴は北東に伸びて配列しており、それぞれの大きさは平均して50cm大前後、深さはSP02の半裁カット調査から全体的に約15cmと思われる。ただし、中央部の柱穴 SP02・SP08 はともに直径1m前後と周囲のものより大きめであり、その配置から大黒柱用柱穴と考えられる。また、北側に配置する柱穴 SP06・SP09・SP10・SP12 は5～30cm大と様々な

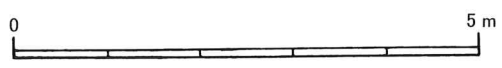
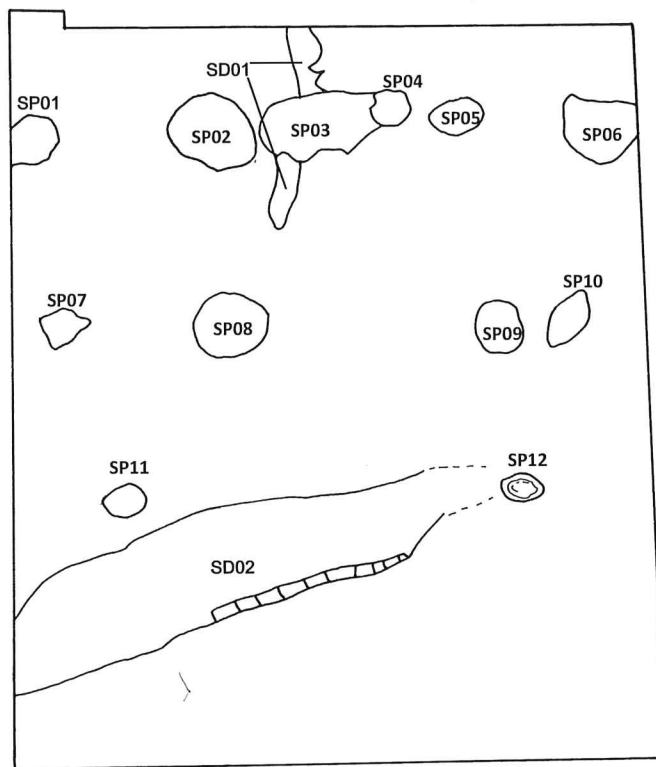
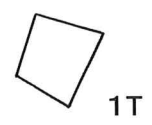


市道 西町松下線 至 上之原

街区基準点 H=29.632

①T-1

第3図 トレンチ配置図



第 4 図 遺構検出状況

砂岩礫や瓦片，サンゴ石で構成する配石等が各柱穴内に点在する。SP03 についてはほかのものとは異なり，柱穴中央に切石を 4 つ組み合わせて並べ，その周囲に砂岩礫 3 点・サンゴ石 1 点を配置している。茶席用炉壇の基礎石と思われる。

SD01・SD02 は溝状遺構である。SD01 は長さ 2.2m，幅約 20 cm で柱穴群と内容は変わらないが，その性格は不明である。SD02 は長さ約 5.4m，幅 45 cm～120 cm で，遺構内東側中央部分に南北に延びて配置された半裁瓦が 10 点検出された。軒下に掘られた排水路と思われる。深さは 25 cm ほどである。

すべての遺構は，完掘は行わずに調査終了後，埋戻し現状に復した。

第 3 表 遺構一覧表

遺構No.	大きさ (cm)	所 見
SP01	50×50	砂利や貝殻片が多量に混入している。
SP02	80×80	砂利や貝殻片が多量に混入している。
SP03	50×130	砂利や貝殻片が多量に混入し，中央に約 20cm 大の切石を 4 点配置し，周囲に同じくらいの大きさの礫 3 個，サンゴ石 1 点配置する。
SP04	40×30	砂利や貝殻片が多量に混入している。
SP05	30×60	砂利や貝殻片が多量に混入している。
SP06	60×65	砂利や貝殻片が多量に混入し，中央に拳大ほどの礫 5 点，サンゴ石 1 点中央に出土。
SP07	35×50	砂利や貝殻片が多量に混入している。
SP08	55×75	砂利や貝殻片が多量に混入している。2cm～5 cm 大の礫を数点含む。
SP09	45×40	砂利や貝殻片が多量に混入し，5cm～10cm 大の礫 2 点中央に出土。
SP10	60×40	砂利や貝殻片が多量に混入し，周囲には瓦片，5～30 cm 前後の様々な礫 30 点ほど散在する。
SP11	28×40	砂利や貝殻片が多量に混入している。2cm～5 cm 大の礫を数点含む。
SP12	25×40	砂利や貝殻片が多量に混入し，30 cm 大の礫が 1 点出土。
SD01	長さ 2.2m 幅約 20 cm	SK03 を縦断し，若干ずれるかたちで溝状遺構が検出される。内容物は柱穴遺構と変化はなく，性格不明。
SD02	長さ約 5.4m 幅 45 cm～120 cm	南北に横断するかたちで溝状遺構が検出される。北側の始まりは不明瞭である。東側中央に半裁平瓦を大小 10 点，整列配置される。

第5節 遺物

遺物は調査の結果、陶磁器類、瓦片、甕片等パンケース1箱分出土した。いずれとも2トレンチの表層から出土した遺物である。

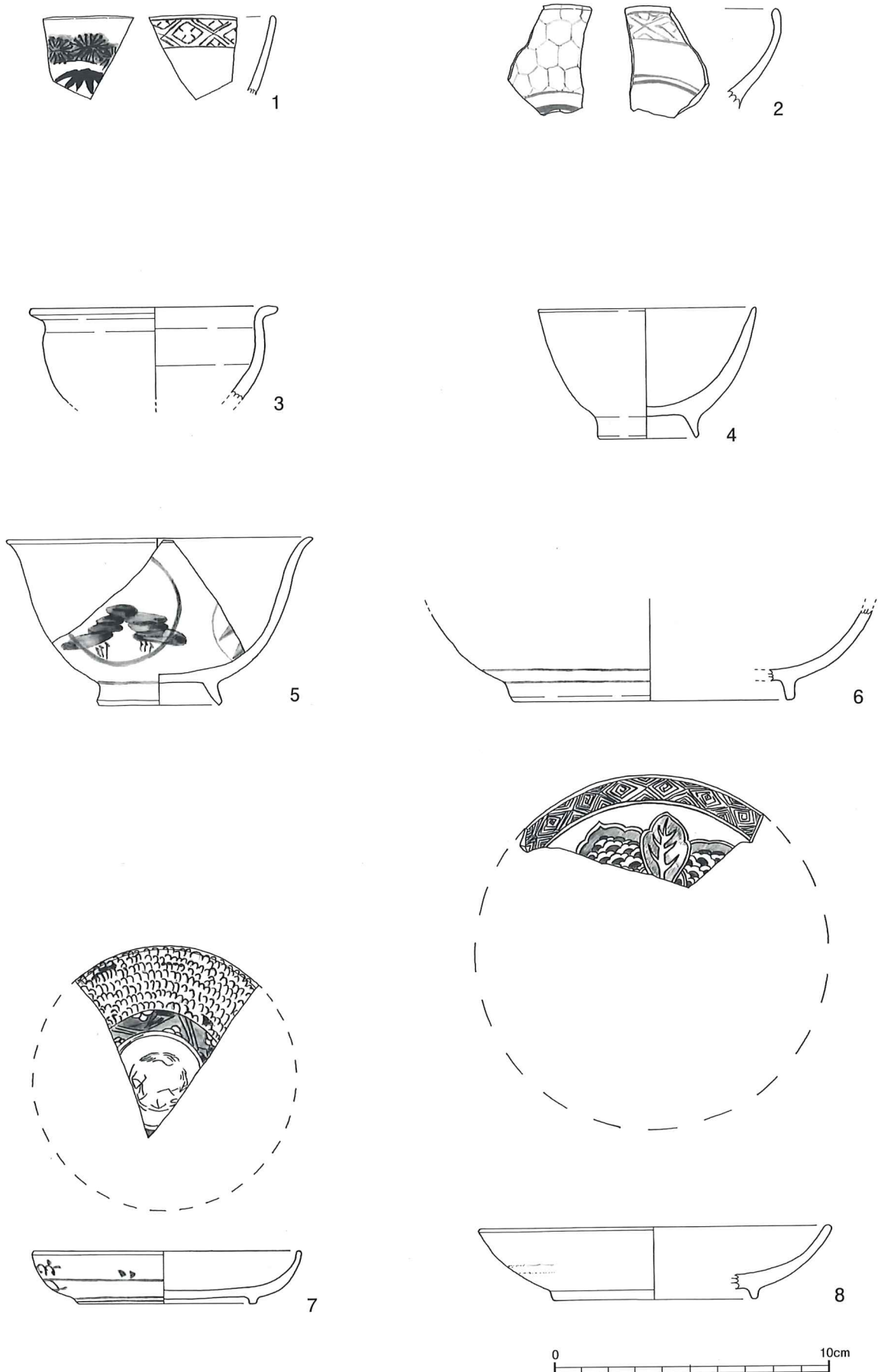
1～8は磁器で、近代以降のものが主体であるが、9・10は染付を施した16世紀後半のものと思われる。11～13は甕片である。近代以降の種子島ではよく見られる焼締めの陶器のひとつと思われ、外面は薄い緑色の自然釉（灰釉）が観察される。11は底部付近の甕片で、内面底を3カ所に集中してヘラ状の工具で縦位に深く、力強いケズリを施している。12は口縁部、13は底部でともに内外面に自然釉（灰釉）が観察される。14・15は瓦片である。14は作りが粗雑な半裁平瓦で、15は欠損部分多いが、巴文を呈した軒丸瓦である。

第4表 遺物観察表(1)

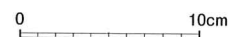
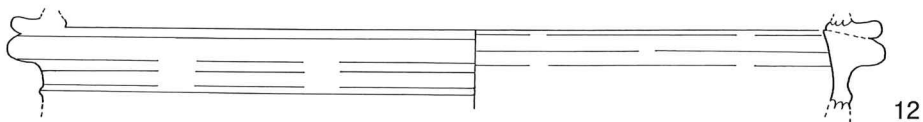
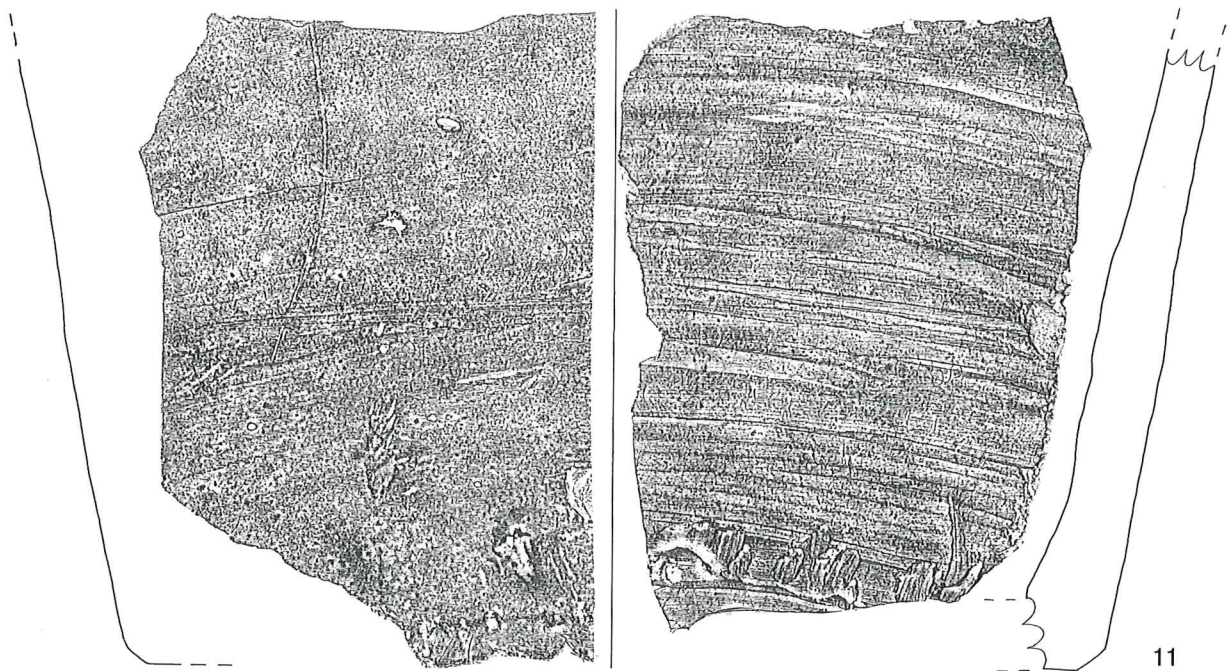
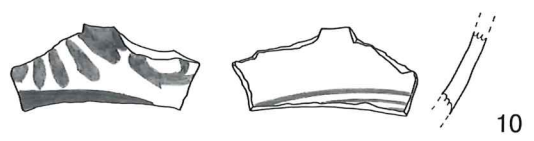
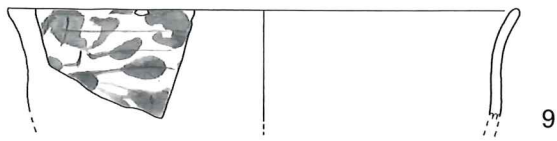
挿図	番号	取上番号	種別	器種	法量	形態の特徴
5	1	2T 9	碗	磁器	—	体部は丸みを持って開いて立ち上がる。
	2	2T 11	碗	磁器	—	体部は丸みを持って先端部は内湾する。
	3	2T 7	香炉	磁器	口径—9 cm	体部は丸みを持って先端部は平坦にくの字に外反する。
	4	2T 13	碗	磁器	口径—7.8 cm 底径—3.6 cm 器高—4.7 cm	体部はやや丸みを持って立ち上がる。
	5	2T 2	碗	磁器	口径—11.0 cm 底径—4.5 cm 器高—6.0 cm	体部は丸みを持って先端部は緩やかにラッパ状に開く。
	6	2T 10	皿	磁器	底径—10.4 cm	体部はやや丸みを持って立ち上がる。
	7	2T 3	皿	磁器	口径—9.6 cm 底径—6.5 cm 器高—1.9 cm	体部は丸みを持って立ち上がる。
	8	2T 14	皿	磁器	口径—12.8 cm 底径—7.4 cm 器高—2.6 cm	体部はやや丸みを持って立ち上がる。
6	9	2T 1	碗	磁器	口径—13.8 cm	体部は丸みを持って先端部は緩やかにやや外反する。外面・内面ともに染付を施す。
	10	2T 12	碗	磁器	—	体部はやや丸みを持って立ち上がる。外面・内面ともに染付を施す。
	11	2T 4	甕	陶器	—	平坦な底部からやや開いて体部は立ち上がる。外面ヨコハケ。内面ヨコハケ後、底部に所々縦位にヘラケズリ。外面は自然釉が全体的掛かる。

第5表 遺物観察表(2)

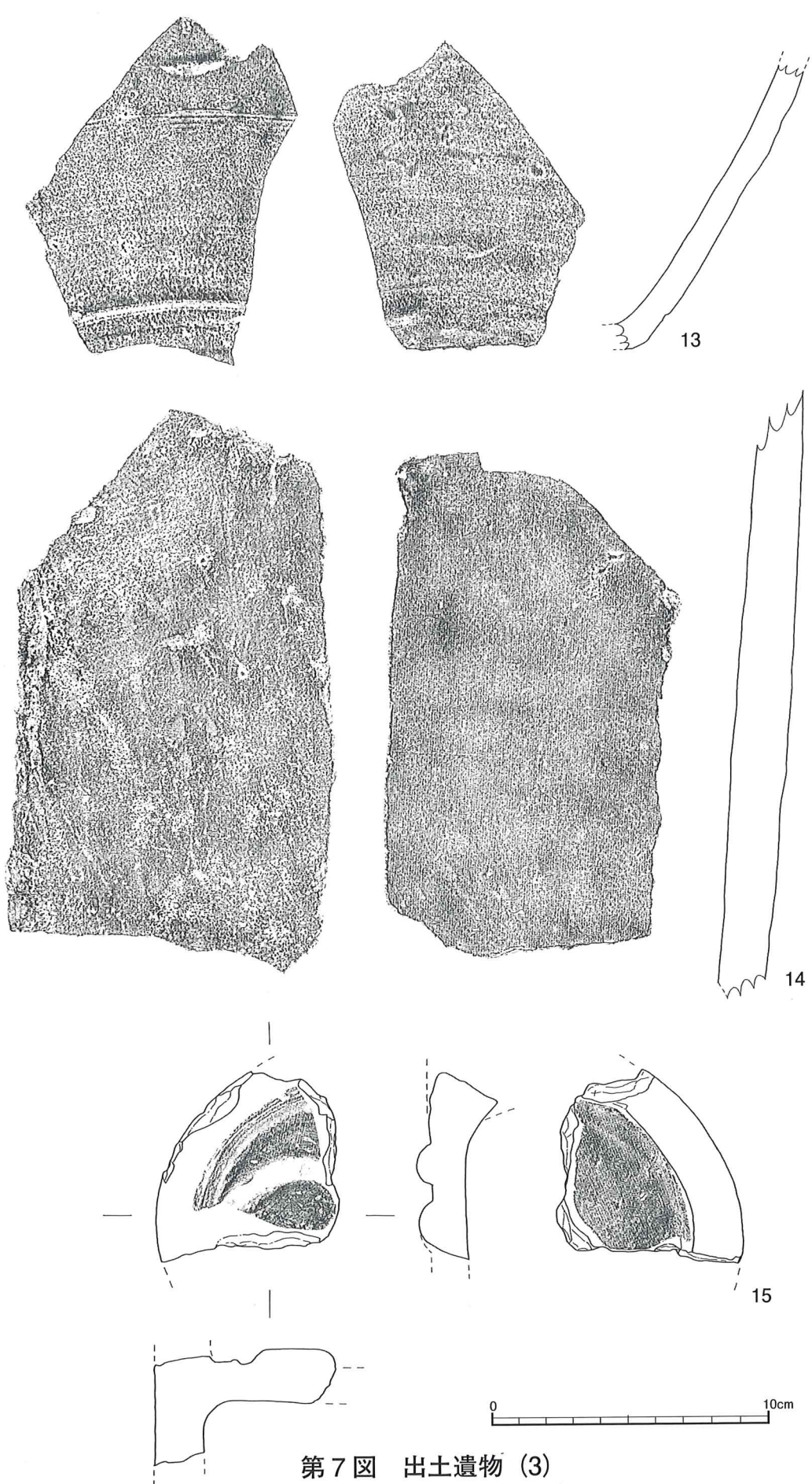
挿図	番号	取上番号	種別	器種	法量	形態の特徴
6	12	2T 8	甕	陶器	口径-51.2 cm	先端部は肥厚し、平坦にくの字に外反するが、さらに二段積みあがる。外・内面ヨコハケ。自然釉が外・内面所々掛かる。
7	13	2T 6	甕	陶器	-	体部はやや丸みを持って立ち上がる。外・内面ヨコハケ。自然釉が外・内面所々掛かる。
	14	2T 5	平瓦	-	現存タテ-20.3 cm 厚 さ-2.0 cm	平瓦半裁したものと思われる。焼成やや不良。
	15	2T 14	軒丸瓦	-	現存タテ-6.9 cm 復元径-13.2 cm 厚 さ-1.8 cm	欠損部分が多く不明瞭だが、文様は巴文と思われる。



第5図 出土遺物 (1)



第6図 出土遺物 (2)



第7図 出土遺物 (3)

第IV章 調査のまとめ

第1節 遺跡の範囲等

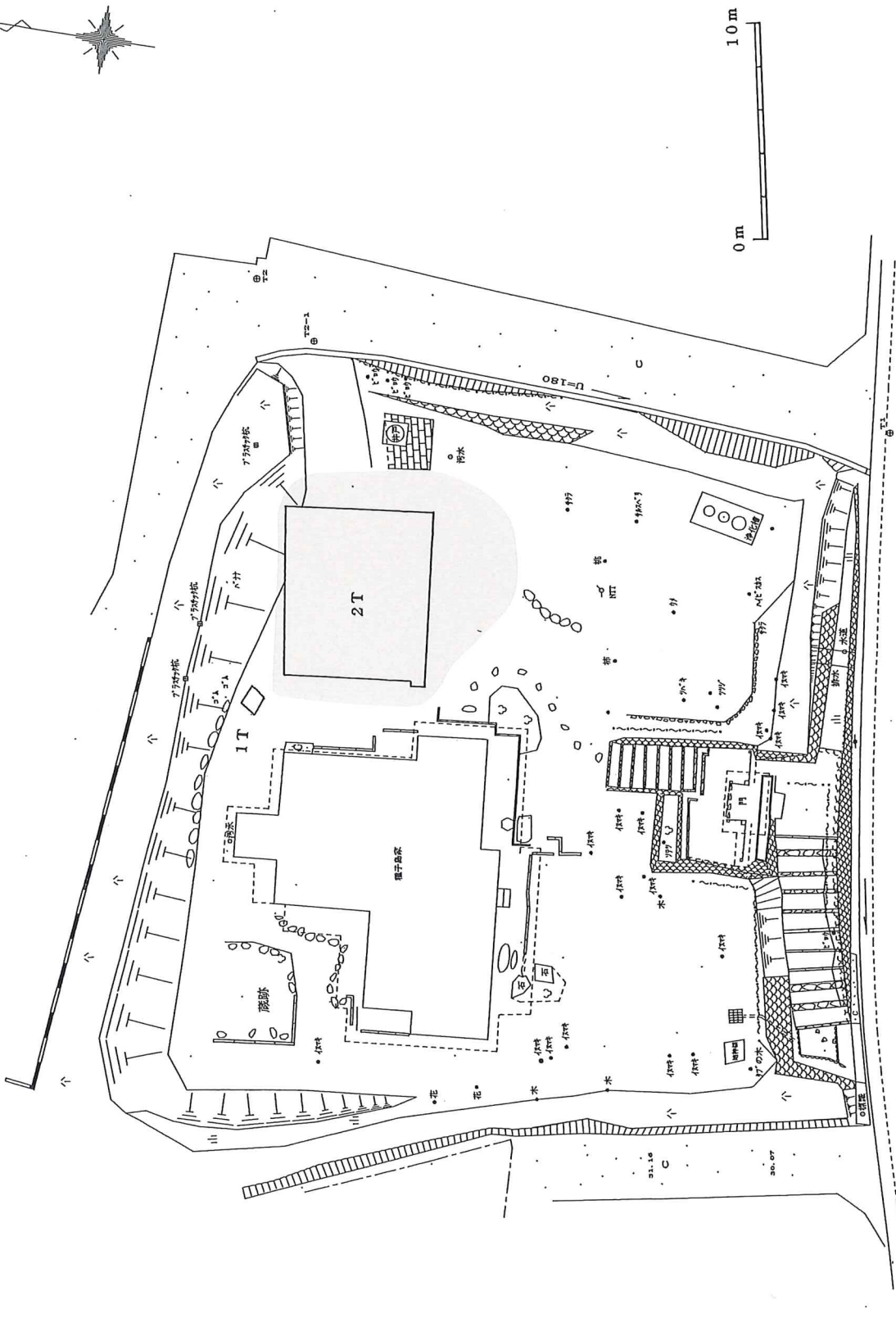
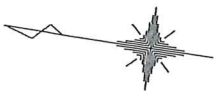
調査の結果、現在の敷地内東側更地部分は屋敷建築以降の改築に伴う整地等により、かなり削平を受けているものの、屋敷の基礎部分に関連した遺構等が残存していることが判明した。また、これらは現存する屋敷の基礎に延長し配列されていることも確認された。

第2節 調査のまとめ

種子島家屋敷内において、中世から近代に至る遺構・遺物を確認できた意義は大きい。敷地内周辺の環境から調査範囲が限られたため、遺構・遺物を種子島家・羽生家との関連性を見出すためには、さらに範囲を拡張して調査を行う必要がある。しかしながら、かなりの削平と遺物の表層内出土という結果から建築時期の特定はできなかったものの、既存の屋敷に延長して柱穴・溝状遺構が残存しており、これらは東側更地部分まで及んで屋敷が存在していた証であり、遺構の分布状況からおおよその範囲を知ることができた。

また他にも特筆すべき点は、16世紀後半の陶磁器が出土したことである。小片のため判別し難いが、特徴から中国産磁器とも考えられる。前居住者である羽生家は種子島家の家臣であり、寛政5年(1793)に羽生道潔が建てたこの屋敷で花道のみならず茶道においても専念し、明治期に孫である慎翁が池之坊大日本総会総会頭職として活躍するまで修業を重ねていた。このことから、花器及び茶器にも精通し所持していたかもしれない。もしくは、屋敷に関する文献等が現存しないため推測にすぎないが、羽生家が敷地内に屋敷を建てる以前に、役人等の高官が居住し所持していた可能性も考えられる。

今回の調査でこの貴重な遺構・遺物が出土したことにより、未解明な点が多かった種子島の中世以降の様相を探るための大きな手掛かりとなった。



西町
至 上之原

市道 西町松下線

街区基準点 H=29.632

第8図 遺構等残存範囲

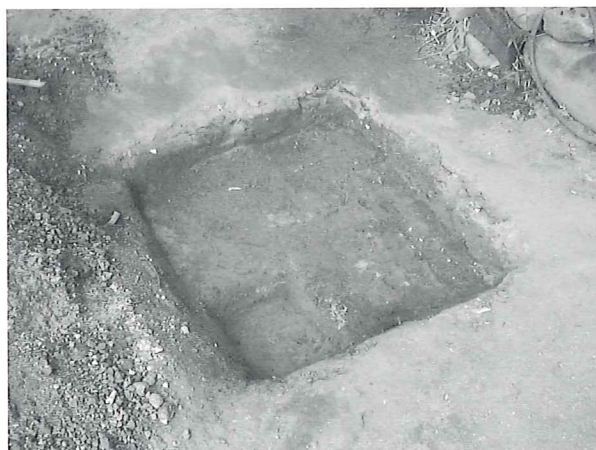
写真図版



調査現況



調査地遠景



1トレンチ調査状況



2トレンチ調査状況



2トレンチ調査状況



SP01検出状況

調査状況 (1)

図版 2



SP02検出状況



SP03・SP04・SD01検出状況



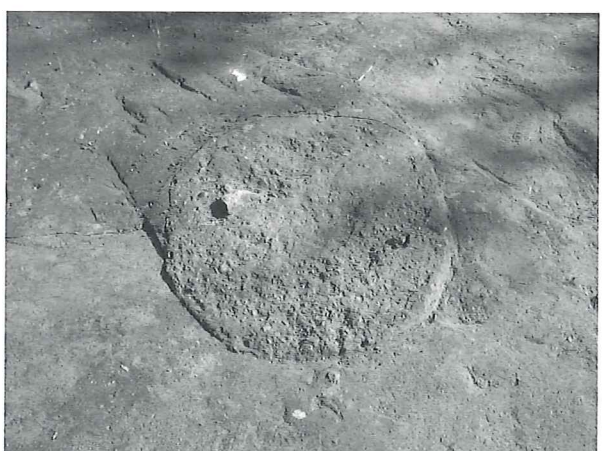
SP05検出状況



SP06検出状況



SP07検出状況



SP08検出状況

調査状況 (2)



SP09検出状況



SP010検出状況



SP011・SP02検出状況

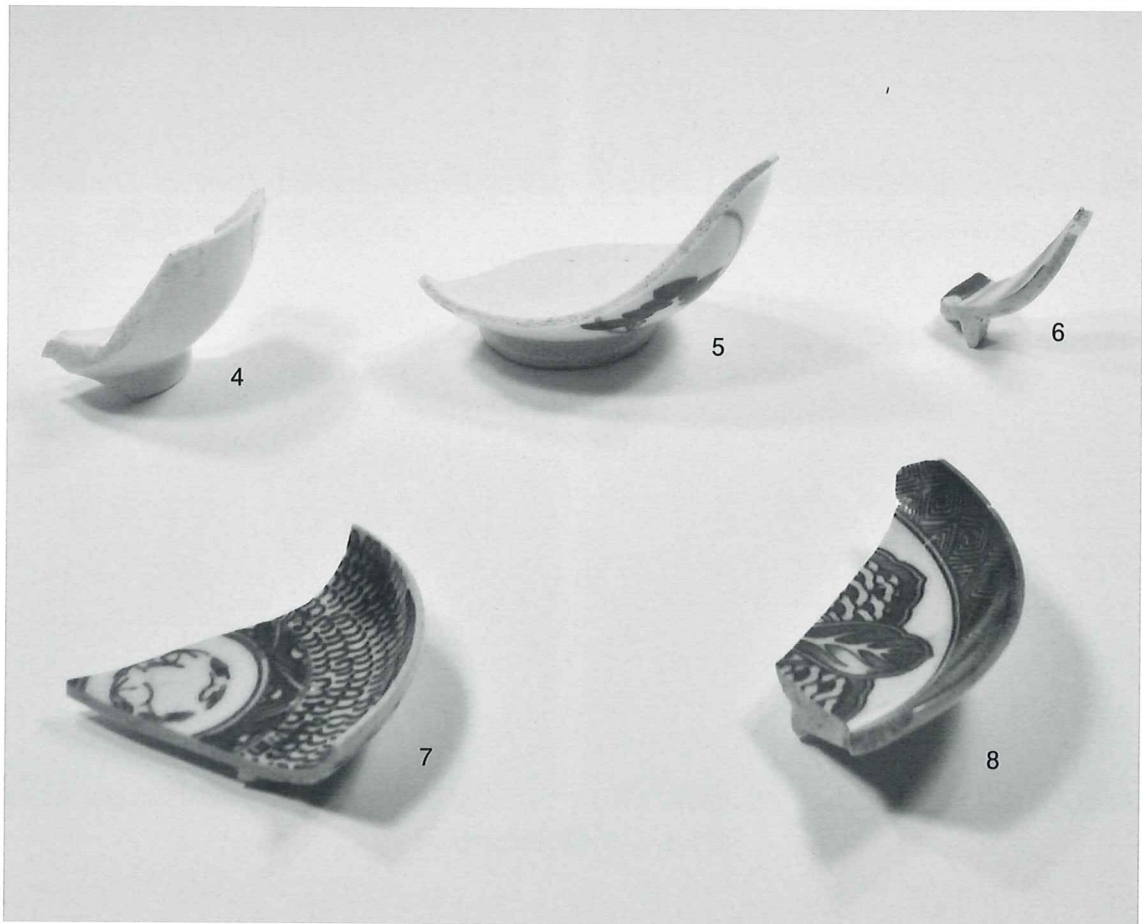
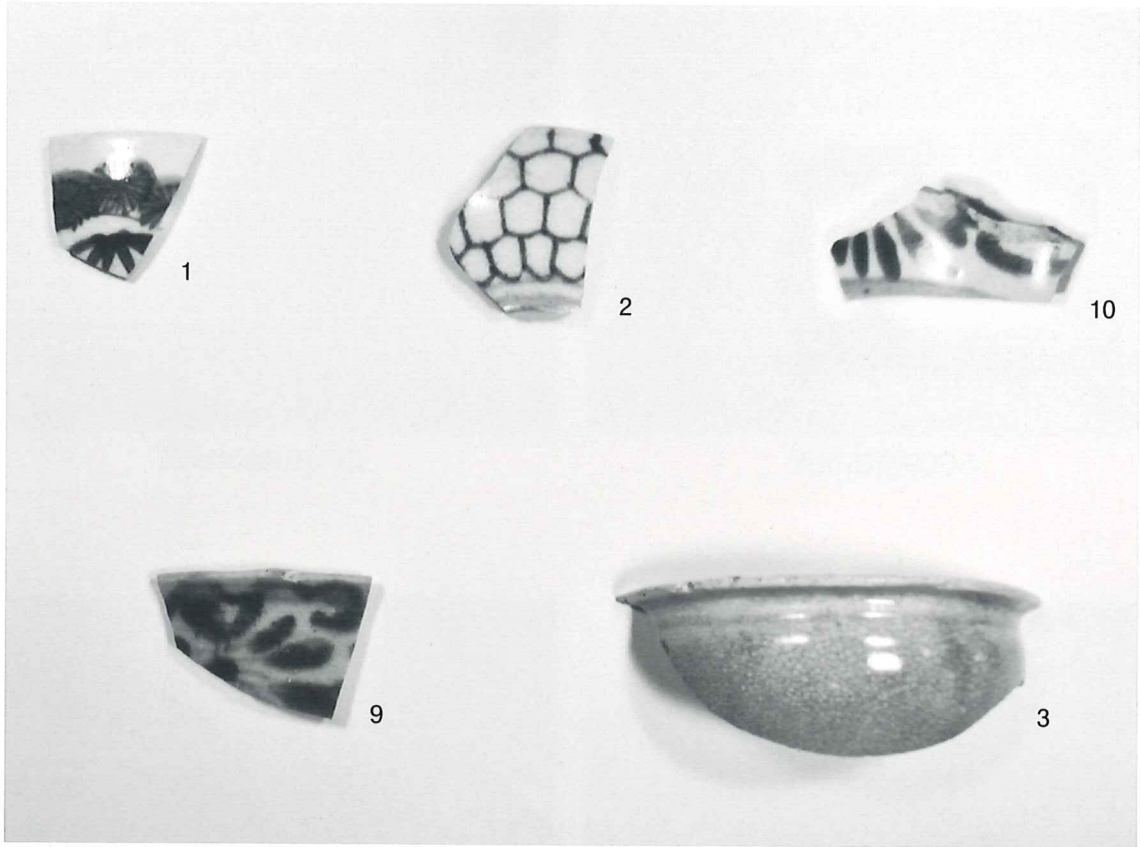


SP012・SP02検出状況



2トレンチ遺物出土状況

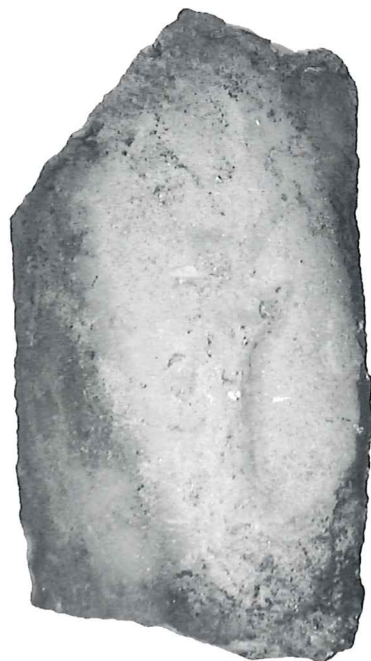
調査状況 (3)



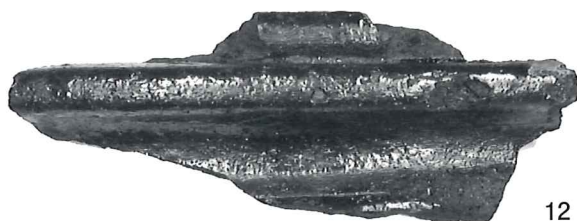
出土遺物 (1)



11



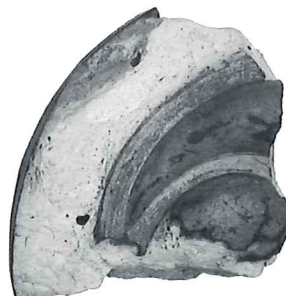
14



12



13



15

出土遺物 (2)

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書 (26)

奥ノ仁田遺跡・長迫遺跡・二石遺跡・小浜貝塚・種子島家屋敷内

発行日 2014年3月20日

発行 鹿児島県西之表市教育委員会

〒891-3193 鹿児島県西之表市西之表7612番地

TEL 0997-22-1111

印刷 (有)種子島新生社印刷

〒891-3101 鹿児島県西之表市西之表16736-1

TEL 0997-22-0476